

《翻 訳》

翻訳：ジョン・プレブル著 『ダリエンの大惨事』（9）
「第4章 世界への扉」¹

渡 辺 邦 博：訳

前稿では、ダリエン計画の根幹部分であった南米からの撤収が描かれていたが、本稿では、昨年末に粗稿が完成したダリエンの大惨事の（9）に相当する部分を掲載する。原著で言えば半ばを過ぎ、ここに掲載する第4章以下相当部分を終われば、残りは数章とは言え、わずかの分量でしかない（第6章と第7章を合わせても30ページほどしかない）。1点、読者の中には、ルビの形で言語を表記してきた方法が煩雑で、むしろ訳語の後ろに元テキストを表記した方が読みやすいとのご指摘もあった。本稿ではそれを採用した箇所もあって、混在の誹りを免れないが、進行中との事情をお許しいただければと考えている。拙訳の完成も遠くない予定である。ただ、かなり前に発表した本書冒頭部分と、いわゆる登場人物のリストは、その後の理解を反映させて若干の改訳を施してゴールとしたい。

さて、これに取りかかったのは、2011年から2012年頃、私事に渡るが、

1 全世界の扉？ここでの universe はどんな意味か？ ダリエンが、スコットランド人たちにとって、いわばハブとなって、世界へ進出する扉、世界とは言っても、せいぜいのところ、彼らには太平洋は射程になく、大西洋を念頭にした世界への扉を建設するのが意図だっただろう。航海技術からしても、羅針盤は存在しても、経度法も存在せず、船を中心とした乗り物に依存する状態で、地球上のあらゆる箇所を世界と認識はしてなかっただろう。その意味では、スエズ運河建設の時代にはまだ1世紀半必要だったと思われる。

身辺穏やかならない状況で、ダリエンを含む状況に、自らを重ねてこの仕事を思い立ったのだった。

さらに、昨年12月に追い討ちも加わって、一時は掲載を休止とも考えたが、かろうじて入稿に駆け込んだ。完成させることによって、諸事にわたる不備を訂正して、歩み続けたい。

本稿は、原著 John Prebble, *The Darien Disaster*, 1968 の 217 から 286 ページに相当する。

第4章 世界への扉 The door of the Seas²

「西の空に日の出を見るのは素晴らしいだろう」

エディンバラとロンドン、1699年1月から8月

2 本章のタイトルを、当初の解釈から変更して「世界への扉」(「海からの入り口」の案も考えた)と解したのは、ダリエンという立地の解釈を変更したからである。ダリエンは、私たちが知るパナマ運河とはそう離れてはいないが、それとは立地が異なる。パナマは、その建設にあたり地峡を開削して、文字通り太平洋と大西洋とを結ぶ運河となった。それに対してダリエンは、重要な位置にはあるが、太平洋に至るにはダリエン地峡を越えなければならず、地峡に至っても人の手が未踏に近い部分を残しており、バブと言えなくもないが、それは基本的に大西洋地域、旧ヨーロッパ大陸と、アフリカ、南北のアメリカ諸地域を航行する船舶のハブとは言える。それでも、広大な交通圏を睥睨する重要な地点であるのには変わりがないので、渡航者たちの思惑に大きな過ちがあったとは言えない。彼らの認識に不足があったとすれば、スペイン、フランスなどと未だ独立国であったスコットランドと、さらにイングランドとの勢力諸関係と、すべての国々に共通する南米赤道近傍の気候諸条件に対するものであっただろう。もう一つの代替案として最後に構想した「海からの入り口」は、現地の地図を参照したことから来る。原著 141 ページには、ダリエンの立地を表する地図がある。それは、第一次遠征隊の顛末が記述された箇所を翻訳するのに少なからず役に立ったが、パナマ地峡の東付け根に入り込んだカリブ海を北に臨む内海、湾を挟んで東西にのびる現在のコロンビア領内の南米大陸北側に位置する領域である。遠征隊が拠点を構築したのは、この湾の北東部の湾内に突き出た陸地、半島部分であった。陸地沿いに東に行けばスペインの勢力範囲であったカルタヘナに至る。彼らはこの半島部分に地形を生かした砦や町を構築しようと格闘を繰り返したことになる。つまり、ダリエンは、カリブ海への入り口として、南米大陸を後背地として建設されるはずだったのである。

このダリエンは、パナマのように太平洋を視野に入れたとは見なしにくく、上記のような南北アメリカから見て東の広大な海域を念頭に入れた場所であったと考えるから、このような訳語の解釈となったのである。

ロンドンでは、法務長官 Attorney General が、東ニュージャージーの幾人かの certain 利害関係のある臣民たちになり代わって、彼に投げかけられたある問題に対する彼の返答を考慮中であつたが、そこはあるスコットランド人が最近総督 Governor に指名されたところなのであつた。大体、一介のスコットランド人が、この入植地でそのような職務 office につくのが可能だったのだろうか、その男は詐欺や濫用を規制する例の法律によって、その場所から資格剥奪になつたのではなかつたのか？ トマス・トレヴァ Thomas Trevor < BBC > 脚³が、彼の所見を表明したのはようやく3週間の後だつた。「曰く、生まれながらのスコットランド人なら、法令により、かの入植地のどこの総督に任命されるのも可能だし、仮に彼がイングランドで生を受けていた場合と変わることなく、当人は、法の判断と解釈に照らせば、生粋のイングランド臣民となるべきだ、と」。

エディンバラでは一月の最後の週に、（彼らがイングランドの臣民だということを耳にして、彼らの残りの同郷人たちと同様に怒り心頭となつたと思われる）あの会社の理事たちが、ブリガンチンのディスパッチ号の船長アンドルー・ギブスンに対して最終的な指図^{instructions命令}を与えるところであつた。急いで食糧などを求めて、マデイラからの評議員会による書簡を受け取つた後の3カ月というもの、彼らは遂にはビスケット、小麦粉、ポーク、干物の魚、油脂やブランデーなどからなるささやかな貨物を送致していた。ギブスンへの命令は、彼の小さな船を操り、ダリエンへのできるだけ迅速な航路を使って彼の小さな船を出し、いかなる国の軍艦からも攻撃を受けることなく、やむを得ない場合には兵器の力で自衛を行うことであつた。彼と共に、今では病から快復して、その兄弟

3 Trevor, 不詳。BBC、頻出する BBC とは、*BBC Pronouncing Dictionary of British Names*, 1983.

に合流するのを切望し、カレドニア評議員会に席を占めることを願っている、ウィリアム・ヴェッチが船出をした。このブリガンチンは北方航路を切り抜けたが、ヘブリディーズ諸島を南下する時に強風に襲われ、遂にはアイレイ島海岸から2マイルの沖に位置するテクサ島⁴近傍で難破した。そして、運搬するものはすべて失われ、その乗組員たちは着の身着のまま海岸に泳ぎ着いたのだった。

< p.218 >翌月には、この会社は別の小船、リースのマリオン号の購入にゆっくり着手した。その船は、その船主がこの船とくたもとを分かつて決別するのを遂には説得された時、・・・つまりは歳月を数えてみると15年か16年経っており、その際に残る部品を自分用にとっておくという船主の思慮深い見通しは誤っていたことにはなったが、船名をオリヴ・ブランチ号と変更した。その船はまもなくリース・ロードで勅許状を受けた船、ハウプフル・ビニング号に合体された。天候が改善すると、たくさんの荷を積むはしげが、船倉をビスケットの樽 cask や、エイル、引き割り meal、タバコ、干しぶどうや砂糖の桶 barrels、布の束や金物類 hardware の入れ物で一杯にし始めた。

この植民地を増援するに際しての遅れのほとんどは、あれこれに対するこの委員会^{committees}の驚くべき自己満足に原因があったが、そのため、制御可能な事例も少なくなって、理事たちはデスパッチ号で運ばれた書簡類の中でそのことに言及していた。「貴殿たちの出発以来、当地でも穀物や食料が不足しており、そのおかげで当然のことだが、食糧不足や欠乏に至っております」。スコットランドは、さらに飢饉、窮乏さらには流行性の疾病に一層近づくことになった。当地のためにもほとんどないことになって、今となっては、近頃絶版となったウェイファ氏の書物に描かれたような豊穡の喜びを味わっているに相違ない、遠く離れたところの

4 アイアランド北方沖、スコットランドのアイレイ島南部の小島。

冒険者たちにそのいくばくかを取っておくことにも事欠くことになった。株式保有者たちは、無関心ではないにしても、この会社にご忠信で、ほとんど例外なく、キャンドルマス^{subscriptions} 5の寄付に対するこの会社の第3回目的の要請にも応じたのだった。その見返りとして、そうした信心への報いとして、理事たちは最初の要請<払込>に対する慎ましくわずかな^{dividend}配当を発表したのだった。

どのような疑いに対してであれ、それを上回る強力な励ましが、この会社の繁榮^{physical, 具体的なmanifestation}の目に見える表現としての、ライジング・サン号であった。ガー・ロッホ^{Gair Loch} 6の河口にまだ係留されてはいたが、その素晴らしい輪郭と輝く船体とは早春の太陽に照らされて気高く輝いていた。その姿と、彼女<ライジング・サン号>と共に、まもなく出帆する別の者たちの想いとが、奥ゆかしいことに名もない名譽ある淑女^{Lady of Honour}を感動させ、『雄々しいスコットランド人たちによる、かの気高くダリエン>事業に携わったすべての者たちの称賛を得た、黄金鳥ないしはダリエンの唄』と彼女が呼ぶところの、軽快な^{定型詩}スタンザをいくつか構想させたのであった。

われわれには、出発に備えたもう一つの船団がある
 主がそれらを俊足で後押ししてくださるのは必定
 ご笑覧あれ素晴らしい
 陽は西に昇る

5 カトリックの聖燭祭、聖母お潔めの祝日、英国国教会では被献日、処女マリア被潔日：2月2日；御子キリストに神殿をささげ、聖母マリアが潔めの式にあずかったのを記念するキリスト教会の祝日；Candlemas Day⇒この日にカトリック教会では教会で使う1年分のろうそくの祝福式・行列がある。ろうそくの光はキリストが"the light of the world"であることを象徴する。

6 ガーロッホは、西ハイランドの湖沼か？

< p.219 > ある者たちは高貴な人たちで、全員が崇高で
 主はそなたたちの会社を祝福する
 そして、スコットランドの名前に、君たちの名誉を、
 地表と海の広がる限り

気高き高貴の者たちの友がらや縁の者たちはすでになくなった。しかしながら、何であれ彼らに降りかかったことに驚きながら、アリグザンダ・ハミルトンがイングランドから急ぎで戻った3月25日に彼らの懸念は大きくなって、途方もない喜びに雪崩れ込むこととなった。彼は、あの植民地からの、書簡類や速達便の封印された大きな包みを携えていたが、ミルン・スクエアの入り口では、^{f e v e r - y e l l o w}黄色ばんだ顔をちらりとでも見ようと、こわ高く叫ぶ男女の群衆が彼を待ち構えていた。彼はブリストルから急いでやってきたのだった。そこは東インド<会社>の船がこの男を降ろした場所で、彼が朗報をもたらす所存だったのみならず、イーケットのカニンガム^{M a j o r}少佐を追い越そうとやきもきしていたのであった。彼は安堵した理事たちから暖かく挨拶を受けたが、彼らは彼に仔細に質問をした後、彼らが妥当だとみなした速達便をあるだけ公にした。決着 *Resolved*、とその覚え書きに、ローデリック・マッケンジは書き込んだ。

・・・^{C o u r t}本会議は、上記アリグザンダ・ハミルトン氏が、この朗報をもたらした最初の人物であることに^{a c o m p l i m e n t o r d e r}賛辞を表わすべきこと。

^{R e s o l v e d}決議、本市とその近郊に属する^{M i n i s t e r s}方々は、^{t h e r e o f}それによって、この朗報を知るところとなり、とどのつまり、彼らの慎みの表れとして、この機会に、全能の神に対して衆目の認める、心からの感謝をお返しすることができることとなった。

ハミルトンに与えられたこの賛辞^{compliment}は、100ギニー⁷の報奨金^{a purse}であった。さらに、彼はエディンバラ滞在中、週に2ギニーも授与されることになった。感謝と喜びの証^{token}拠[<]くしるし[>]として、この都市の市政機関^{corporation}は、彼に、市民^{burgess}とギルド組合^{guild-brother}の一員の資格を与えた。2日後、件^{dispatches}の速達便^が余すところなく検討された後で、この理事会は、^{Lord Chancellor} 大法官、^{Lord Provost} 市長、^{Governor of the Castle} かの城の長官に使節^{deputations}を送り、慶賀の公式表明を恭しく願^{Half Moon Battery}い出た。半月砲台の祝砲^がノース・ロツホとグラスマーケットを越えて放たれ、この街の警備隊のマスケット銃^が発した祝砲^{feu de joie}の上空では鐘の音が鳴り響き、ホリールードの館やネザバウ・ポート⁸の側では篝火が灯され、ロイアル・マイルのすべての窓では祝福のロウソクが夜通し光を放った。< p.220 > 添書きridersが、この王国の全ての都市に送られ、これまで以上の号砲、鐘突き、ろうそくの灯火が命じられた。

カニンガム^{major}少佐は、この騒擾と祝賀の真^{misfortune}ただ中、ロンドン経由で帰国の旅程を終えた。彼は気分を害し、ハミルトンに授与された褒美に憤慨していたが、それは彼が評議員会の構成員ではまったくなかったからだった。彼は自らの失敗談^{with a tale of misfortune}や、「ジャマイカやイングランドを経由してここに戻るのに費やした、一方ならぬ旅行の経費や費用」の^{at the sleeves}こと引き合いにして、この理事たちに抗議した。彼は、おそらく彼らにとっては持て余すものだった。この植民地が首尾よく成立しておれば、その評議会の一員はスコットランドでどうなったのだろうか？ 彼は、彼を議員のみならずギルドの構成員にも選出するようにこの都市当局にせがんでいたから、これでこの理事たちも彼を無視したり、逃亡のかどで咎めることもできなかった。彼がカレドニアに戻るとの意思があるとの確信に基づき、彼に対して彼らは200ポンド・スターリングを支払った。そ

7 ギニー、21 シリングに相当する金貨、1663 - 1818 年。

8 Netherbow → エディンバラの地名、この都市の、アッパーバウに対するロウアー・バウ、端っこに当たる、チェックポイントとしての出入口。

の後彼は、自らの所領に引き込み、その植民地には戻ることは金輪際なかった。

ハミルトンについての知らせは、この国民の熱狂の最高点 (wave-top) を引き上げ、ミルン・スクエアは、熱狂的な志願者たちでもう一度あふれることになった。誰ひとりそれをどうすべきかを見通せる者はなかったが、国王の僕たちは国民の情感、つまりイングラントとその国王に対する敵愾心という底流によって警鐘が鳴らされた。「説明できないことだ」と、マーチモント卿はカーステアズに書き送った。「ここかしこに行き交う人々の中に、それほど大きな天の配剤を見つけるなどというのは。そこから何が生ずるのかは、神がご照覧のことだ」。

ハミルトンが到着して6週間、さらにこの会社がギブスンのブリガンチンの喪失を知ってから3週間経って、オリーヴ・ブランチ号とホウブフル・ビンニング号とが、食糧や日用品、さらにかの入植者たちに増援を行う男女300名と共にリースから出帆した。＜会社の＞理事たちはすでに、ジャマイカに立ち寄ると彼らが想定したすべて船によって、忠告や勧告 ^{admonition} の書簡類を送り続けていたが、さらにオリーヴ・ブランチ号と共に、この度彼らは ^{s p i r i t u a l} 元氣付けるような激励の約束を送付していた。「貴殿たちが必要とするものは何であれ、そちらに送り届けるといふ、とても ^{general inclination} 幅広い意向がありますので、あなた方は、あなた方のためにすぐれた聖職者たちが派遣されるという時期に適った配慮以外に何も必要ではありません」。そうこうするうちに、この植民地には誰ひとり聖職者がいなくなってしまう、この評議員たちは、悪徳という行為をすべて思い止まらせ、彼らの冷静かつ、信用でき、さらに宗教心のある行動によって、入植者たちに啓発を与えることができることなら何であれすべて行うことが望まれた。その時になって、カレドニア人たちは、イングラント人による布告をようやく耳にして、できるだけ速やかにこの植民地を離れるという、この評議員会による明白な意図によって勇気づけられ、なお

かつく p.221 >元氣付けられたのであった。

心地のよい春がジメジメした夏に変わると、またしても豊作の見込みがなくなり、第二次遠征隊の準備の拡大が見られた。「問題なく」、と理事たちは評議員会に書簡を送った。「ライジング・サン号と、かなりの積載量のある4隻以上なら、あなた方と共に出航した者たち以上の大人数と共に、クライド川から出発できます」と。しばらく経って、喧嘩や口論のあったハミルトンによる不幸な報告を想起しながら、彼らは評議員会に懇願した。「心と感情をひとつにして、ヘリスがかつて証明したような、ゴタゴタや、反乱を起こすような、有害な感情にかかわるかも知れないことなら何であれ注視すること。」というのも、船医であったヘリスは、ジャマイカからロンドンへとわが道を急いだが、今ではかの植民地に対して口汚い攻撃を書いていると報告されている。その男のイングランド人出資者 paymasters たちのためにだというのは疑問の余地がない。この男の憎たらしい、無作法な行為は、名誉とか想像の域を超えており、あの理事会ですら、申し立てによれば、この会社から支払われるはずの報酬には彼に責任を取らせながら、グレンイーグルのホールデンをロンドンの獄に引き渡したのを聞いて驚嘆した。グレンイーグルは、自腹を切って釈放され、イングランドを離れて直ちにエディンバラに出発し、この理事会に弁済を求めた。彼らは、洪々であったがそうしただった。

イングランドからの知らせにはよいことは一つもなかった。この植民地の設置は、この地の政府を公然と怒らせ、無邪気な女王が「イングランドの意思を考慮して彼はわれわれを勇気づけたのだ」と明言をしたとは言え、国王が一貫して沈黙したのは驚きであった。ロンドンでは、評議員総会の何人か、例えば有名なアナンデイル伯が買収され、イングランドによって「アフリカ会社を廃止する」ために雇われたとのうわさがロンドンで流れた。1696年に公職を離れて以来職務にはついてない

が、それでもウィリアムの加護のもとにあったジェイムズ・ジョンストン⁹は、その「敬慕する最高司令^{c h i e f}」であったこの伯爵に、これまで以上に用心するように警告した。「この会社に何が起ころうとも、それを廢止^{u n d o i n g}することに手を貸そうとする如何なるスコットランド人であれ、全人類から呪われることになるう」。かつてこの男は、この事業^{u n d e r t a k i n g}を神の御業^{みわざ}であると信じたのであったが、ジョンストンは今では、詰まるところ「両王国の間に交易の連合」を生み出すことになる、その瓦解^{f a i l u r e}こそが最善だと考えたのだった。

夜になるまでは身を隠し^{s c r a t c h i n g a w a y}、口やかましい妻からは執務の場に閉じこもり、ジェイムズ・ヴァーノン¹⁰は、イングランドの潔白とスコットランドの有罪を公言するのが彼に認められたことと理解^{k n o w i n g}して、< p.222 >スペインからの何がしかの公式の異議申し立て^{p r o t e s t}をやキモキしながら待っていたのだった。スペイン領付き外交使節^{e n v o y s}たちが、侮辱や軽蔑に対する不平を述べると、彼は大胆に返答するように告げ、この植民地はイングランドの責任の限りではないと告げた。「彼らの沈黙^{u n d e r t a k e r s}が実行者^{u n d e r t a k e r s}たちを勇気づけるかも知れないが、彼らのやったことを上回って、われわれがそれを効果のないものにする^{u n d e r t a k e r s}ことを行つたことしか私は何も承知してはいない」と。5月3日、彼は望みを果たした。スペイン大使^{A m b a s s a d o r}が彼を訪ね、抗議に関するくどくどしい覚書を伝えた。カトリック最高皇帝、すなわち受難王^{t h e S u f f e r e r}カルロス¹⁰は、——— 遺伝性^{s y p h i l i s}の伝染病^{d r o p s y}や梅毒の犠牲者で、さら

9 James Johnston 不詳。

10 カロス2世< Carlos II, 1661年11月6日 - 1700年11月1日)は、ハプスブルク家最後のスペイン国王(在位:1665年 - 1700年)。カルロス2世はスペイン王であると共に、ナポリ王国、シチリア王国などの南イタリアのほぼ全土の王であった。スペインの海外領土であるフィリピンやメキシコにも勢力を及ぼした。スペイン・ハプスブルク家最後の男子であり、彼の出生をスペイン国民は喜んだ。しかし、出生時から病弱な人物であり、当時その理由は「呪いをかけられたため」と一般に考えられており、カルロス2世自身もそう思っていた。現在では、彼が病弱だった理由はおそらくハプスブルク家の何重にも繰り返した、近親婚によるものであらうと考えられている。

には癲癇^{epilepsy}持ちでもあったが、哀れなことに今にもその死での旅に向かう最終年に近づいていたが——、カレドニア植民地が彼の王国への辱め^{insult}や、アメリカにおけるその所領の侵犯であって、彼自身とそのイングランドの従兄弟¹¹との間の諸条約の侵害^{violation}であると宣言^{declare}した。そうした不愉快な始まりの後、この覚書は、ウィリアムがこの植民地を廃止するのが都合だとみなす諸方策^{measures}を採用するだろうとの希望と共に、友好的な終わり方をした。ヴァーノンは、それを恭しく受け入れ、イングランド人とスコットランド人との相違を説明して、スペイン国王に対する自国の国王の変わりぬ^{continuing}好意と友好関係をこの大使に確信させたのだった。

いくつかの名ばかりの行爲^{token}が行われた。ヴァーノンは、アイアランド Lord Justice 控訴院裁判官に、ダリエンへのいかなる船舶の出発をも阻止するのを怠らないこと、さらにマドリッドではイングランド使節であったアリグザンダ・スタンホウブ¹²に忠告し、疑い深い国王の補佐機関^{royal council}に、スコットランドはわが国王のもとにイングランドから独立状態にあるが、「さらに、これによって、一層の深慮と警戒^{circumspection}を持って取り扱われるべきものである」と、辛抱強く伝えた。ヴァーノンは、スペインの抗議がととも緩やかなことに安堵し、そのよって来るところが分かると考えていた。スペインは事によると早晩イングランドの助力を必要とする。彼がその覚書を上げた机の上には、ドーヴァーからの急送便があり、それはジョン・マッカイ¹³なる密偵^{s.d.y}の手になるものだった。フランスからの急使^{couriers}たちは、カルロスがすでに亡く、ルイ14世は自らの孫のために速やかにその空位を要求するであろうと報告していた。「われわれはなにがしかその反対のことが耳に入るのが喜ばしい」、ヴァー

11 ウィリアムのことか？；国王が他国の国王または自国の貴族に対して用いる継承と解すれば、友人とか友と訳すのがよいのかも知れない。

12 Alexander Stanhope 不詳。

13 第一次遠征隊に評議員 councillor として出航。急送便 dispatch を携えて帰国。スピーディ・リタンゴで第二次遠征隊に従い、ジャマイカとカレドニア間で水没。

ノンは、ブラッスルにあったイングランドの使節^{e n v o y}に告げた、「フランドルで待機する5万の部下たちに、あたかも死臭を嗅ぎ取るごとくわれわれを注目し、この継承に介入するべく待機するように」と。

スコットランドでは、スペインの抗議が一陣^{a f l u r r y}の怒りや侮蔑を巻き起こしはしたが、第二次遠征隊を求める一層大きな熱狂のうねりの中にすぐに和らいでしまった。例の植民地からの< p.223 >急送便に同梱されていたのは、一枚のカレドニア湾の地図 chart であったが、それはすぐ^{n o w}に複製され、急ごしらえで精密でない地図のまま印刷され頒布された。それは、霧につつまれた憶測^{c o n j e c t u r e}や現実にはあり得ない伝説の言い回しが、羨望^{e n v y}や強欲^{c u p i d i t y}を刺激^{e x c i t e d}ようになるまで、それまでであったことに驚くべき真実味を与え、今では、霧に包まれた推測や、現実にはあり得ない伝説についての言い回しが、羨望や貪欲を刺激するまでになった。「竈を造るための石を掘り起こすところに座れ、そうすりゃそこかなりの金が混じっているのが見つかるぞ。。この会社に忠告するものもいたが、彼らとて、彼ら^{m e n}が懸命な労を割いて作成したこの地図や文書以上に、この植民地に詳しい訳でもなかった。ハミルトン公が、例の事業のよく知られた共鳴者^{p o p u l a r f r i e n d}だったが、腐った魚<失敗した事業に手を染めた>を口にしたかも知れない入植者たちの救済^{c u r e}に使わされた。その魚自体の骨を、この処方^{r e c i p e}の言うには、火にかけて、粉末になるまですりつぶし、そうして一杯のワインで飲み干すことだ。この公爵はそれに止まらず、ニューエディンバラの建設に関するご自身のお考えを快く提示されたのだった。

主たる通りはすべて、北から南へと通じており、その通りに造られる、東西の十字路はできる限り狭くなくてはならない、なぜなら、太陽は一日中その真上^{p l u m b}に見えなくてはならないから……そこには、3ないしは4の別々の所に、1箇所しかない場合には、爆弾一発で、敵が給水を台無しにすること

がないように、井戸か、貯水cisterns槽がなくてはならない。

これは、妥当な忠告であった、しかしそれが、この公爵のホリールドの館の脇にあった大邸宅で書き記されていた時、ジュアン・デルガード大佐^{captain}¹⁴は、ニューエディンバラに残されたものすべてに火をかけていたのだった。

8月が来て、理事たちの総会が西に移り、グリノックやグラーズゴウに居が定められると、彼らがこの会社の船団近くにいることになった。彼らの確信 confidence は、その月の初めに彼らの知るところとなって、イングランドの布告Proclamationsに関する情報newsによってmomentarily揺り動かされたが、彼らは速やかに立ち直った。この国民もまた、それに対する怒りが鎮まると、この宣言を抗議 challenge だと解釈したのだ。司法長官Lord Advocateであったジェイムズ・ステュアートは、この動揺excitementを不愉快な眼差しで眺めた。「信じられるか」と彼はカーステアーズに語った。「あの植民地が原因で、この地のあらゆる階級 degrees の人々の上にどれほど大きな刃edgeが降りかかったというのか」。1週間後、理事たちがクライド川に赴いた時、彼は一層意気消沈していた。「私はこの事態に直面して誠に嘆かわしい。この国民は一方に向かうと言うのに、国王は別のご定見persuasionをお持ちだ。成功するか否かどちらとなっても、< p.224 >悪い結果になるのではないか」。事態が別の方向を取らないとしても、この会社が進退極まった行き詰まりsetbackとならないとしても、スコットランドにおける国王の僕たちと国王の大義causeに幸あることになり得ないのではと彼は考えたのだった。

4隻の船がすでにクライド川に待機していた。ディレックスンの端麗な旗艦にはハミルトン卿号とホープ・オブ・ゴウネス号がすでに合流して

14 デルガード、不詳？ Captain の意味するのは大佐としたが、はたして船長とするのがよいのかも知れなかった。

いた。両船とも、300 トンを越え、勅許状を備えた点でも共通していた。第4番目の船、ホウプ号は小ぶりで、この会社の所有だった。¹⁵ この船を見ようと川を降ってきたほとんどの人たちを魅了したのは、ライジング・サン号であった。良質のベルリン樫を舟材に、積載量は450 トン、この船の船首楼^{forecastle head}から船尾のカリアテッド彫刻までの全長は150 フィート以上あった。船の武装は、38 門の大砲を備えたインド交易船 Indiaman に似ており、12、8、さらに4のポンド砲と、後甲板には赤く塗られ、金色の月桂樹の装飾を施された舷窓^{ports}があった。その名に因んでその船は金色の光を放っていた。そのスプリット<小円材>の下では、ひとつの輝く太陽が金色の光線に溶け込み、もう一つはその船尾の下にあった。船のすべての金色の彫刻は、豪華で rich 精密な elaborate もので、その窓の周りや船尾楼甲板の手摺り、円室^{ブーフデッキ}や司令官艇^{r a i l roundhouse captain's barge}には、螺旋状の葉っぱ^{curling}や巻き込みと渦巻き^{convolutes whorls}が絡まらされていた。その船の黄色いパネルの貼られた船室^{cabin}は豪華な家具が備えられていた。・・・ベンガル・クロスの縁取り、金色の天蓋とタッセルの付いた寝室のカーテン、ドアには金色の取手、オレンジの木材でできた戸棚には黄色いダマクスがあしらわれた5枚のテーブルクロス、18 エル¹⁶の長さのリネンのナプキン、金の縁取り^{f r a m e d}のある2台の大きな姿見、深紅の陶器 earthenware、光沢のある白目^{pewter}でできた青いカップ、さらに黄色い角製のスプーンなど。

この船室の荒涼とした華麗さを味わい、船舶に指揮を執り行い、この船団の提督たるべく選ばれた男は、ジェイムズ・ギブスン¹⁷であった。

15 結論を先取りすると、この第二次遠征隊が編成した4隻の船舶は、ホウプ・オブ・ボウネス号が1700年4月カルタヘナでスペインにより拿捕、その他のライジングサン号、ハミルトン卿号、ホウプ号は揃って同年8月ハリケーンや難破に遭遇することになった。

16 エルは、長さの単位、英国では45インチ。Give him an inch and he'll take an ell. ことわざ、「寸を与えれば尺を望む」。

17 既出、会社理事、アムステルダムにおける代理人。カロライナ沖でその船もろとも消息を絶つ。

彼は、その兄弟と共同で所有していた豪華な商館を所有する船乗り業の共同経営者で、彼自身がこの会社の理事であり、かつその株式の大所有者でもあって、つい最近までそのアムステルダム代理人であった。彼はデレックスンの庭に置かれたこの船の竜骨を眺め、船が大きくなるのを眼にして、大ピーター¹⁸と共にその船上でワインを飲み、その船を駆ってクライド川へと航行した。この船の誕生からずっと、彼が船の指揮官となるし、なるべきことを確信していた。彼がそれに値することについて、他の者たちはそう確信を持っていた訳でもなかった。「スコットランドの幾人かのよき人たちが」と尊師フランシス・ポーランドは書き記した。「その人物が1684年にカロライナに移送した哀れな囚人たち^{transport prisoners}に対する、彼のかつての残酷かつ冷酷な態度^{inhuman}を思い起こし、回顧する機会を持った」。

エイヴォンデイル¹⁹ 契約派教区でグラスフォードの聖職者^{minister}であった、ポーランドは、この植民地行きを志願した。＜p.225＞7月に、スコットランド教会の総会^{Commission}の会合がグラーズゴウで持たれ、靈感が与えられ、感激の得られる講話^{sermon}（ヘブライ語のテキストによる 11:8 <旧約聖書：アブラハムの誓いにより、主のお呼びにより、従い、その行き先を知らずに、出発した）に耳を傾け²⁰、4名のカレドニア行きの聖職者たちが

18 パターソンのことか？

19 Avondale エイヴォンデイルは、ラナクシャの地名。

20 ヘブライ語のテキスト 11:8 <旧約聖書：アブラハムの誓いにより、主のお呼びにより、従い、その行き先を知らずに、出発した？手元の英語訳『聖書』の該当箇所は、8 Accordingly Jehovah scattered them from there over all the surface of the earth, and they gradually left off building the city. となっている。有名なノアの方舟のエピソードは、かなり詳細で私たちにもよく知られている件だが、バベルの塔に関する記述は、逆に？知名度にもかかわらずサラッとしたものである。この刺激的な物語は、フランドルの画家ブリューゲルの絵画による印象からか、よく知られてはいる。しかし、この記述は、人類の間の言語が単一であったことに、塔や都市の建設を図るに至った人類、神くヤーヴェ>が講じたことが多言語化であって、その後人類は大地の各所に散会し、その建設・建築を放棄した、とのエピソードである。それをスコットランド人たちのニューエディンバラでの都市造営がパラレルに構想された結果、著者ブレブルが、引用したのであるうか？ノアの洪水後、バベルの建設、ユダヤ人たちは言葉を多数にされて、全国に散らばった。これを未知の世界に旅立つスコットランド人たちの運命を重ねることと解釈されたのではなかったらうか？

選ばれ、彼らには^{instructions}指示が与えられた。ポーランドにさらに加え、アリグザンダ・シーフィールズ、アーチボールド・ストウボとアリグザンダ・ダलगレイシュ²¹がおり、いずれも信仰からしても高潔な人々で、それに値する者たちであるのが明らかだった。到着の暁には、彼らは次のことを命じられていた。すなわち、彼らが直ちに公式の感謝の日を^{set apart}特に設け、^{Moderator}調停者と^{Clerk}教会書記を選出して、長老派として自分たちを^{constitute}組織するべきである、と。その後、できる限り速やかに、人々の^{consent}承諾を得て、入植者たちの間でもっとも^{pious}信心深く、^{prudent}分別があり、^{judicious}慎重な者を、この^{community}教団の^{Elders}長老と^{Overseers}監督者となるべく選出して、機会を利用してできるだけ頻繁に、小教区の^{sessions}集会や長老派の^{Diets}会議を開催すること。「そこでかくして、われわれは、あなたに委ねる。わが^主による崇高で栄光ある事業は、あなた方の手に^{備わり}、^主自らの力強く、賢明で慈悲深い行為と天の恩恵となるのです」。

この4名の聖職者たちの中で、ポーランドだけがスコットランドに戻るようになったらうから、彼が倦むことなき^{tireless scribbler}悪筆の人となったのは、歴史の^{history's good fortune}僥倖である。それに止まらず、彼は、^{bigot}頑固者で、^{prig}道学者にして、人間の^{frailty}弱さ²²に対する^{intorelant critic}呵責なき批判者であり、^{the Almighty}神は自分のことを^{in righteousness}正しく導かれ、それに^{did not follow}従わない者を悪いと決めつけることに確信を持っていた。もしもギブスンが、契約派ではなく、ローマ・カトリック^{Papists}や^{Episcopalians}監督制主義者たちを移送したとしても、ポーランドは、彼らに対する彼の^{inhumanity}非道を非難はしなかったであろう。彼が特に選ばれたのは、彼がスリナム²³のオランダ植民地にある期間暮らしたことがあったからで、そのことによって彼が、他人に対する同情をほとんど持たなかったし、そ

21 人名の発音には、BBCの発音辞典を参照した。

22 余談だが、シェイクスピアの『ハムレット』<I ii 146>には、「弱きもの、なんじの名前は女なり」が想起される。

23 スリナムは、南米北岸の旧オランダ植民地。

うした遠方の地において人々が被った特有の誘惑temptationsに対する理解するなども皆無だった。彼の親しい友人で、後援者でもあったのは、仲間のアリグザンダ・シールズで、セイント・アンドルーズの第二教区second chargeの聖職者で、主に仕えるという点では強力な人物であった。シールズはまだ若かったが、人生のほとんどをその信仰の故に迫害を受けて来て、ある時にはフォース湾のバス・ロック^{Bass Rock} 24の囚人であったこともあった。彼の身体上の強さは尋常ではなかった。つまり、キャメロン派の従軍牧師とphysical courageして、シュタインカーク^{Steinkirk} 25の先発隊で <advance 前戦?> 彼らと共に賛美歌を称揚し、ナミュールを前にした塹壕trenchesで、祈祷師たちと共に彼らを支えた。彼はかつてジェイムズ・レニック^{Renwick} 26の野戦訓戒者preacherだったこともあって、『後方に退避』*The Hind Let Loose* の中で、あの熱烈な契約派の所業を擁護した。セイント・アンドルーズにおける労作workの中に、<p.226> 彼はレニックRenwickの手書きの伝記を残したが、その公刊を見ないままこの世を去った。

補給物supplies（類）の最後がグラーズゴウからのガバート船²⁷とグリノックからのウェリ船²⁸に積み込まれ、すでに第一次遠征隊に送致されていた、同様種の様々な武器類hardwareや小間物類haberdasheryがすでに積み込まれていた。さ

24 バス・ロックは、エディンバラから30キロほど東の郊外ノース・ベリックの北東4.5キロ、フォース湾に浮かぶ小島。1651年に政府が買い取り、牢獄として使われていた。現在は野鳥の保護区で、カツオドリが数千羽を数えると言われる。ノース・ベリックの町の南には、200メートル足らずの丘があり、頂上の見張り塔からは360度の眺望が得られる。これはスコットランドではlawと呼ばれる、円錐形または円形の丘である、海上ならびに陸上からの目印となっている。

25 スティーンケルク（シュタインカークとも）はワロン地域の村であり、ベルギーのエノー県にあるプレーヌルコント市の地区で、ブリュッセルの南西50 km、アンギャンの南10 kmにある。スティーンケルクは、フランスがイギリス、スコットランド、オランダ、ドイツの合同軍を破った大同盟戦争中の1692年のスティーンケルクの戦いで知られる。

26 レニック。<BBC>不詳。

27 gabbard: 元スコットランドで用いられた河川航行用の平底貨物帆船←中期フランス語 gabbare, gabbare。

28 wherry: イングランド各地で用いられる種々のほしけ、漁船。

らに、バイヨネット銃と爆薬。干しぶどうや砂糖。ブランドーやビールなども。全てが、^{the Committee for Equipping} 装備委員会が一瞥すれば、何ポンドのミツロウあるいは何樽の^{brimstone} 硫黄が、^{f i r k i n s b l a c k} どれほどの汚い石鹸や何樽の^{k e g} 29 釘がこうした船に積み込まれたのかが判明するはずの手際^{n e a t}のよい目録と共に、^{l e d g e r} グラーズゴウにおけるこの会社の代理人ピーター・マードック³⁰の手で、その元帳に記載された。理事たちはいそいそと働き、早起はするものの、夕暮れになって応供する時には互いに莫大な量のクラレットを飲み干した。彼らが有頂天になった自己満足は、ロンドンからの何通かの不愉快な知らせによって、ほんのしばらくの間だけかき乱された。ジャマイカからブリistol 経由でカレドニアから戻った、^{a s y e t} モントゴメリーとジョリーとは、そこに到着したのはしたが、彼らが北に向かうという話はまだおくびにも出さなかった。パタースンへの手紙の中で、トゥードデイル侯爵は、悪者たちが^{say for themselves} 自己弁護しなければならないことが何であるのか、考えられもしないと述べた。彼らは、ハミルトン公爵に対する報告の願いを準備中だと報じられていたが、この公爵閣下はあの<カレドニア>植民地からの書簡^{behaviour}の中での彼らの態度にすでに気付いておられ、^{on one's guard} それには用心の構えとなるだろうということだった。イングランドへの両名の到着は、この理事たちに、カレドニアにおける悲しむべき^{u n i t y} まとまりの不足を^{r e m i n d e d} 新たにさせたので、^{jealousies animosities factions heart-burnings disagreements} 今や姿を消してしまった評議会あてのおぼつかない手紙を少なからず出して、「嫉妬、敵意、派閥、不平や口論」に対して、^{admonitions r e c a l l i n g e v i l s} 早くから注意勧告を繰り返した。そうした不運は、たとえ、それらが^{close together} 「差し迫った^{corner} 目先の^{lazy idleness} 窮地や、怠惰な怠慢の状態に封じ込まれるとしても」、^{ministers} 彼らの新たなお偉方たちの助けを借りて、^{colonists} 入植者たちは懸命に手を切っていたのだった。

さらに、彼らに元気を持たせよ！そうすれば、夥しい数の補給がこう

29 釘の容量単位で、100 ポンドに相当。keg → 4 ガロン

30 マードック、不詳。

した手紙と共にやってくる。この会社が理解する限りではどうしても必要とされる人々と共に。その砦の防衛には機関兵 *firemaster* や爆撃主 *bomb-bardier* となったはずのジョン・ジャフェリ³¹がいた。ジョン・ウォリス大佐とトマス・カー³²氏は、フランダース出身の高名な工兵 *engineer* で、前者は砲手^{*artillerist*}を兼務もしていた。彼は最近、エルコ卿の贈呈になる36挺のレザーガン^{*leather guns*}を試し、発射してみたが、状態は良好だと明言した。どの石をひっ繰り返してみても見つかるはずの貴金属類のしかるべき取り扱いについて、この会社は < p.227 >、金匠のロバート・カイル³³と、「貨幣の鑄造技術と、貨幣の縁取りのための製造所建設に申し分なく精通した」ジョン・ハンターをも派遣していた。デイヴィッド・ダヴェイル³⁴が、友人であり、同宗信徒^{*co-religionist*}であったベンジャミン・スペンスを助成するためにやって来たが、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、オランダ語それに英語、さらにはダリエン沿岸のいくつかのインディアンたちの言語にきわだって通じていた。ハミルトン公爵の推薦に基づいて、ロバート・ジョンストン³⁵が、英語とスコットランド語をインディアンたち教えるために彼の新たな方法を使うとの使命を受けていた。さらにジョージ・ウィンラム³⁶もまた「いく種類かのリカーの蒸留・発酵のための蒸留器^{*stills*}やその他の必要物」と共にホウブ号にすでに乗り込んでいた。

100名のご婦人方がこの会社の負担でこの遠征隊と共に航海中だったが、それ以上の人たちが、この目的のためにスループ船とブリガンチンを1隻ずつ借り上げるのを申し出ている個人事業者^{*private speculator*}に快く4ポンドを支払っていた。そのほとんどが忠誠心のある女性たちだったが、少数の例

31 John Jaffray 不詳。

32 ウォリス、カー、いずれも不詳。

33 カイル Keil、不詳。

34 Davi Dovale、不詳。

35 ロバート・ジョンストン、不詳。

36 Winram、不詳。

外を除けば今では誰しも名前も分からない。聖職者の妻だった、ストーボ氏夫人もいた。ジャフリ夫人もおり、夫は消防隊長でその両人の娘メアリ、つまりジョンソン夫人とその息子も共にいた。両者共に、実際には寡婦となっていたことを知られてなかったベル夫人や、マーストン夫人³⁷もいた。というのも、乗船した他の婦人たちの夫と同様に、カレドニアへの同行を望んだ夫たちは、水浸しになった墓地で死亡してから長い時間が経ってしまっていたからであった。

大佐、中尉^{lieutenants}、歩兵少尉^{ensigns}や兵卒^{soldiers}たちは、リーヴンヤストラスネイヴァー、マックイ³⁸、ヒル、そしてアーガイルなどからの除隊した諸連隊から再び退役軍人たちとなった。彼らの多くは、この会社が1年前に彼らの業務^{services}＜軍務＞を拒絶して以来、ミルン・スクエア周辺で辛抱強く待機していた者たちだった。普通の人たちの3分の1以上は、フランシス・ボーランド³⁹によると、山岳地域の出身で、英語力にかけ、プレスビテリアンの規律^{discipline}に対する酷い軽蔑から、反感^{disgust}や憐憫^{pity}を身につけるに至り、その憐憫がその人柄に残っていたのだった。グラーズゴウ大学学長の、ウィリアム・ダンロップがその会社に、「大学で課程を終えて、カレドニア行きを希望する、いく人かの若者たち」を志願者として採用するのを願い出た。彼らは、彼らの教師^{masters}の一人が同伴し、ダンロップがささやかな必需品の購入に10ポンド前貸しするのを条件に、よしとされた。

22を数える指導的一族の長子^{c a d e t}以外の男子の子息には、中尉ないしは旗手^{ensigns}＜歩兵少尉＞との許可が与えられた。著名^{eminent}でもなく、＜p.228＞高貴^{proud lineage}の家柄でもないそれ以外の者は、勲功^{valour}や精励^{industry}によって辞令^{commission}を獲得す

37 ベル夫人、マーストン夫人不詳。

38 スコットランドで、Macの付く第2番目に「有名なcommon」姓。Dorward, Scottish Surnames.

39 第二次遠征隊の聖職者 P

るまで、入植者なり志願者たちとして出発するように願いが出された。上記の者の一人はロホラン・ベイン⁴⁰で、その父親がマッカイ州の^{country}借地農^{tacksman}であったが、彼の昇任は、彼のそれに続く不満が、取り戻せない程だったので、急^{rapid}であった。仲間の指揮官たちの中には、アーガイル一族出身のもう1人のコリン・キャンブルと、彼の部族からさらに2名が中尉となった。もう一人の監督^{overseer}は、マンゴー・マリ卿で、アソル家の勇敢で、無私無欲な一員であった。アンドルー・ステュアート^{Andrew Stewart Captain}太尉は、ギャロウェイ伯の土地をもたない兄弟であったが、もしも彼が「株式のある程度相当分」を購入すれば「この理事会は、彼を一層奨励・激励するため、理事会の構成員を彼に保証する」とのこの会社の約束をその辞令と共に携えていた。会社仲間の役員たち^{officers}のすべての中には、さらに際立った名前が一層散見された。取分けハイランドに権勢を誇った、カーマイケルやキャンブル、^{Farquhar}ファーカーやグラント、ラムゼイ、^{Colquhoun}コルクホン、マッカイやアーカート、マレイ、ゴードン、メンジーズやロス。少なくとも一名の父親がその息子の熱情の^{fiere inflamed}激しさに興奮して、彼と行動を共にした。カルビンのアリグザンダ・キンネアド^{went with him Culbin Kinneard}は、かつてはジャコバイトで、10年前にはウィリアムに反旗を翻して蜂起したハイランド軍の一将校であった。すでに1693年に赦免を受けてはいたが、^{Moray}マリ湾⁴¹近傍の彼の所領はそれ以来潮目によって変化する砂浜に呑み込まれてしまった。彼の息子がジョン・テルファー^{company}⁴²太尉の中隊で歩兵少尉に任命された時、彼は自ら監督命令を確保したが、その意味するところは、息子の生涯と共にするだけでなく、彼は名誉を汚された^{name}家名と没収された財産を取り戻すという希望を持っていたのだった。

^{family}一門の名誉に関心を持ったもう一人の父親は、それに対しては、自ら

40 Lauchlan Bain、不詳。

41 Grampian の湾。

42 テルファー、不詳。

の義務からではなかつたろうが、ジェイムズ・オズワルド卿がいた。彼は、こうした最後の日々、彼の不運な相続のため、請願を繰り返して理事たちを悩ませた。聞き及ぶ限りでは、ロジャ・オズワルドがこの植民地で書記として働こうとしたが、ハミルトン氏の手になり、トマス・エイクマン < BBC > 宛で、ジェイムズ卿が受け取ったただ1通の書簡によると、彼がそのように務めをしたのではなかつたことが示唆されていた。理事たちはいまいちど、この若者を評議会に推薦しようとしたのだろうか？ うんざりして、彼ら=理事たちは、そうしようと決めたのかも知れない。

4名の新たな評議員たちが、「特段の信頼のある人物たち」と記述されているが、この遠征に派遣された。もちろんまず第一にはウィリアム・ヴェッチで、その健康不安がまたしても、デイズパッチ号の遭難やアイレイ島の海岸への到達のためのその苦闘によって影響を被ることとなった。 < p.229 > その病床から、彼は理事たちに対して、もしも自分が自らの足で立ち上がることができるならば、指定時にライジング・サン号に乗船するのは確かだと請け合った。その旗艦の提督兼船長として、さらにこの援助の返礼として、彼とその兄 < = サミュエル？ > がこの会社に出資したが、ジェイムズ・ギブスンも選出された。彼は粗暴な人間で、ほとんど人望がなかつたから、彼が普通以上の優れた船乗りではあつたとしても、第二のペニクック < ペニクックの焼き直し ⁴³ > とみられるのはた易いことであつた。第3番目はジェイムズ・バイレス ⁴⁴ で、パーティーのコーヒー・ハウスで署名をした最初の人物の一人のエディンバラの商人だったが、文句の付けようもなく即刻実現する昇任の希望を持って500ポンドを出資した人物であつた。もしも、論争好きな性質や高慢な

43 ペニクックは、第一次遠征隊で要職を務めたが、誰ともうまく行かず、とりわけドラモンドとの抗争。植民地蜂起のち海上で命を失つた。

44 商人、ドラモンドの敵対者、植民地評議員、P。

考え方が、この評議員会の主要な資質であったとすれば、——彼らはそれまでそうだったように——バイレスは優れた選択をしたのだった。彼の指名にあたっては、この仕事に対する彼の権利を宣言する証明書^{certificate}を、つまり彼の義兄弟とその奉公人の渡航費^{apprentice passage}、さらに彼と、彼の従者たち並びにその荷物には、ライジング・サン号の船上にしかるべき収容設備^{accommodation}が与えられることを、要求した。第4番目は、ジョン・リンジ少佐^{major}⁴⁵だったが、誠に、表立たず、気長で、面倒見の良い人物だったので、その署名以外に彼の存在を示すものが残らなかったが、その同僚たちのその下には大胆な書き込みがなされていた。*

* <プレブルによる原注である>彼はおそらく、アーガイル伯爵の連隊から除隊した士官^{officers}たちの一員<人数 number>であっただろう。この連隊からは、不釣り合いの員数がこの植民地で仕事 served をしており、結果として、疑いもなく、彼らのために行ったこの伯爵の努力の結果。A. ジョン・リンジは、グレンライアンの大隊 battalion の一団 company における、中尉 lieutenant としてグレンコウの虐殺に参加したが、この評議員は、この伯爵の少佐補佐^{aide major}だったジョン・リンジだった可能性もあった。

リンジは最後の指名だった、それもほとんど最後の。そもそも、彼に加えてクル Coul のジョン・マンロウ博士が、職務も権限もないことを明記された clearly defined 形で、「特段の信頼のある人物たち」として、赴くことが計画されていたのだった。この会社がこのカーク<スコットランド教会> Kirk の忠言に従ってベニクックを選出した時、第一次評議会 Council で彼の希望した部署 place を失ったことを想起しつつ、マンロウは、彼<マンロウ>が評議員で、なおかつ理事会総会 Court of Directors の一員となれないなら受諾できないと申し出た。こうした職務 offices が否定されたので、彼は不機嫌にも赴任を断り、そうすることによって、他の船医たちに対して、彼が注文した医薬品の調達がそれほど不適切なのかの理由を説明することで窮状を切り抜けた saved の

45 リンジ、第4章で初出。

だった。

8月16日の水曜日に、レンフルー⁴⁶沿岸には、「すべての監督 overseers、助手 Assistants、補助助手 Sub-Assitants、男性の志願者たち、商人たち、入植者たち、その他」を船に招集する布告と同時に、合図くの太鼓>が轟いた。たちどころに、そうでないと彼らの荷物は没収。< p.230 >翌日の10時までには300名にのぼる男女、児童が乗船し、甲板や下部シユラウド<支索⇨ラットランド>に群がり、最後の観閲式 review では数多の理事たちが漕ぎながら併走する中、声をあげ、手を振った。後になるとギブスンの黄色^{yellow}の船室では、この船の船長たちと4名の評議員たち——発熱による健康状態にもかかわらずやって来たウィリアム・ヴェッチくも含めて>、が理事会 the Court と共にワインと食事をとり、彼らに対する最後の指示が与えられた。

彼らは共同し、各船は全速力を持って、出港の準備にかかるはずであった。まずは海上を、アイアランドの西方へ、彼らは、最短の航路をとって黄金島へと進み、カレドニアに到達するまでは、給水小隊 water-parties を例外として、1名たりとも上陸させないはずであった。そこで彼らは港の入り口を離れて⁴⁷、銃を発し、水先案内人 pilot を待つはずだった。この航海中には、彼らは乗組員たちと乗船客との間で良好な秩序を維持し、船医たちは病人たちに対して入念な看護を行い、陸上要員^{Landsmen}たちは定期的に武器の使用に備えることが要求された。さらに、船の乗客係には^{ship-stewards} 厳重な監視が保たれた。というのも、彼らはそうでなければこの会社の食糧などを入植者たちに「彼らの持ち物であるかのよう^{allowance}に」売りつけるかも知れなかった。プランデーの毎日の支給量^{Bill of Fare}はメニューに書かれた通りだったが、その配当が多過ぎるので、各船の船長の裁量に委ねられてもよいとする向きもあった。海上での攻撃があっ

46 Renfrew、スコットランド南西部の旧州、現ストラスクライド県。

47 stand off、離れている。

た場合には戦闘状態に入り、イングランド戦艦の視界に入った場合は別としてこの会社の旗⁴⁸を掲げ、この会社の同調者と考えられる本国に向かう船舶にはいかなるものであれ、進行の保証を送るはずであった。「そこで、貴船の幸多き航海と無事帰還を祈る、われわれは貴船に心よりお別れする……………」

船団は引き潮とともに金曜日に出発した。夕暮れまでは南に進み、ロッセ・ロングを後方に、右舷の光を背景にコウル Cowl⁴⁹のヘザーレッドの丘が黒く変わるのを見た。

「武器の力によってそこから自らを取り戻せ……………」

グラーズゴウとエディンバラ、1699年8月から10月

4隻の船がビュート島からそう離れてないところを航行した。彼らがロスシ湾⁵⁰にやって来た時、風が逆風が変わった。この天候の兆候 signs と何の連結もなく、ギブスンはその船尾旗竿に白旗を掲揚し、1発を放った。この信号に対して、他の船舶はその旗艦に接近して、< p.231 >この湾に錨を降ろした。そこで彼らは一月間留まり、順風を待って、その食糧を浪費し、北方の山塊に広がる驚くべき色彩を眺めて日々を過ごした。来るひもくるひも、いつも昼前になるとグリノックから不安を感じた伝令の舟が訪れた。グラーズゴウからは、理事たちがしつこくギブスンに出帆をせつついたが、彼は、風がこの湾< クライド湾? >から、キンタイヤのマル島あたりまで⁵¹ 彼を運ぶという確信が得られるまで、

48 スコットランド会社の紋章は、ブレブルの原著 98 ページに若干の記述があったが、『スコットランド文化辞典』、226 ページにその文様が掲載されている。富田理恵執筆。

49 コウルはストラスクライド州にある地名。

50 ロスシ湾、Rothwsay →ストラスクライド、ビュート島の西方。

51 大西洋をとの航路を考慮すると、クライド湾を出て、少し北に航路を取ると、キンタイヤ半島からマル島に至るとの考えか？

頑強に移動を拒否した。

ダニエル・マックイが、9月中旬にダリエンから到着した。彼がもたらした、死亡、病気、空腹と絶望に関する憂える報告という、書簡からの異なった調子が、理事たちに警告を与え、彼らはギブスンに急報を送って、マックイがあゝの植民地に関する最新の急送便を携えて彼に合流するまで、ロスシ湾に止まるように命じた。彼はその命令を認めたが、この瞬間の彼の主人 master は、天候のため、すべてに優先して、それに従うのを決めた。

モントゴメリとジョリーがついにエディンバラにやってきた。ジョリーは、ハミルトン公に対する彼の長い、弁明の覚書を提出し、両名は理事会が提示しようとしたいかなるする質問にも返答し、彼らに対して行ったあらゆる非難にも反論する用意があった。総会はそれらに対する時間がなかったので彼らに会見するのを拒否した。彼らは惨めにも自宅で待機するか、時間や意欲のあるどんな者に対しても、熱意を持って自衛するために足を運んだ。そのため、日々若きマックイがミルン・スクエアに行き来するのを目撃するのは、心の休まることがなかったであろう。

その月の最後の頃、ロンドンからの急送便が、混乱を招く噂をもたらした。それによると、この会社がすでに完全に放棄され、スコットランド人たちはスペイン人たちに彼らの砦と町を明け渡したと言われていた。マックイがその真偽を尋ねられた時、彼は一笑にふして、そこには何の意味もないと述べた。彼の自信は、理事たちを安心させ reassure、彼らがその噂のニュースをロスシー湾に送った時、彼らは評議員たちに、それほど一貫性がなく、馬鹿げたことはなんであれ信じることなきように説得した。「われわれは、分別や決断がある合理的な手段を有するこの世界において、いかなる人間の集団も信じることはできない。ましてや、われわれがそうした全幅の信頼を置いた忠誠や勇気の持ち主である人たちが、そのような数多くの根拠もない臆病や、愚行、裏切りについ

て責任があるはずがない」。

まるで臆病との考えが、ジョリーやモントゴメリのことを理事会に思い出させたののように、理事たちは、次の日に< p.232 >両名を総会 Court に召喚した。彼らは念入りに質疑を受け、彼らの覚書が読み上げられ、マッカイが持ち込んだ評議会からの書簡類と彼らの抗弁とが付き合わされた。この瞬間から、彼らは、ミルン・スクエアのあの鏡の間 panelled chamber に入り、そこでは彼らにとって全くの希望はあり得なかった。放棄 desertion に対する訴えがスコットランドにおける彼らの存在< presence >によって証明され、そのカニンガム少佐 major との不快な遭遇の後では、総会に情け深い様子はなくなった。それは、ローデリック・マッケンジによる議事録 minutes の中に結論づけられ、書き入れられた。すなわち、彼らが植民地に残した行為は、「すべて、根拠なく、是認できない」こととなったのであった。彼らは、追放され、解任され< cast out, 追放する、投げ出す>、< discharge, 免除する、解任する、荷を下ろす、遂行する、免除する>、この会社の株式に対する彼らの分前< share >は、彼らから引き上げられたのだった。

9月22日の金曜日、ダニエル・マッカイがエディンバラから、クライド川に向かい、ダリエンへの帰途に出発した。その日、グリノックでこの会社の事態を注視していた3名の理事たちが、この船団に急便を送り、評議員たちに、最近の速達便とパンとコメを満載した2隻の川舟< gabbard, 川船、川船>と共に、土曜日の夕刻にマッカイが合流するのを知らせた。彼らは同時に、ロンドンからの風聞 rumour と、マッカイによる嘲けり derision を書き送った。何故スコットランド人たちは、スペイン人たちの前から撤退したのか、「われわれはそれまで我が国民たちはその者たちを恐れているとは聞いたことがなかったのに」この話 story は、この植民地への食糧の送致に水を差すためにジェイムズ・ヴァーノンによって目論まれた contrived、イングランド人たちの悪意

のある作り話であった。

船団は土曜日の正午前に、警告もなければ、マッカイヤパンとコメなどを待たずに、出帆した。評議員たちはすでに、グリノック書簡を受け取っており、それ<書簡>を運んだボートで送り戻されたのは、後になって理事たちが不平と述べたことは、「短くて、横柄なものであった」との注記があった。それには、最終的には今となっては順風が無視し得ない、との明言があった。マッカイがロスシに到着した時には、その湾はもぬけの空で、船団ははるか昔に水平線の下に姿を消していた。彼は、残念なことにロッホ・ライアン Loch Ryan⁵²まで追いかけて、その後不機嫌な顔をしてグリノックに戻った。理事たちも怒り狂って、船団を追跡するように激怒した書簡を書いたが、この国民は大喜びだった。

われわれの暗黒の夜は過ぎ去り、昼が勝利した。

スコットランド人たちは、ライジングサン号に随伴されている。

暗黒の夜が戻った12日前、昼が明らかに失われたかに見えた。大惨事を告げる流言は、イングランドの虚言として、払いのけられなくなった。10月9日月曜日の日没を過ぎ、< p.233 >ロンドンからの小さな小包が到着したリースからミルン・スクエアに1名の騎手が到着した。彼は、パターソンの古い友人にして提携者 associate であったジェイムズ・ファウルズからの書類 papers を携えていたが、それに同梱されたものは、8月にニュー・ヨークから送られた2通の書簡の複写物であった。それらは、カレドニア号の積荷監督人 supercargo であった、ジョージ・モファット Moffat によって書かれ、ロンドンにおける彼の主人 master

52 クライド湾を南下して、ガロウェイ Galloway に行くと、北アイアランドのラーン Larne に達する航路の出発点、ストランラー Stranraer を湾内に持つ、ライアン湾がある。ロッホ・ライアンとはこの湾のことであろう。

ジョジフ・オミストン Ormiston に差し出されたものであった。それらは短く、感情の欠けたものではあったが、その言わんとするところは、あの植民地が放棄されたということには疑いの余地があり得なかった。

理事たちは諸事実の要約を『ガゼット Gazette』に公刊したので、その週の終わりにはこの知らせがロウランド中に知られることになった。土曜日は、亡命したステュアート国王の誕生日⁵³であり、エディンバラのジャコバイトたちが、この会社の歴史に関する全非喜劇を通じ待ち構えて舞台の側に in the wings いたのだが、今や舞台の短い、芝居がかった melodramatic 登場を開始していた。というのも、喘息患者の王位篡奪者の責任としうる惨事 disaster がここにあり、もしうまく利用されるならその従者たち servants を苦しめるかも知れなかった。しかし、確証には目的も組織もなかった。公式には国王ジェームズの健康のための祝杯が挙げられ、訳の分からない彫像の上で篝火の周りにいく人かの高貴な人物たちが立ち、暗闇に数発のピストルや花火が破裂すると、それがすべてだった。この国は、そうした苦しみや衝撃 shock を利用するような、政治的な武器に対して、あまりに無関心であった。そのような無関心が薄らいだ時、単に評議員たちのみならず、第一次遠征隊と共に船出したあらゆる人たちの間では、カレドニア人たちに対する、傷ついた自尊心からする痛みや激しい怒りが存在した。父親たちはその息子たちによって、兄弟は兄弟たちによって、裏切りをされたということを考えた。誰一人として、評議員たちがニューヨークの生き残りたちへ書き送った書簡の調子に疑いをさし挟み、彼らのことを「恥知らずで、不名誉な撤収だと」避難するジェームズ・オズワルドもその一人ではあるが、もしも彼らの息子たちがダリエンやその義務に戻らなかったならば、自分たちの故郷に戻る必要はないと、明言した多数の人たちが存在したの

53 1688年に、イングランドを離れたジェームズ2世<スコットランド王としては、7世>のこと。

だった。

モツファとの書簡は、上記の会合が、10月10日にミルン・スクエアの定例 quorum 会議 meeting でこの植民地を救う緊急措置 immediate steps を講じた時に、理事たちのほとんどによってもまだ読まれてはいなかった。彼らは、この植民地が振り出すことができる upon which the Colony might draw 手形 < bills of accounts > がニューヨークやジャマイカに送致されるべきことに合意しており、その機転のきいた sensible 手続き procedure が最初から採用されておれば、最初のカレドニア人たちは食糧の購入には決して困ることもなかったであろう。その同意には、さらに、< p.234 > 第二次遠征隊に対する最新の命令と、オリーブ・ブランチ号とハウプフル・ベンニング号の船長たちとを携えたダニエル・マックイを乗せる、最初の利用可能な船に許可が与えられるべきことも含まれていた。そうするうちに、ライジング・サン号船上にあった評議員たち宛の書簡が急いで起草され、署名がなされた。それは彼らに対して、それを受け取る前に彼らの確認すべきこと、つまり、あの入植地 settlement は既に放棄されたことを知らせ、彼らとその結果としてスコットランドに戻るかも知れないとのことを彼らに警告していた。

もしも貴殿たちがわれわれの恥ずべきことに放棄の次第となった植民地が領有されていないことを発見したなら、貴殿たちは直ちにそこに thither 急行 make the best way し、（もしも他国によって保有されているのが判明すれば）武力を用いてそれを取り戻すべく努力を傾けること。しかしながら、もしもそうした場合に at this time 貴殿たちにとって、それがまったく実行不能であるとか、不可能なことが判明するなら、貴殿たちは、攻撃に最短かつもっとも好都合な場所に到着 set down し、同様のことを遂行する最適の機会を待つべきで、そのことはいかなる時も、この時以降、等閑に付

されるべきでことではない。

この書簡以上に重要なのは、それを持参する人間は誰か、「どこであれ、この会社の任務が彼に要求したであろうところに彼自身が率直かつ惜しみなく申し出た」カレドニアの新たな評議会の一員としてそれに導かれた introduced のは誰だったのか。事実彼はそうしたし、それ以前から、一月以上もの間、理事たちが彼の申し出を受諾するかどうかを知ろうとして待機していたのであった。この受諾 acceptance は、大変遅れはしたが、この日に大急ぎで認められ、急に実現したが、おそらくは、12ヶ月以前から起用された人物がいたからであったろう。

その男 He は、落ち着いた眼と穏やかな笑顔の持ち主の背の高いウェスト・ハイランドの地主 laird、ファウナブのアリグザンダ・キャンブルであった。まだ40歳足らずで、最近まではポートモア Portmore 卿の歩兵連隊 Regiment of Footlieutenant-colonel 中佐を、その前はアーガイル<連隊>の中隊 company 指揮官、部隊長 commander を務めていた。トマス・ドラモンドは彼の友人で、いま一人は、その遺体が悲しむべきことにブルッヘに葬られた、グレンコウの破綻した殺戮者、グレンフィナンのロバート・キャンブルであった。彼らと共に、彼ファウナブのキャンブルは、彼らの連隊をドゥッチニ Dottignies⁵⁴ の血まみれの方形堡 redoubts に対抗して、指導したが、ディクスミュード⁵⁵ で彼らの連隊が降伏した時、怒りの結果 in anger 自らの剣を二つに折った。名誉、義務、その上に忠誠とが、彼の従った偽りのない simple 里程標識 milestone であったから、彼には悪意や嫉妬は決してなかったように思われる。書簡類と共に、理事たちは彼に委任状 commission とジャマイカ商人宛の1000ポンドの手形、為替 draft を与えたが、< p.235 >そ

54 ベルギーの地名

55 Dixemude、旧フランドル領内の1都市名

れによって彼は、カレドニア行きのスループ船を調達ないしは購入する<予定となっていた>はずであった。彼は妻と娘に別れを告げ、すぐさまブリストルに出発した。そこで彼は、自らを西インドへと誘う船を一隻見つける予定であった。

理事会と評議員総会 Council-General とは、その月の残りは毎日のように定期的に招集された。それほど多数の船舶と補給品類 supplies——一見返りなしのそれほど多額の支出——のため、彼らは株式所有者たちに別の要求を行 another call on the stockholders い、あらゆる債権者たちに対して決定的な行動を起こした take resolute action。教会 Kirk の穏健派 Moderator は、断食と辱めの Fast and Humiliation 国民の日を制定するように請願し、こうして飢えと恵みに訴え、カレドニアの罪なき人々には何も提示しないことに決めた。もしも第1次植民地の評議員たちの中で、彼の忠誠心を証明できるものがあれば、その人物はこの植民地最良 favour に再び認められることができよう。

しかし、そうしたことは、臆病、向こう見ず、無知などのために放棄されるか、そこからこちらに hither 助言が送られて返答が戻るまで一時停止される<保留、延期、suspend>ことになるだろう。さらに、彼らの誰かが、この会社や植民地の名誉や利害に対して、背信 treachery ないしは悪行との点で責めを負うことが判明すれば、反逆 treason 事件 case としてこの上もなき厳しさによって罰が与えられても当然のことである。

そこでのロバート・ベニックの過ち (有罪 guilty) は、疑いの余地なく認められるべきものだった。この横柄で、傲慢な人物に対して、会社は身代わり scapegoat の役を見出した。証拠の提示もないまま、理事たちは、イングランドとの共謀とこの植民地に対する裏切りによって彼を告訴した。第二次遠征隊の評議員たちは、彼がど

こで発見されようと、不名誉とはずべき振る舞いをした人物として取り扱い、職務と権限を彼から剥奪し、その罪状にふさわしい罪で彼に罰を与えるものと命じられていた。

彼はそれを認めなかったであろうが、その惨めな死亡が、神のお恵みではあったであろう。

『そしてわれわれは、平穩を求めたが、良きことは何もやってこなかった』

カレドニア、11月1699年から1700年1月

1690名の人々がビュート島のロスシからダリエンのカレドニアへの航海で命をなくした。この船団は第一次遠征隊に要した時間の半分を越えていたが、< p.236 >その損失はその4倍も大きなものであった。だが、ジェイムズ・バイレスは自信に満ちて理事たちに書き送った。「われわれの病死者 dead and sick たち men の数は、それほど長期にわたる航海で妥当と考えられるものよりもはるかに少ない」。子供たちの大多数は、緑なす西インド諸島を夢の中で驚嘆するまで命を保つこともなかった、その中には消防長の娘、メアリ・ジャフリもあった。アリグザンダ・ダググリッシュも命を落とした。ポーランドの言った、主の God's 得がたい人物 jewels の一人は、深く哀悼された。彼は、同僚たちの世話に、身ごもって、途方にくれる妻を残した。ライズング・サン号の船上で、35名の死者が出たが、そのほとんどが会社員 officers と志願者たち Volunteers であった。病気は船団がロースシーで待機中に始まったが、一度の焼却では抑えられなかった。

アンティグア⁵⁶が最初の上陸点であったが、11月9日の明け方過ぎ

56 北緯17度、西経62度、リーワード諸島の島。

に目視され、夕暮れまでにこの船団はモントセラート島<北緯 17 度、西経 63 度、西インド諸島南東部、Leeward 諸島の島、首都 Plymouth プリマス>の岩だらけの島に登り、錨を降ろした。バイレスがロング・ボートでプリマスに上陸して、水と食糧を要求した。「しかし、総督 the Governor は」とボーランドは述べた、「極めて冷酷で、われわれがいかなるものも手にする自由を否定し、そうすることに対するイングランド宮廷からの命令を主張した」。スコットランドはその植民地を既に 6 ヶ月前に放棄したと言われているが、彼らはそれを信じていない、と。彼らは翌朝に出発して、その晩、雨を含む突風と海が荒れた中で、ホウブ号の見張り look-out が旗艦のランプを見失った。船は絶望の 2 週間を単独で航行し、ついに他船を見つけた。「ついに、ようやく、主のご配慮によって、われわれは全員が、共にダリエンの海岸に到着した」。それは 11 月 30 日、モントセラートで言われたすべてが現実のものとなった。

ギブソンは、命じられていた信号弾を発射し、船団 ships を湾内に導く操縦士を待った。そこに新たな入植者たちは、何の砦も、繁栄する町も、倉庫群も、賑やかな波止場も、立派な船舶の荷役も見ることにはなかった。湾の入り口には半ば水没した難破船、南の海岸には別の船の燃え尽きた助材 ribs、半島の沖合には 2 隻の錨を降ろしたスループ船があった。

ウィリアム・ジェイムスンとアリゲザンダ・スターク船長たちの指揮のもとにあった、オリーブ・ブランチ号とホウブフル・ビンニング号が、8 月にカレドニアにすでに到着していた。彼らは、廃墟、捨てられた薬缶やポット、苔の生えたキャノン砲の弾、400 名の墓石から発する無言の悶え以外になにもないのを発見して驚いた。インディアンたちが最初の遠征たちによって残されたものたちの一人のところに誘い、彼から何が起きたのかを教えてもらった。ジェイムスンと < p.237 > スタークとは、攻撃からこの半島を保持できるとは考えずに、勇敢にも、リースで乗船

させた300名の入植者たちの生き残りを引き揚げ、会社の社章を掲げて、インディアンたちには、彼らが今やスコットランドからの途上にある大軍の、単なる大軍の先発隊に過ぎないと告げたのだった。彼らがそうなることを期待したのだろうが、この知らせ information は、この月末までにカルタヘナやサンタ・マリアに到達した。陸路からはこの植民地に対する動きは何もなく、沖合数マイルを目的なく航行するスペインの巡航船の姿がスコットランド人たち全員を不安にさせた。彼らに何ができるか、すべきかという問題は、愚かな出来事によって、すぐに解決となった。オリーヴ・ブランチ号のたる製造人が、ある夜にブランデーを探して甲板の下でロウソクを運んでおり、それにだけでなく、自分と船にも火を付けた。船はすぐに喫水線 water's まで燃えて、その積荷と食糧を道連れにした。

蛮勇というよりも慎重な人たちであったから、ジェームスンとスタークとは、オリファント中尉 lieutenant と非常に健康な fittest 多数の部下たちをインディアンたちと共に残して、残りをハウプフル・ベンニング号でジャマイカに連れて行くことにきめた。ポート・ロイアルまでの航海は長く、苦しいものだったが、船上で命を存えた植民者たちも、イングラント領の島に到着した後直ぐに亡くなった。

11月22日には、12名のうち1名が残され、今では見張り台から不安そうに眺め、黄金島からやって来る2隻のスループ船を目にした。この男が ensign-staff 旗竿の上にこの会社の旗を見つけた時、彼は海岸に駆け下り、歓呼の声をあげた。最初の船は *Anne of Caledonia* カレドニアのアン号、第2番目は、トマス・ドラモンドがセント・トマスで借り上げ、食糧を積み込んだ上で、ニュー・ヨークのランシーとウェナムに降り出された手形で代金支払い済みの、ソサイエティ号であった。

アン号の巻き上げ機 rigging は切り離され、帆布には穴があき、甲板は裂け目があった。この入植地を離れ、さらにソサイエティ号から離れ

て1日かそこらで、船<アン号>は20門を装備したスペインの軍艦に攻撃を受けた。スループ船には小型ポンド砲が6基<門>、13名の乗組員たち、それに加えてニュー・ヨークから彼に従った少数の志願者たちしかいなかったが、ドラモンドは降伏しなかった。アン号は、4時間以上もスペイン船に連続した闘いを遂行して、ついに闇へと逃れた。

さて11月30日になると、その深紅の上着に綺麗なつぎ当てを施し、剣を脇に構え、帽子を深くかぶって、ドラモンドがライジング・サン号へと漕ぎよった。彼はこの植民地の評議員としての地位を要求し、<p.238>証明書としてパタースンとサミュエル・ヴェッチからの書状を提示し、この植民地がニュー・ヨークから求めた食糧のすべてを手に行うことができると述べた。評議員たちは彼の言い分を信じなかった。「彼が提案した proposed 信用の基礎 fund of credit は」、と、理事たちへの報告の中で嘲笑った。「彼の名誉の言葉 his word of honour だった」。彼らの不信と彼らの怯えた苦悩によって、彼は居丈高になった。「彼の言い分は、彼が現在、いかにあらゆることを非常にうまく判断しているか、この植民地は再び確保されたし、われわれは、ポルトベロをも接収できた、ということだった。」彼は、評議員としての彼の権利が与えられたとの明確な約束はないまま黄色い船室を離れたが、彼とジェイムズ・バイレスが早晚激しく衝突するとの確かな情報が残った。

それぞれの船の船べり sides からは、新たな入植者たちが怯えた眼で眺めながら陸地を目指し、上陸した。「われわれの友人たちや同国人たちに遭遇するのを期待しながら」、とドラモンドは述べた。「われわれが見つけたのは途方もなく広がった無人の地以外の何者でもなかった、植民地は放棄され、人は見かけなかった、彼らの小屋は残らず焼け果て、砦のほとんどは崩壊し、砦に隣接して開墾された土地はどれも雑草が蔓延っていた。そして、われわれは平穏を求めたが、何もよいことはなかった。しばしは健やかと安らぎを求めたが、不運に目を見張った。」

小人数が雨の中、砦への道を開き、小屋をいくつか再建するために上陸させられた。植民地を開くのではなく、すでに建設されたものに補給を行うために来たのだという者たちからの抗議が直ぐにあった。評議員たちは、この意見を共有し、それをどう処理すべきかについて、陰鬱で追加的な決定の責任があるのを付け加えた。彼らは、ドラモンドが彼らに議論の余地はあり得ないと述べた時両手を上げたわけではなかった。その町は再建されるべきだったし、スペインのおそらく間もなく確実に山を越える攻撃に備えが必要だったからであった。

船団の到着の4日後、評議員たち、陸海上の大佐 captains、それにこの会社の要職者たち senior servants による総会が、ライジング・サン号の船上、ジェイムズ・ギブスの司会のもと、彼の船室で開催された。手始めに彼は意気消沈させるような報告を行った。ソサイエティ号も含め、彼が検討したこの船の送り状、仕入れ書から、彼らの食糧は6ヶ月以上は持たない、つまりもっと短期しか持たない on short allowance と考えられる、と。3名ごとに1ガロンの計算で、ブランデーは4ヶ月しか持たない。この驚くべき発表に続いて怒り心頭の議論があつて、結論を見ず、バイレスによって提示された動議へと仲違いが広がった。< p.239 >彼が示唆したのは、彼らが一旦ジャマイカに引き揚げ、この半島の防衛に2、3中隊 company を残すことであった。誰に反対で、どんな希望があるかについては彼は何も語らなかった。これが少なくとも定住 settlement を構想して represent 撤退と言われるものではあり得ないことが理解され、500名が残留し、残りは城砦が防衛にふさわしい状態になってから撤収ということで合意を見た。バイレスがその次に別の動議を出した、つまりトマス・ドラモンドには、——彼は確かに怒りのあまり最後から危険をしたに相違ないが——この集会では席もなければ投票権もなかったが、出発を命じられるはずであった。彼は投票権を失い、ウィリアム・ヴェッチがこの植民地の完全な政府とは、彼自

身、ジェイムズ・バイレスさらにトマス・ドラモンドによる三頭政治 triumvirate によるべきだと提案した時、怒り狂った。1票だけ職権 commission があると、バイレスが叫び、それは彼のことだとした。第一次遠征隊の放棄によってその他すべての者は、ゼロないし無効となってしまった。ギブスンとリンジがこの驚くべき主張に忍耐強く合意はしたが、この会合の残りは遅くまで議論の方向も危なっかしいものとなり、ヴェッチが自らの提案を撤回した。

翌日彼らは、午前中の涼しい8時に再開した。バイレスは絶対権力に関する彼の要求を放棄したかに見えたが、彼自身とヴェッチ、リンジ並びにギブスンを、この植民地の評議員とする公式の認可を受容した。彼は言葉少なく、ただし、評議会が肉とビスケットの日々の割り当て ratio を削減し、ジャマイカに向けて出発する入植者たちは、ハウプ・オブ・ボウネス号とデューク・オブ・ハミルトン号に3週間分の食糧とともに乗船すべきだと合意がなされた時、多数派について拳手した。英知と指導とを慣例に従って祈る者に応ずる以外に、自らと彼の仲間の聖職者たちはそうした集会には招待されなかったので、フランシス・ポーランドはこの評議員会にはほとんど敬意を表してはなかった。彼は、ほとんどの入植者たちにとって、無きに等しい存在であった。彼の考えでは、彼らは卑劣で、自己本位で罪深く、彼らの憎むべき罪過や忌まわしい行為に対して必ずや神の処罰を被ると考えていた。スコットランドからの航海の途上、さらに現在この世の果てにあって、ほとんど誰もが公衆の奉仕に関わらず、神のお怒りの只中であってさえも、すでに経験した病気や死亡から、人々が天のお恵みに対して主 God に感謝を捧げることになっていないことを理解したのもも皆無である。

海上での彼らの礼拝 ministrations の失敗に失望し、彼らが大地に到達しても、< p.240 >評議会が無関心であることに意気消沈して、3名の人物たちが、なすべき道筋を考慮し、ストーボ氏によって然るべく記

録された結論を得んがため、集会した。彼らは、ハウブ・オブ・ボウネスの進行方向に向けた borrowed 部屋に集会した。なぜなら、もしも彼らが海岸に小屋を一軒でも持ちたいと望めば、彼らはそれを自力で建てなければならないので。彼らは1月3日水曜日が除外されるべきこと——評議会の合意によって——祈祷、屈辱 Humiliation ならびに謝恩 Thanksgiving の厳粛な日として——それにより、あらゆる人は、「恥辱と悲しみをもって、この行い undertaking に関わった、自らとその他の人々の罪を告白する」ことが可能とされる。こうした罪は、無神論者の呪いや誓い、残忍な酔い、憎悪すべき嘘や虚言、鼻持ちならぬ汚れた風説、髪を汚すごまかしで、「そればかりでなく数多くのみすぼらしいものの中でも、悪質な窃盗またはごまかしで、安息日ばかりでなく、あらゆる復員の儀式の破壊にして侮辱」であった。海上での熱病の期間に天に許しを求めた人々でさえも、吐瀉物の前で犬のように自らの過ちに今では立ち返ったのであった。

彼らは祈祷の日 a Day of Prayer にこの評議会へと彼らの要求を運び、彼らが望んだようにするに相違ないと告げられた「もしも異教徒 Heathen がもっと良き忠告を与えることができたならば」と、ポーランドは苦々しく述べた。しかし、彼らは神を信じた perservere in the Lord。彼らは船から船へと渡り、泥の海岸をとぼと歩き、自らの携えた、印刷された説教書、祈祷書、小冊子や教理問答をもを配った。ほとんどが読まれずに投げ捨てられ、パイプに火をつけるコヨリとして使われたが、ポーランドは、こうしたことをやったのは、通常なら、「卑しい部類の」ハイランダーたちだったと指摘した。彼は、そのような無知が憎むべき罪とか忌まわしい行為でもあったと考えたように思われるが、彼らのあからさまな神の冒瀆を、彼らが英語をほとんどないしは全く解さず、読むこともできなかったとの事実に関連付けたのではなかった。

インディアンたちが第一次遠征隊の指導者たちに寛大にも提供した交友関係は、今では第二次遠征隊の評議会によって破壊されてしまった。バイレスは、彼らを軽蔑し、大ぴらに彼らの純朴な贈り物を蔑んだ。彼らは一団の悪漢たちだと、ジャフリがある者が彼に槍を振り回したことをとがめた時に口にして、全員絞首刑にすべきだとも言った。ロバート・ターンブルが大胆にも抗議して、バイレスに対し、この植民地はスペイン人たちに抵抗できないし、インディアンたちの助成なしに戦場で彼らに立ち向かうことにならざるを得ないと警告した。彼らが裏切られる憂き目にあったり、万一彼らが虐待されるとしても、スコットランド人たちはこの砦内に閉じ守るだけの知恵を持つことを知る由もなかった。< p.241 >バイレスは、驚異の目でこの若者を注視した。誰がこの砦の彼方に行こうとしたのか？ 彼らはこの町を占領するために来たのではなかった。そこから、バイレスに反対した者の一体誰が「街の占領とのかどで」彼から告発されたのだろうか？

すべての者たちの士気 morale は、指導者たちによるこの大ぴらの論争や怠惰な行為によって低下させられた。ジョン・ウォリスは航海途上に命をなくし、生き残った技師 engineer トマス・ケアは、船の中から人々を眺めることしかできなかった者たちのために、彼らはなぜこの砦を再建すべきなのかを尋ねた者たちから助けを受けられることはほとんどなかった。ジョージ・ウンラムのリカー蒸溜装置はハウブツの船倉で朽ち果てた。ロバート・キール Keil の溶鉱炉の底やジョン・ハンターの鑄貨製造所には金などなかった。ロバート・ジョンソンから申し分のないスコットランド語を学ぶためにやって来るインディアンは一人もなかったが、ポーランドの落胆したように、兵士たちから悪戯で教えられた卑猥な言葉には流暢になった。船にあった夥しい役に立たない交易品——「とても薄い灰色の紙、小さすぎる青い帽子 bonnets」——は、それらで贖える食料が少しもなくなると、お笑いの種となった。1日分

の糧食 rations に対する毎日の不平があったが、半ポンドの牛肉とパンの一切れなら、どんな匂いがしようが、腐っていたところで、まだ到着してない如何なるものに比べるなら、贅沢品であった。12月の半ばまでには、小屋や砦に対する仕事はほとんど止まった。怠惰や絶望からなる不吉な空気<毒気、不吉な空気 miasma >がこの植民地に襲いかかった。多数が病気となり、さらに、午前中に墓を掘る体力と意欲が不足して、生ける者は死者を海に投げ込んだ。湿気を含んだ緑なす森林、雨にけむる山の頂き、河口の向こうに波打つ澄んだ水などが、無邪気に人を惑わし、欺き、放棄される命運に引き込んでいた。ジャマイカに送られた者たちはイングランドの植民地に奴隷として売られるとの噂があり、こうして裏切りに合い、連れ去られた長い記憶の持ち主のハイランダーたちの間では、この話がたやすく信じられたのだった。10名の入植者たちが8本オールのボートをライジング・サン号から盗んで、ポルトベロの方面に漕ぎ去った。

尊敬を持ってその人物を記憶していたインディアンたちから、トマス・ドラモンドは、スペイン人たちが陸海双方から、この入植地に大攻撃を準備していると知った。大胆な攻撃ではそれを防ぎ切れないだけでなく、スコットランド人たちの精神を高揚させ、反抗も不満なものとするとして、彼は、それを座して待つのは正気の沙汰ではないと考えた。アン号の船上で12月15日、彼は1通の短いが軍人らしい提案を作成し、ロバート・ターンプルの手を通じて、評議会にそれを送った。「彼と命運を共にする意思のある」150名を彼に託せば、< p.242 >連携するインディアンたちと共に、森の中で戦闘を継続する。武器、弾薬 ammunition と若干の食糧以外には、この植民地にさらなる負担はなく、危険がなくなるまでそこに戻ることはない。このことを各人は、厳粛に誓い、立ち合いのもとで宣誓に署名をしたものと思われる。

彼<ドラモンド>がこの提案を主張すべく評議会に現れた時、彼はポ

ルトベロや、おそらくカルタヘナすらをも急襲し、そこでドルフィン号の捕虜たちを解放すると説明した。彼はこの植民地には勇気と忠誠の持ち主が数多くおり、士官たち officers の多くがつい最近その任務を辞退すると申し出て、別の者たちがジャマイカに向けて出発して、普通の ordinary 入植者として止まることになったことを、この評議会 Council に思い出させた。バイレスは激怒し、驚嘆した。彼は別の評議員たちに「自分たちの意見 faith を他人任せに」すべきでないく hang on one's sleeves、人に頼る、齋藤>と告げた。彼の意見は、6週間分の食糧も残ってないし、スコットランドからは何も期待されないとのことだった。どうしてこの街を維持するなどと考えられようか？ウィリアム・ヴェッチが再び病気になる、かつてダンケルド⁵⁷の街角 streets で発揮した勇気を奮い起こすには力不足であった。彼は多数が望んだものとしてこの決定を認め let たが、残りの者たちは、「どうすれば6か月分の食糧が突然のように6週間分になったのかと問い質すバイレスの声」の騒々しい激しさに酷く怯えてしまった。

次の日、歩兵少尉 ensign の指揮するマスケット銃兵の一縦列が砦内に行進して入り、そこで任務についていた船大工 carpenter のアリグザンダ・キャンブルを拘束した。彼は手枷をはめられ、「反乱を組織したことと殺人という悪巧み」との嫌疑で、ハミルトン公号に連行された。彼は、悪意というよりも、自尊心と自制心のある純朴な人間であったかに見えた。この船団が到着してこの方、彼がしばしば明言していたのは、このような気高い事業においては、将校 officers が受け取る食物と普通の人言が与えられるものとの間には何の区別もあってはならないとのことであった。彼が評議会はドラモンドの提案を拒否したと耳にした時、彼は一層大胆で、分別がなくなった。「大多数の士官たち officers、志願

57 スコットランド、パースシャの地名。

者たち、入植者たちさらに乗組員たちは」、と彼は言って、後にその言い方を非難された charged with saying、「あの共謀者たちに味方して in favour of 政府を離れないなら、評議員たちを捕らえ、彼らを絞首処刑にするとという計画 design を持っていた」。数時間内に within the hours 彼は捕らえられ、この評議員会による彼に対する his 軍法会議 court-martial が命じられた。

その会議は、12月18日ギブスンの船室で、ジョン・ラムゼイ少佐の議長のもと、6名の大佐 captains と3名の大尉 captains、3名の少尉 ensigns で招集された。< p.243 >キャンブルはこうなると、彼の護衛の抜身の剣を振り、彼が味方と見做した目撃者 witness をかたわらに、さらに彼が不満とした特権の持ち主であった士官たちの厳しい表情を前にして、ぎょっとした様子だった。彼はこれまで、入植者たちの何人かが奴隷として売られる予定だとの噂を耳にしたが、彼は共謀に関与したことはなく、評議員たちを絞首刑にして、彼らの権力を転覆するなどは望んでいない、と繰り返した。無罪だという彼の潔白の告白は、彼に対して課された免職を上回っていた。彼はかつて「この植民地の大物の勧誘者 a great seducer」だったと、ウィリアム・マクラウド < Macleod > が証言し、かつ正直者たちに食料を与えないことで評議員たちが自らを裕福にして来たのだから、彼らは絞首刑だと、言った。彼と同じ意見を持つ者たちは、ライジングサン号を差し押さえるのに何の困難もなかっただろう。「というのも、一旦古狐、ギブスン大佐のことだが、が絞首刑になれば、彼らには何ら抵抗がなくなるだろうから」。アンドルー・Logan ロウガン軍曹は、証言した。キャンブルから自分に彼の仲間 < 一隊 company > の部下たちによるホウプ号を接収するように要請があったことを、断言した。ピーター・マクファーレン Mcferran は、この植民地における反乱の合図 signal は以前から旗を振ることに決まっていた、と。ウィリアム・ロバートスは、キャンブルが彼に請け合ったの

は、もしもドラモンド大佐 captain の提案が、評議会によって拒否された場合には、それを支持する士官たちがこの反乱に加わることであった。これは、ジェイムズ・バイレスにとっては全てに関わる最も重要な証拠であった。

アリグザンダ・キャンブルは、彼にかけられた罪状全てについて有罪となった。彼は絞首刑による死を宣告され、旗艦からハミルトン公号に連行され、そこで執行を待つことになった。彼が明らかに身代わり、スケープゴート⁵⁸、すなわち狡猾な人たちと、人を喜ばせようとする complaisant 法廷 Court による使い捨ての犠牲者であった。彼が、大がかりな反乱の煽動者というよりも奴隷であったのは明白だった。例えば、野心を持った将校たちとキャンブルのような不満分子たち discontented men の仲介者で、したがって目撃者でもある、歩兵少尉 ensign のスパーク Spark がいた。スパークには、しかしながら、当面の間、何の決議 action もなかったし、他の誰に対してもそうであった。それ以上の調査を通知することによって、緊張した状況を悪化させるのが嫌がられたのであったろう。< p.244 >それがそれ以上の策謀を削いだのであったが、惨めな船大工< 営繕係 > carpenter の執行は、誰だろう彼自身を苦しめることになった。評議員たちは寛容ではなかったのだ。「われわれには他の数名に比べて、不十分で、不完全な証拠しかない」、と彼らはエディンバラには書き送っている。「しかし、他の者たちほど法には敵っていない。そこでわれわれは、忍ばなければならない」。ジェイムズ・バイレスは、そうした忍耐にはそう長く耐えられなかった。

2日以内に彼は出発し、キャンブルがハミルトン公号のランプの付いた船倉に、手首と足首に枷を付けられ、そうしてメインマストの台< 下部

58 贖罪の山羊、贖罪の日 Yom Kippur に荒野につて出され、アゼル Azazel に供されたヤギ；司祭長が人々の罪を象徴的にその頭に負わせてから野に放した。旧約； Lev.16.8 10.26

>で頭を傷つけてその苦悩を終わらせないように監視する伍長 corporal の警戒する状態で留め置かれた。ポーランドが頻繁に彼を訪れたが、キャンプは聖職者による厳しい説教は自分の罪に対する不要な追加だと考えていたようで、彼は進んで許しを乞うた。あるいは、ポーランドにはそのように書き送った。「この哀れな男は非常に悔い改めて死にたいとしているようだ。……彼は、この少し前から、とりわけ主が、最近の病から彼を救い出して以来、主に対する祈りを止め< leave off やめる >ているので、したがって、神が彼を正当にもこの悲しむべき週末に委ねたのだ」。ポーランドは、彼が、キャンプの不満の諸原因によって苦しめられるよりも、天の怒りというこの絵に書いたような説明によって喜ばされているように思われたが、彼とそれ以外の聖職者たちは、哀れみ深く、評議会に対して判決を追放に変えるように願いでたのだった。彼らはそれが不可能だと伝えられた。

この大工 carpenter の最後の瞬間には後悔以上に苦悩が、さらにそれを受け入れるに際しての勇氣ある反抗があった。12月20日の水曜日の午後2時前に、彼は、鼓笛手の合図を背後に海岸に漕ぎ寄った。この港の入り口から見渡せる、この砦の南側の半月保 ravelin には、彼の仲間の大工の建設した絞首台があった。彼がその上に立つと彼の首の周りの縄を、一団の兵士たちが四角いくほみの中に並べられ、船や海岸には静寂が集まった、彼は今にも事切れそうな人を待つ者たちを覚えていた。「神よ、われをこの閘門 lock に導きし者を赦したまえ!」。彼は叫び、鼓笛隊長 drum-major の手が一撃を与えるのを待たずに、この絞首台を飛び降りた。「われわれは、最後の瞬間にこの悪者が救済を思ったことを想像する」。

翌日ないしはその後、トマス・ドラモンドは評議会の名により拘束を受け、自らのスループ船からハミルトン公爵号へと連行された。そこに彼は船室に閉じ込められ、訪問者は一人も許可されなかった。その他3

名の士官たちが囚われた。工兵のカー大佐 < p.245 >、スパーク少尉 Ensign、ドラモンドと共にニューヨークから来たローガン大尉であった。護衛が配置された第5番目はアリグザンダ・ハミルトンであった。彼は、この植民地に補給 supplies 監督として立ち戻って、食糧不足に責任を持つべきふさわしい人物であった。4つの評議会 Council が、今や一人の騎士気取りの < 空想的な > 人物の機関となった。ヴェッチが自らに納得させた、あるいはバイレスから納得させられていたこととは、彼の任務はその第一番目の植民地に関するもので、第2のものには何ら実質的な権威を持たないことであった。リンジ Linsay は才覚が限定された一兵卒だったらしく、他人の肩に託された彼の責任の重さしかなくとも嬉々としていたように思われる。そしてギブソンは、聖職者たち ministers によると、無関心で行なわれたことでもすべて受け入れ、自分の笛や太鼓のことしか考えていなかった。拘束された arrested 者たちに課された公式の義務 charge は全然なく、軍法会議も命じられなかったが、彼らの究極的処分について訝しく感ずるものたち全員に対しては、バイレスがキャンブルの裁判に際しての証拠とか、この評議会を転覆しようとするある士官の企みのことを口にした。ドラモンドの悪時に関することが直ぐに、非常に直ぐに証明となっただろう。この拘束に対する抗議の記録は皆無である。発熱と恐怖により体力が衰え、朽ちつつあるロープに吊るされた大工 carpenter の姿に狼狽して、入植者たちは何もすることがなかった。この会社のために働くという彼らの真剣な誓いに囚われて、士官たち Officers はその正当な代表権 rightful representiveni に公然と挑もうとはしなかった。バイレスはその忍耐の最後に到達した。彼は、バイレスによるジャマイカ撤退の提案に対するドラモンドの反対に口を閉ざし、これによって、彼によるただ一つの積極的行動が自らをこうとすることになってしまった。

クリスマス の 2 日前、この会社が敬意を払うだろうとの希望を持って

為替でスループ船ソサイエティ号を購入し、評議員たちはこの船を、理事会への最初の報告を携えて送り出すことに決めた。4名全員の署名はあったが、この書簡はジェームズ・バイレスの意見 voice であった。自認されているように、「長く、憂鬱な」と、それはすすり泣き、不平が漏らされ、自賛されて、訴えがなされた。最初の植民地はスコットランドにとって不名誉で、人間性への恥辱であった。黄金も、銀も、ニカラグアの木材もまったくなく、そうでないと報告した者はすべて、愚か者で、ならず者であった。この船団の従業員たち stewards は、同時に悪党だったと判明し、そのように小さな社会の中では、そうした悪者の集まりの試しがなかった。ドラモンド太佐 captain は、犯罪 < offence > のために拘留状態にあり、そのことから直ぐに次のようなことも明らかとなるはずであった。……カー大佐も拘禁状態で植民地において勤務にふさわしい状態にはなく、評議会は彼を退職させる意図を持っていた。 < p.246 > 砦ははしかるべき道具なしには再建不能で、この植民地はかくして無防備状態にあった。他方において、スペイン人たちによる大きな危険は存在しない。インディアンたちは役に立たない集まりであって、小規模で非力でしかない。それに対して、スコットランド人たちの選抜兵 grenadier は、直ちに彼ら < スペイン人たち > を打ち負かすには造作もないのが明らかだった。会社はよく知っていた——そしてここには、彼の想定していた権威によって脅かされというヒントがあって——末尾署名を行った者たち undersigned は、この植民地の政府のために働く義務はなく、正直な者たちで、理事たちが彼らと交代するために派遣するはずのものたちを待っているのだと。「しばらくしても、われわれは、幸運にもわれわれの手中にあるバトンを不名誉にも放棄するべきではないのです」。

この植民地は、今となっては後6週間しか継続しない無力となった惰性 inertia となった。単に存在するだけに必要なこと以外はどんな仕事

も行われなくなった。500人の者たちがジャマイカ行きに選ばれ、残るすべての婦女子がハウプ・オブ・ボウネス号とハミルトン公号に送られた。彼らの中には、ドラモンドと共にニューヨークからやって来た志願者たちのほとんどがおり、その者たちはジャングルの中で、彼と運命を共にすることを誓い、その者たちのすべてはバイレスによれば、「町を維持する」ことは疑わしい者たちだった。天候は北方向から、絶えず風があり、それに対して however、この港を離れることができなかった。というのも彼らの先駆者たちがそうであったように、風に向かって進むのは苦手だったから。船には水門を通過するのは可能ではあったが、ソサイエティ号も同様に出帆を許されなかった。後に明らかとなった理由のため、バイレスがその出発を遅らせていたのだった。

熱病が再び流行の epidemic 様相をとった。少なくとも 200名の重症者が戦場と海岸にはいた。毎朝夜が開けると、夜間の死者たちが船の側に転がされていた。聖職者たちは、この神の遣わされし災厄が人を墮落から救う < turn away > ことを望んでいたが、失望させられることになった。シーフィールド氏は、旗艦の上で、「汝の罪を注視せよ、さすれば汝は見いださん Behold your sins shall find you out.」⁵⁹ との一節 text に基づいて祈ったが、入植者たちは墮落に頑なであった。「私は思い起こす」とボーランドは書いた。「尊師シーフィールド氏の諸考察 observation を。そこでは、彼がこの世のいくつかの所で彼は様々な人たちと会話を交わし、フランドルの軍隊でも数年にわたり聖職者として従軍に携わったが、彼はこれまで、ここにあったような会社を見たこともなければ、関わったこともなかった」。聖職者たちは、この植民地の政争からは距離を置いていた。彼らはバイレスを非難はした detested し、ドラモンドが「この上もなく勤勉で、有用な人物」だと信じてはい

59 聖書→マタイ 7.7 か？

たが、< p.247 >彼の拘束（逮捕）には抗議をしなかった。バイレスは、今では彼らを見捨て、もはや彼らに祈禱者として評議会を開催するために招請することはない。彼らは、彼らが海岸に小屋を与えられなくなった時、酷く不平を漏らしたが、彼らが自らのために小屋を建設するために、ハンマーや斧を振り上げようとはしなかった。彼らの口を塞ぐためにおそらく、最後に何人かが、彼ら自身の小屋を提供したが、シーフィーフィールドは、*ライジング・サン号*の上に留まった。たとえ海岸にあるとしても、嘲からは平穩はなかったし、この入植者たちの blasphemous 不満からも、さらにこの3名の薄情な人間たちが会合を持ったとしても、彼らは自らの悲しみの思考のため、木々の間に逃げ込んだであろう。Inter densas umbrosa Cacumina Sylvas、ポーランドは、彼の頭上に落ちる木の葉を悲しく glumly 思い起こしたのである。

彼らの祈り、感謝、屈辱の日は、陰鬱な失敗であった。それぞれは地獄の炎や天罰についての説教を説いたが、耳を貸す者はほとんどなく、その多くが気晴らしだけであった。彼らは彼らが教えを受けたように長老主義を掲げる< 打ち立てる set up >するのは実際のでも、当を得た者でもない決めて、安心もして with relief、その第二の義務、すなわちインディアンたちの改宗に向かった。ロバート・ターンブルがクーナの村を訪ねることを願望を耳にした時、彼は一行に一団の兵士たちを同行させて出発するのに努力した。彼らは彼と遠方に赴くことはできなかったが、それは彼には通じなかった。彼はペドロと話をすることを切望し、もしもあのうまく逃げる酋長が生きていたなら、この植民地に対するスペイン人たちの準備についてわかっていることを見つけないと考えた。

彼らは1月16日の早朝に出発し、この湾の遠くの海岸まで小船で渡り、そこからは徒歩で進んだ。彼らは数多くの急峻な丘を登り、疲弊したポーランドにはそれを数えることもできなかったほどの多くの流れを歩いて

渡った。大河アクラ Acla の堤にあったペドロの村に到着した日暮れまでに、彼らは疲れ果て、腰まで水に浸かった。あの小さな村長の死、出発前に最初の植民地に届いていたことだったが、それは間違いで、彼は友人のターンブルと、愛情溢れる暖かさを持って挨拶を交わした。彼は聖職者たちも歓迎し、彼らの身に付けていた黒い広幅の布地や白いシャツの襟〈neckband〉には奇妙に映ったのだが、彼は彼らの身のこなしから、彼らは重要な人物たちだと理解することができた。彼は彼らの誰にも干した魚や肉、プラテンとトマトを食べさせ、彼らのハンモックの傍に灯す灯りを命じた。インディアンたちは礼儀正しい沈黙の中でこの聖職者たちの説教に耳を傾けたが、その意味するところには無関心であった。おそらくターンブルは疲れたてていたため、火灯りを通して捲し立てられた、聖書に基づく法話 scriptural homilies を翻訳することができなかったのだろうし、〈p.248〉聖職者にしかるべきことを行わせる語彙も持ち合わせてなかったのだろう。というのも、後になって彼らは、通訳がいなければ、ここで神の活動の場で活動をしようとも不可能であったと不満を漏らしたのであった。彼らによれば、インディアンたちは貧しく、裸の者たちで、のらりくらりと仕事もせず、彼らの宗教を受け入れるには、気質に訴える傾向があった、と。

ターンブルがペドロから学んだすべてによって、シーフィールド氏やストーボ氏が月によって時を数えた理解不能な聴衆に安息日 Sabbath の意味を説明したにもかかわらず、彼はためらう気分を喪失した。彼は、別の酋長たち headmen 〈頭〉と話すのを望み、小アクラ川へと西方に移動した。どの村においてもスコットランド人たちは親切な歓迎に会い、その度にターンブルのカレドニアへの帰還の切望は増加した。聖職者たちにそう無理をさせずに、彼らはもっと早くそこに到達できると信じ、彼らが沿岸沿いの経路で移動するなら、彼はこの一団を大アクラ川に連れ戻し、海側のこの堤に沿って北に向かうのを指導した。この聖職

者たちはこの兵士たちの背後で弱々しくたじろぎ、生育する草、驚いた鳥たちの朱色の眼差し、堂々たる木々の静寂たる谷間からなる広大なサバンナに驚嘆した。この川の河口で彼らは、海中の霧の中の晴朗の中に黄金島を目にして、自分たちが彼らの湾からほんの少し歩く所にあるのを理解した。東に海岸沿いに少し行けば、ポーランドは言った、彼らは岩だらけの場所に至り、再び内陸部に移動すればもう一方の川の海岸に接近できる。

しかし、ここに至り、われわれは、はるか長距離を移動し、そうして歪んだ分岐点を経過し、背が高く、暗い森からなる茂みを通過したので、われわれは誠に迷路に嵌まり込んで、当惑させられてしまったので、どの経路を移動すべきか、どうすれば自ら救出できるのかが分からなかった。それゆえ、混乱して暗い気持ちになった状態で、ジッと佇んでいると、われわれは海からの騒めきを耳にして、これこそが、われわれが今ある迷路からわれわれの方向を示すただ一つの確かな目印であると判断した。そこでわれわれは直ちに進路を、波の方向に転じて、われわれは、とても難しくかつ苦しい道ではあったが、行く手にあったトゲだらけの茂みをしのぐのに懸命となり、ついに艱難辛苦を通じて海岸にある開放的な空間に無事到達したのだった。

しかしながら、ここは砂地の歩く歩道でもなければ、波の碎ける荒々しい海浜でもなく、ターンプルが< p.249 >一行を水辺に導いた、内陸部に再び移動したのだった。「われわれは、波によって清浄になった……さらに、海岸の様々な湾曲や屈曲のためわれわれの進路が一層長くなって、場合によっては険しい岩場を乗り越えたが、それを登るには手足を使わざるを得なかった」。彼らはアクラ川沿いの最後の村を離れ

て以来、何も口にしなかった。誰もが疲弊したが、シーフィールドはほとんど歩けず、ポーランドがその死を懸念したようにとても弱々しい状態になった。最後に彼らは、岩場から流れ出て、あたかもハガルの児が死に瀕した時、荒野の彼女にとってのそれにも比する、神の贈物のような泉を見つけた。⁶⁰それは、シーフィールドに留まる力を与えた。夕暮れまでに彼らは木々の上に、彼らの船のトップスル<中樑>の帆桁 yards を発見した。「主が、彼らの知らない方法で盲を導いた」、とポーランドは引用した。ターンブルにはあまり感謝せずに、「われわれの出発と帰還をお守りくださり、その結果われわれの、みちがひらけ、われわれの力があるべき状態となった」。

この大尉 Lieutenant は、評議員会に直行した。インディアンたちが彼にもたらした情報から、彼は述べた、バリアヴェント艦隊とサンタ・マリアからの一軍 army はこの植民地をまもなく攻撃すると考えられると。バイレスは感動しなかった。彼はやって来るいかなるスペイン人とも戦う意志があったが、カレドニアは海上からは難攻不落で、愚か者以外の何人たりとも森からの攻撃はしないと。1週間後、この会社の指揮官たちからの強い圧力のもと、彼は、船団からいくつかの大砲を陸揚げして、この砦の銃眼の何ヶ所かに配置すべきことに合意した。

しかし、彼はドラモンドやトマス・カーを解放はしなかった。

「ここは今や、われわれにとっての晴々とした楽園である。ただ、悲しいかな」

カレドニア、1700年2月

カレドニアの森より、ストーボ氏は、1700年2月2日付書簡の冒頭

60 アブラハムとの間にイシュマエルをもうけた女の名前。創世記 16

に書き記した。謹啓 Reverend Sir……………3名の聖職者たちが、愛の森に孤独な状態にあり、ニュー・エディンバラの悪臭と冒瀆から離れて、議長 Moderator に1通の書簡を書いています。彼らは、この植民地の悲しむべき窮状をその人に伝えるのが彼らの義務であると考えました。あらゆる悲惨の元であり、根元であったのは、他ならぬ入植者たち自身でありました。われわれの土地がその屑を撒き散らしたのです。……………彼らは、宗教も、理性も、正直さも名誉心もない、非を認めず、有害で、< p.250 >卑しいものたちでした。われわれは、彼らの悪行 *wickedness* が広がることも、ましてやその成長を止めることもできませんでした。主 God は、悲しむべき sore、うつりやすい contagious 病で彼らを罰せられ、恐るべき見せしめ< example 戒め>の例として、彼自身の宝石や素晴らしいものを取り上げ take away しました。この病は、しばらくのうちに和らいで、今では以前の勢い *rage* に戻りました。

それは、彼らの使命の失敗によって困惑させられ、自分たちが奮い立たせよう<示唆しようとして>とした人たちの恥辱< contempt 蔑み、不名誉>によって傷ついた、孤独な者たちによって作成された、悲痛な bitter 書簡であった……………< p.251 >

彼らは木々の下で共に席について、それぞれが他人の同情によって慰められ comforted、その手紙を強めるような言葉、言い回し、聖書への言及を提供しました。ストーボ氏の筆は、ひっきりなしにインク壺に浸され、次から次へと不平や非難を連ねた scratched。長老主義 Presbytery の確立は不可能ではあったが、親類仲間 Collegiate of Relation における同僚としての義務をはたした。彼らは安息日毎に、ある者は旗艦上で、二人が海岸でと、説教を行なったが、ほとんど聞く者が訪れることはない、それは植民者たちの悪しき意地っ張りであった。少なくとも、1/3は、スコットランド語を話せも理解もできない野蛮なハイランダーたちに対しても似かよったものであった。彼らはわれわれには野蛮人<

異教徒 *barbarians* > であり、彼らにとってわれわれもそうであった。少なくともその行動を見ると礼儀正しく聖職者たちに耳を側立てにやってきたのではあったが、インディアンたちも同様であった。神の僕たちは、その報いなき仕事をやり遂げ用としたし、彼らは奉仕するのに同意していたその年の終わりまで、滞在するはずであった、しかし……われわれは今や、あなたに告知 *Advertisement* を示し、誰一人としてここに止まることが決定されていないという、聖職者の *Reverend* 使命 *Commission* をあなたにお伝えするのをお願いしなければならない。彼らは祈りと理解を求めたのだった。彼らは、福音書の労作 *Work* の中の穏健派の苦しむ兄弟たちと契約を交わした *sign themselves* のだった。彼らはその労作 *Work* に封印を施し、ニューエディンバラに、口にするのはふさわしくないと思われた何かに向かって、歩を進めた。——再び斧やノコギリの音、絶望した倦怠の一月の後今や仕事について人たちの様子を。

スペイン人の攻撃に対する恐れ *threat* が、ジャマイカまで逃れとまでではなくとも、<入植者たち>たちを驚かせ、ターンブルのような若い士官たちの熱情がそれに対する抵抗へと彼らを刺激した。ライジング・サン号からの4門の大砲が今や海岸に運ばれ、聖職者たちが、愛の木陰 *Shades of Love* から降りてきた時には、あの砦の脇の低湿地を横切って引き出されているところだった。バイレスがそれを正当化はしなかったが、70戸の小屋と2棟の倉庫が同時に再建される場所であった。護衛所 < *guardhouse* > の屋根が修復され、聖職者たちには < p.251 >、捕虜がない場合には教会としてその建物を使っても差し支えないと既に知らされていた。このこともまた、彼らは、穏健派の総会議長 *Moderator*⁶¹ には伝えていなかった。すべての士官たち *officers* が抵抗は望ましいと考えていた訳ではなく、ポート・ロイアルに向けての出帆

61『なんでもわかるキリスト教事典』朝日新聞出版、2012. P103 参照。

を待つ者たちのほとんどが、それが必要となる前に立ち去るのを望んでいた。ジョン・ラムゼイ少佐 Major といく人かの大佐たちはソサイエティででの出発を望み、船が立ち寄るどの港からでもスコットランド行きの船に乗るのを望んでいた。自分の船室に拘置の状態で病んでいたトマス・ドラモンドは、自分の解放を願い出て、その結果健康の回復のために帰国できるのに希望を託していた。過去5週間にわたり、入り口に顔を出すのは護衛と食物を運ぶ給仕のみで、彼はこの植民地に対する義務を喪失し、ただただ己の評判だけしか考えられなかった。彼が望んだのは、バイレスとの抗争に関して評議会に報告する最初の人物となることだけであった。

行われる仕事のほとんどが、この評議員会の指示や認可なしにであって、彼らによってしばしば誰もが、風向きが南東からとなれば出港のため直ちに乗船し、銃器を確保し、甲板を清掃するように命令された。バイレスによる自慢のスペイン人に対する反抗は、彼らに抵抗するいかなる試みもキツパリと否認することになった。彼によると、それは非合法で、すべての戦争は法にかなうものではなく、キリスト教に反するものであった。アリグザンダ・シーフィールドは、そうした冒渎 blasphemy に激怒した。⁶²彼はキャメロン派の者たちと共に兵役につき、それが合法的だと理解していた。彼は彼らが賛美歌 Psalms を聴きながら死に向かうのを目撃したことがあり、それがキリスト教徒だと理解していた。評議員は彼に対して、彼が馬鹿なことを口にしていて、それが複音書に抵触し、無神論となるように人を惑わすものだと告げた。2月

62 キャメロン派:頑迷な監督制拒否の集団。長老派の中でも特に説教者のリチャード・キャメロンにちなんで名付けられた。改革長老派教会 Reformed Presbyterians。スコットランド教会改革の一派。R. キャメロンに率いられ、長老制擁護の2契約(1638, 43)を原理とするカベナンターを1680年結成。同年キャメロン戦死ののちは南部で信徒を獲得、90年には数千人を数えた。終始スコットランド教会に合流せず、1743年マクミランのもとに改革長老派教会を設立したが、1876年大部分は自由教会に合流、1929年にはスコットランド再統一教会に統合された。

4日の日曜日、バイレスは正直にも、彼自身の安全 safety がこの植民地の安全 security よりも重要だと認めた。彼は、フライボートがこの湾からソサイエティ号を曳航できるなら直ぐに、船と共に立ち去るとふれ回った。

この考えはおそらく彼が最初にそのスループ船の出発を遅らせた時以来彼の頭の中にあっただのであろう。こうしてそれが、ジャマイカのブリガンチンがその朝に到着したことで、行動に移されたのだ。船には乾燥した財貨やニグロ奴隷が積み込まれたが、船長は販売を望んでいたいくばくかの牛肉と小麦粉を載せた。彼は同時に、彼が水漏りを塞いでしまえば直ちに立ち去りたいとしていたが、彼が所持していた知らせの中にはその理由は説明されていなかった。4隻の大型戦艦が最近カディス Cadiz からポルトベロに到着し、最大のものは60門の大砲が、さらに3隻がカルタヘナから到着すると言われていた。ポルトベロの通りでは < p.252 > 新たに焼かれたパン、陸塊からカルタヘナに上陸するはずの乗組員や兵士たちのための何千というパンの塊 loaves の香りで、充満していた。

ジェームズ・バイレスは、その荷物、その義兄弟 brother-in-law と自らの徒弟 apprentice と共に、夕暮れ前にソサイエティ号に乗船していた。彼の述べたところでは、ジャマイカからの食糧とともに直ぐに引き返すとなっていたが、理事たちに宛てた評議員会から彼が運んだ書簡類には、速達便では答えられないどんな質問であろうとも、バイレス氏宛の評議会から彼が運んだ。おそらく——その言葉 reference はバイレスが口にした、ポルト・ロアイルからこの会社に対して彼が書いたであろう書簡類への言及であった。誰一人として、この恥知らずな撤収に抗議する者はなかった。すべての者が、疑いもなく、それが「われわれの救助の一步」だとシーフィールドと共に合意したのだった。それは、青のフライボートが水門 sea-gate を通過するスループ船を獲得する前の水曜日であって、そこにはもう1名の乗客が乗船していた、つまりダルグレー

シュ夫人 < Mrs, Dalgleish > であった。「彼女は臨月が近かった big with child」と評議員の書簡にあった。「われわれは、彼女の事情としかるべき行動に必要な扱いをするに十分な状態ではなかった」。彼らの希望は、彼女が究極的にはスコットランドに到着し、この会社が彼女の夫が稼いだ給付を彼女に支払うだろうということであった。

ハミルトン公号の曲室の窓から、トマス・ドラモンドはこのスループ船がその地点の向こうに姿を消すまで注視して、彼よりも先にジェイムズ・バイレスの音がミルン・スクエアで聞かれること確信していた。彼らは毎日の小麦粉の支給を、1/4 ポンドだけ増加したが、盗難の続くブランデーのことを気遣い、ライジング・サン号の給仕ジェイムズ・ミルンを疑った。しかし、彼らはこの半島の防御を組織するためには為すことがなく、拘束された士官たちの解放や、海岸にもっと多くを配置するのを頑なに拒否した。2週間にわたって、北の水平線下に hull-down あったスペインの巡航船がこの植民地を注視していたが、それは一層接近して、スコットランド人たちが偵察に派遣していたロングーボートを捕獲し pick up た。明け方から夕暮れまで、船尾の金具 gold やその船のトランペットの遠くの呼び声が、見張り台 < Point Look-out > から見えたり、聞こえたりできた。その週の終わりまでに、手足が痺れたウサギのように、この指導者の欠けた植民地は、恐怖によっていま一度、動けなくなった。

数ヶ月の間、スペインは、カレドニア人たちが彼らのことを知る以上に、スコットランド人たちの兵力について知ることは少なかった。1名のインディアンが、< p.253 > ターンブルやドラモンドの前で彼の指を上挙げて、正確に、何隻の船が観測されるかということができたが、ツバカンチの大佐⁶³の前で髪の毛の1束は、500名ないしは5000名の兵

63 a 16th century or 17th century military officer corresponding to a colonel

士の意味があったかも知れない。スペイン人たちの指揮官 commander は、同時に厳しく、かつ厳格な規則を義務付けられていた。カルタヘナ、ポルトベロ、パナマ、ヴェラ・クルーズ⁶⁴そしてメキシコ・シティとあのマドリッドの瀕死の受難王 Sufferer を繋ぐ水陸を跨ぐ連結、すなわち長い鎖の司令系統 Lonf chain of command が、不可能なものはありません、強固で独立した作戦は懸命でないものを形成した。1名の総督 Governor が、大佐の報告を判読できる前に数日が過ぎ、総督から長官 President に伝わる前に1週間から2週間、長官からの急送便が副王 Viceroy の目に届くまでに1ヶ月、そして、この副王がマドリッドからの返答を望むのに大方1年間に過ぎた。

カルタヘナの新長官、ドン・ジュアン・ピミアンタは、彼が受け取った情報の急送便 dispatch とそれに対する命令の帰還 return との間の長い遅延 long delays との間について、ほとんどの者たち以上に耐えきれなかった。彼は、ハウプフル・リターン号がカルタヘナを出発したと聞くなり、彼は国王に対して、2度にわたって放棄された砦がいまならスペイン兵たちによって占領すべきだと忠告したものの、命令なしにはこれを行おうとはせず、彼の書簡がマドリッドに到達できる前に、スコットランド人たちが戻ってきた。ピミアンタは、小男で、浅黒い皮膚をした、サラマンダー<火蜥蜴>で、カスティリア風のこざっぱりして、厄介な男だったが、目的には冷酷だったとはいえ、戦争の礼儀には綿密なくらい正確なところがあった。彼はペンで描いたような兵士ではなく、スコットランド人海賊や海賊船を呼び集めて、紙を無駄にしたり、自分の情報収集を軽視するようなことはなかった。彼は、ドンキ・ホーテ同様に、騎士道的な武器の携帯を切望したし、彼らを打ち負かすことで自分を飾り立てる勇気や熱意を尊敬していた。彼の守備隊 garrison や船舶は、

64 メキシコ東部メキシコ湾に臨む港。

しかしながら、疾病によって負傷したので crippled、彼が考えたのは、彼の氣力を削がれた兵士たちが「戦闘状態に見えるような何かに」引っ張り込まれるざるを得ないということであった。彼が要請したのは熟練した seasoned 歩兵たちや信頼のおける海上士官 sea-officers だったが、それは、彼らが到着する時になれば、——すでに到着しているとしても——スコットランド人たちは追い出すには強すぎる状態になっていると考えてのことであった。彼はひどく不平をこぼしたのは、カルタヘナの市民たちが、国王への仕事<従軍>に財布を緩めることを命じられた場合、自分たちの財布の紐を締めてしまうことであった。彼の評議員たちは、戦争の訓練などになんの知識もない商人たちや、滑稽な風聞によって混乱に陥るような恐怖をもつ人たちだったからである。彼に言わせれば、スコットランド人たちは、この半島の付け根の上にある鉞山を開削し、その方向からのスペインの攻撃があれば、< p.254 >それを爆発させる意図を持っていると。ピミエンタは、一体誰がそのような長い導火線をひけたのか、と尋ねた。一体誰に、そのような大きな爆薬の鉞脈が湿気ず、このような気候の中で使い物にならなくなるのが確信できるのか？そうした馬鹿げた思いつきが、彼は考えた、「軍事的紛争に向かうような輩に対し夥しい量の書類を作成することに導くのだ」と。

1月15日に、カニラ伯爵 Conde de Canilla、パナマ長官 President of Panama が、ついにこの植民地の勢力と士気に疑いがなくなって、彼が恐れたよりも両者がはるかに低い much lower のが分かって喜んだ。その日の正午、1名の軍曹と4名のインディアンたちが、サンタ・マリアから彼のところに2名のスコットランド人脱走者 deserters を伴って来た。——ジョン・ジャーディンという労働者と、ウィリアム・ストラーンという仕立て屋であった。両名は、入植者として第一次遠征隊と共に航海し、両名共にカレドニアのアン号に乗ってドラモンドと共に帰国した者だった。クリスマス少し後、彼らは、2枚のビスケットとわずか

なタラの日々の配給<食糧>でこれ以上逃亡するよりも、森の中で生死を共にすることに決めた。数ヤードのくすねたりネンと交換に、あるインディアンが、金が見つかるかも知れないところに彼らを連れて行くのに同意した。しかし、彼はその金が硬貨だとは言わず、それを自分で見つけるように希望するとも。彼は二人を山中に案内し、campmaster = colonel ツバカンチの大佐に引き渡した。その後彼らは、サンタ・マリア経由で、パナマ・シティに送られたのだった。

彼らは、その午後、カニラと彼の評議員の前に連行された時、惨めで、恐れおののいた。彼らの誰一人として、彼らの厄介なスコットランド語を理解できなかったが、一人の読み書きのできないアイアランド人冒険家で、海兵隊員 marine のマイクル Michael・バークと呼ばれた者が通訳として働いた。カニラは逃亡者たちに優しく、バークに対して、彼らの教会が認めたとのような宣誓もしてよいと告げ、彼らを別々に吟味した上で、第一及び第二遠征隊の双方について立ち入った質問をすると告げたのだった。夕暮れまでに彼は、この植民地の船団、武器類、食糧 supplies ならびに防衛、不満と脱走について彼らが彼に語った全てに通じるようになった。彼らは、バイレスが旗艦からの大砲の上陸に同意する前に出発したが、ストラーンが述べたのはこの同郷人が「海岸の防御砦 artillery を一つも設置しておらず、彼らの全勢力を彼らの防御のための建物の建設に注ぎ込んだ。というのも、古い要塞 fortification は、門もない、お粗末な状態だったので」ということだった。この質疑 interrogation が終わると、この仕立て屋と労働者は護衛付きで捕捉された take away。彼らは再びほとんどの人間の存在を隠す暗闇の中に置き去りにされた。その後ある日の午後、彼らの中の生存者の一人は記録に残ったが、それが決定的なことであった。

< p.255 >カニラは、カレドニアへの攻撃を即刻命じたが、彼の巡洋艦隊 cruisers は、ポルトベロへの宝の道 treasure road に上陸し、そこ

から船でカルタヘナに向かった。ヴェラ・クルズからニュー・グラナダに至るまで、スペインの諸<属>州< provinces >のあらゆるところで、⁶⁵ 恐ろしい熱病の流行 epidemic があったが、その長官 President は、病気でない船員たちや兵士たちが<おれば>この海賊からなるとるに足りず恥知らずの植民地を根絶するのに十分であると確信を持っていた。彼は自らが1年前に試みた計画を提案し、その時はモントゴメリによる小戦闘 skirmish とツバカンチからの惨めな退却とによって終結した陸上からの攻撃との計画だったが、この度は、ドン・ディエゴ・ピエトロという司令官 comander 指揮下のバリアヴェント艦隊による海路からの同時的な猛攻撃に援助を受けられるだろうと。ピミエンタと、彼が戦闘という任務に引っ張り込んだ兵士たちの面々は、バリアヴェント艦隊による補給輸送が可能になればすぐに、カルタヘナを出発する予定であって、カニラは、3隻の船とパナマ・シティとポルトベロからの守備隊からの500名の兵士たちとカレドニア湾の沖合で合流するはずであった。3つの民兵集団が、同時にパナマ・シティからも合わせて、サンタ・マリアへとオールで進むガレー船が送られる予定で、そこからはにやけた foppish ダリエンの総督 Governor ドン・ミゲル・コルドーネが、カリゾーリの民兵隊 militia にツバカンチの奴隷や召集兵たち levies を補給すべく、彼らを内陸に行進させるはずであった。次に彼は400名の兵員の指揮行い、コルドーネは、彼の斥候がバリアヴェント艦隊の到着を報告すればすぐにカレドニアの北方を攻撃するはずであった。

2月12日の夜明け、ピミエンタはペドロの旗艦、サン・ジュアン・ボータイスタ San Juan Bautista に乗り込んで、野戦砲や砲架の最後を積み込むのに待機していた大型ボート数隻のいたあの湾の外に出るように命

65 New Granada スエパグラナダ、南米北西部の旧総督領；現在のエクアドル、ベネズエラ、コロンビア、マナマの各共和国を含む。または、スエパグラナダ；パナマが分離する以前のコロンビアの旧称< 1819 - 30 >

令を出した。彼の言葉にならない怒りを耳にして、一人の無能な舵手が、その城の風下で浅瀬に船を乗り上げたが、それは船が自らの小舟によってそこを曳航して離れたのは夜明けになっていた。その時でさえ、船は夜の微風の中でその錨を引き摺っており、再度乗り上げてしまった。銃器を引きずることさらにもう24時間、その旗艦は、ついに小艦隊の後を航行できたのだった。

もしもカニラが望んだように全てが進み、バリアヴェント艦隊が、コルドーネの前進ラッパに応じて、黄金島の島陰からある朝に砲声と共に現れたならば、士気を挫かれたスコットランド人たちが抵抗もせずにおそらく降伏したであろう。彼らは運よく in time、ありえないような芝居がかったやり方で、あの英雄が、袖から剣を携えて突然のように現れたことで、この不名誉から救われたのだった。

< p.256 > フォウナブのアリグザンダ・キャンブルが2月11日の日曜日に到着し、バルバドスのスループ船の中で、監視巡航船を見送った。カレドニアに到達するには、彼には4ヶ月のイライラする月が必要だったし、彼が持参した食糧はほんのわずかで、ジョン・スチュアートという名の若い海軍士官と、彼自身の不屈の精神の強さだけであった。1隻のジャマイカ・スループ船が彼の船と共にあの湾内に入り、巡航船がそこへと導き、船の船長はスコットランド人たちに、ベンボウ艦隊が、彼らを助けるために航行中だと伝えた。この意味のない報告に元気付けられたとはいえ、本当の激励はフォウナブの面魂、彼の静かで真っすぐ前を向く頭部<顔>、彼がライジング・サン号に漕ぎ寄った時のピンと延ばした背中や真紅の上着に由来していた。彼は決してよそ者ではなかった、士官たちの多くはラムゼイのスコットランド大部隊で彼と共に従軍の経験があったから、入植者たちの多数が槍を下げるか、ドーテニーやランデン⁶⁶で彼に従ってマスケットを担いだことがあった。3名の評

66 不詳、台湾人名地名辞書には、保加利亜とあり。他に蘭登の表記も。

議員たちは、彼の使命を理解するのにほとんど悩まなかったが、この植民地防衛に対する全責任を喜んで彼に与えた。彼の忠告は単純で、闘うこと、——つまり、彼の言う戦いとは、防御ではなく攻撃ということであった。彼は止むことなき指導力の嵐の中で指揮をとり、拘束された将校たちの即時解放、ジャマイカ向けに出発する部下たちの上陸、さらには彼らの砦と塹壕への即座の起用をを命じた。「それによってわれわれは」とボーランドは、全てがこうして最善の状態にあるとあからさまには確信を示さず、書き記した。「人は図り、神は決める、神の御心に⁶⁷」

トマス・ドラモンドがハミルトン公号から上陸した時、フォウナブは彼を温かく抱きしめた。彼らはアーガイル＜連隊＞で共に大尉 captain を務めて以来、会ったことがなかったが、それは、キャンブルが彼の友人ならこの命令を彼と共有するだろうと期待を持ったからだったろう。しかしながら、彼が投獄されていたことによる冷遇のイライラは、ドラモンドのこの植民地に対する忠誠心を削いだ。彼はすでに海上にあったジェイムズ・バイレスのことだけしか考えられず、もしもエディンバラに向かっていなければ、彼に反対する口汚い不平の書簡を書いていると確信していた。彼は病んでおり、こうした過酷な状態の中ではファウナブにとって何の役にも立たなかった。彼が、理事たちの前で自らを釈明するための早期の機会を求めて、できるだけ早くスコットランドに航行するべく出発するのを願っていた時、キャンブルは快くそれを与えた。

その到着の1日以内に、ファウナブは、ターンプルのインディアン仲間によると、この植民地の攻撃のため、＜p.257＞いくつかのスペイン兵士たちの集団が終結しているツバカンチへの攻撃を提案した。キャンブルはこの国について何の知識もなく、そこを行進したり、そこで闘うことのむつかしさも知らなかった。彼が知るのは敵のありかであって、

67 Man proposes, God disposes. 事をはかるはひと、成敗を決めるは神。ことわざ

それで十分であった。」彼の自信は、若い士官たち、とりわけ、民兵として彼が訓練した30名の戦士たちを差し出し、ペロド酋長 Captain が、かつてスコットランド人たちが戦闘を決めたことを耳にした時の数以上の手勢を率いて加わることを口にした、ターンブルを奮い立たせた。火曜日の朝、48時間にわたってほとんど睡眠をとらず、彼はずっとこの植民地におり、アリグザンダ・キャンブルは200名のスコットランド人<兵>とターンブルのインディアンたちと共に、この湾を渡った。この兵士たちは、月曜日の夜、ロウソクの光で、急ごしらえで選ばれたものたちで、各酋長がその指揮によって最適の部下たちを選び、さらにその中の12名は、忠誠 loyalty と敬愛 affection によって特にターンブル所属となった若い志願兵たち young Gentlemen Volunteers であった。彼らはマングローヴや深い森を通してこの湾の南へと信じられないほどの速度で行進したが、彼らは何ヶ月も腐りかけたビスケットやタラ以外に何も口にしておらず、重いマスケット銃、弾薬箱と銃剣を運び、その濡れた衣服や長い髪はイバラに引っかかる度にまとわりつかれた。だが、夕暮れまでに、一行はアクラ川沿いのペドロの村に到着した。彼はそこで彼らを待ち受けており、噂によって警戒していたので、彼の顔は戦争のため黒く塗られ、彼の肩は、1年以上前にスコットランド人たちが与えた汚れた赤い上着に覆われていた。フォウナブと彼の士官たちは、その夜ペドロの長屋で眠り、彼らのハンモックの側には火があり、夜明けに彼は彼の戦闘士たちと共に彼らの行進に加わった。

道は、今や火曜日にそうであったよりも険しくなった。というのも、地面は山系の尾根 ridge に向かうと、着実に上向いたし、倒木や、大きな丸石、鮮やかな緑の流れによって道が塞がれていた。キャンブルは、彼の意思の強さと彼の個性の力でスコットランド人たちを集合させたままにしておいた。おそらくはターンブル以外は、誰一人として、彼らの母国の丘とも、あるいは彼らがかつて従軍に参加した埃っぽいフランド

ルのポプラ並木道とも異なる、このような森深くに至り、こうした国をこれまで経験したことはなかった。時に彼らは、前方には男の赤い肩以外には何も見えず、彼が進むにつれてパチンと音を立てる怒り狂った木の枝しか見えなかった。彼らは植物の遺骸からなる千年王国に膝まで浸かり、この葉の破片で日光を遮られて視界を奪われ、隠れた小鳥たちによる騒々しい抗議に打ち負かされたのだった。

ターンブルはそのすべてを味わった。

< p.258 >

私は、志願者たち（彼はのちに自らの従兄弟に対して書き送った）と共に、そしてペドロ酋長とおよそ30名のインディアンたちと共に川沿いに最前列に進むように命じられたが、残りはその部隊 party 内で分割された。われわれは大きな丘を越え、南側の海 South Sea に注ぐ川を渡ったが、そうするとインディアンの密偵 spies のひとりがやってきて、スペイン人たちが次の丘の上におり、自らの増強のために木々を切り倒していると報告したので、私はキャンブル大尉に報告を送ると、彼はその部隊 party と共に上に進んできて、そこで小休止した。

正午、猛烈な暑さ。「次の丘」は、木々からなる長い樹木の山であって、その麓からはツバカンチの平坦な頂上までは数マイルあった。木葉のチカチカする動き以外に何も見えなかった。スコットランド人たちは、彼らの立つところで疲弊を漏らすか、疲れから来る苦しみを泣き漏らして、地上に置いたマスカット銃の上に身体を伏せた。インディアンたちの子供じみた熱狂 enthusiasm が憂鬱な絶望に変わると、スペイン人兵士たちが配置された砦柵に対する攻撃の士気がすっかり失われた。ペドロは、

希望を託して微笑み、彼らが待ち伏せをしているところに、彼らが止まらない訳を尋ねた、というのも、スペイン人たちはカレドニアに行くにはこの道を通るに相違なかったのだから。キャンブルは腹立たしげに拒否した、と言うのも、兵士とは追い剥ぎではなくて、マスケット銃を用意し、バイヨネットを構えて的に対して勇敢に進む勇士なのだから。彼は自分のスコットランド人たちを起立させく to their feet >、再び行進を命じた drove to the march。彼らは、夕暮れ前に険しい坂を2マイルほどしか進まなかったが、それから、小さな泉のそばでインディアンたちは、それ以上進むのを頑強に拒否した。ツバカンチに到着する前に、水はまったくなくなると言いはった。その夜、スコットランド人たちは自らのポケットに入れて運んでいた最後のビスケットと干し魚を口に入れ、地面の上で、できる限り睡眠をとったが、夜明けが来ると嬉々としたのだった。彼らは縦列で立ち、進行の体勢にはあったが、インディアンたちは、斥候を前方に一人も送ろうとはしなかった。ターンブルは彼の友人たちを恥じた。

私は可能なだけ説得を行い、彼らには多くの報酬を約束して、私自身が彼らと共に行く所存だと言った。彼らの言うには、私は殺されるということだった。私が死んでも何のこともないと言うと、その酋長Commanderはすっかり理解できた。そこで彼らは私に微笑んだが、彼らには何も起こらないと思った、私は指導者の方を向いて、彼らの言葉でそうだと彼に伝えると、< p.259 >カレドニアでの彼らの勇敢さに大いに自信を持っていたが、今となれば、私は彼らが誰も気が遅れしている状態だと理解した。それから彼らは非常に気違いじみた状態となって、インディアンたち全員を糾合し、まるで彼らがスペイン人たちと事を構えるかのように、その丘を駆け上がったが、私が彼らを鎮めると、彼らはすぐさま2名のインディアンたちを私に従わせた。

彼は斥候たちと彼の12名の志願兵たちと共に進軍し、2時間後に彼はスペイン活動部隊の弓の射程内に入った。彼には彼らが見えなかったが、彼の不注意な志願兵たちの騒々しい接近のことを耳にしていたので、彼らのことが分かっていた。「私は彼らが木を切り倒し、早口で喋るのが聞こえた。というのも、彼らの前哨隊が駆け寄ってきて、私の前進を彼らに報告するのを聞いたので」。彼は、二矢分の射程まで森の中を退却し、防御線に部下たちを配置し、フォウナブ宛のノートを鉛筆書きした。もしもそれが要請であったならば、この隊長 Commander は、すぐにも攻撃できた。なぜなら、スペイン人たちには戦闘に打って出る意図はなかったのだったから。その上、彼らが砦を築いたのはこの丘の南斜面 descent の上だったので、スコットランド人たちには猛攻には優位であったろうから。キャンプは増援に備え、その後自ら到着した。彼とターンプルは空き地に矢来 stockade を見るまで前に向かって匍匐⁶⁸ crawl 前進し、その結果彼らは心底まで感銘を受けた。その壁は人の背丈ほどの厚い薪 pile で作られ、地面の中に打ち込まれ、木の枝で組まれていた。それは、方形堡や稜堡、切羽、側面、山形網を使った星型であった。調理用の炉からその上には煙が漂っており、スコットランド人たちには火打ち金の光による先行を守ることもできたし、高揚した声の響きも聞こえたが、人の姿は見え、その戦士たちが如何程まで弱いのか、それとも強いのか彼らには分からなかった。

フォウナブが、ターンプルに対して、すぐにでも攻撃しようかと尋ねたが、この大尉 lieutenant は前進する名誉がどこにあるのかと尋ねた。キャンプは微笑み、彼が氣にいる位置ならどこでも配置に付けると答えた。自分たちの志願兵たちと共に先頭を、がターンプルの答えであった。

彼らは、待機するスコットランド人たちとインディアンたちのところまで引き返した。フォウナブは前線に、攻撃手 axemen を配置し、自らの剣を引き抜いて、前進と叫んだ。万歳と共にターンブルの志願兵たちが飛び出し went away、インディアンたちがそれに従った。彼らは空き地に走り込み、止まり、列を組んで、最短の土囊から 20 フィート離れたところまで前進した。そこで彼らは再度停止し、彼らのマスケット銃を提示した。ターンブルにはスペイン人たちが彼に向かって手を振るのが見えたが、皮肉なことに、彼を惨めな希望に一層近寄せるかのように誘うことになった。彼は彼らを見無視して、< p.260 > 静かに火をつけるように命令を出した。志願兵たちは、スペイン人たちが左側の突出部から salient 返答した時の彼らの最初の煙によって、第二番目の一斉攻撃に備えた。ターンブルは彼の右肩に弾丸を受けたが、彼の小隊にバイヨネットを所持しての前進を命じ、歩行を継続した。「この一隊が失敗しても by falling 何も損をしない。諸君たち Gentlemen は止まることなく、勇敢に前進。それでも、スペイン人たちが臆することもなければ、わが兵士たち Gentlemen も、火縄銃の火先をつかんだまま立ち尽くすのだ」。

こうなるとファウナブは、森から出て、スコットランド人たちの主力 main body を背後に従え、剣を手にして駆け出した。彼らが矢来に到達した時、切込み隊 axemen が叩き切り、切り払ったと思えば、残りが木の枝を貫いてバイヨネットで突き刺すか、雄叫びをあげる防御者たちの顔に向けて発砲した。ペドロの戦士たちは、この攻撃の傍で金切り声をあげ、壁の向こうに彼らの槍を浴びせかけた。ひとたび切込み隊が防御柵に突破口を切り開くと、スコットランド人たちが雪崩込み、バイヨネットを手にして突進し、ダンビラで叩き切った。スペイン人たちは調理用の炉を使って小さな防御を作り、それからその武器を投げ下ろして、境界門 far gate から森に逃げ込んだ。右肩の関節にマスケット銃の弾を受

け、左手にその剣を掴んで、フォウナブは追跡を命じた。1時間以内に日が沈み、彼の鼓手が暗闇に招集の合図をした。

この砦の泥だらけの地面にはドン・ミゲル・コルドーネの宝石を散りばめた剣が転がっていた。その上、彼の素晴らしい上着、レースが施され、紐がついて、左胸には金色の毛で刺繍が施された、セイント・ジェイムズの騎士勲章のバッジが付いていた。

それは勇敢な小競り合いだったが、全面的にフォウナブ好みの、驚きと度胸とが、強力な防衛の位置にあった優位な敵を凌駕したのだった。スコットランド人たちの中の7名が死亡し、砦柵の切れ目やその中に横たわり、14名以上が負傷した。インディアンたちの死者は数えられなかったが、ペドロは、ターンブルが撃たれた突出部を攻撃した時、負傷した。スペイン人たちの損害に関する正確な記録はなく、のちに行われた報告には馬鹿馬鹿しい誇張があったが、24から36名の囚人たちが黒い顔で泣き叫ぶインディアンたちに取り囲まれていた。スコットランド人たちが、フォウナブとターンブルとが負傷したのを発見した時（あるいは彼らを激昂させたのは、その階級にふさわしい死だったのかと言われたが）、彼らは囚人たちの上に転がされ、キャンブルが撤収の合図をすることができる前に、すでに何人かを虐殺していた。

< p.261 > 死者たちは火明かりの中で葬られ、祈祷者たちが彼らに対する祈りを唱えた時には、フォウナブがその勇気を称えた2名の裸のインディアンたちがいた。最初の者は、ディアゴの息子、スティーヴンで、第二は、キャンブルが自らの名前アリグザンダを与えた無名の人物であった。彼らはこの会社の業務に就いた酋長 captain とされ、真紅の上着とビーバーの帽子をそれぞれ与えられたが、その後の所有者たち自らが使用することはなかった。

金曜日の日の出時に、スコットランド人たちはカレドニアへ向かって歩を進めた。彼らは、彼らの3名の捕虜 prisoners 以外は全てを残した。

彼らは彼らがこの砦にかかわって可能なすべてのものは焼き払い、破壊して、運搬可能な武器、弾薬及び食糧は持ち去った。彼らは2月18日の日曜日に、この湾の南海岸に到達し、彼らの太鼓が勝利の合図をした。フォウナブがバルバドスのスループ船で到着してからわずか7日間しか経っていなかったが、それが彼によるこの植民地の実効性のあった統御の終わりであった。しかし、彼の傷は痛み、熱がそれには伴い、彼はそれでベッドに止まることにはなったが、彼の生命力 spirit や風貌には依然としてカレドニア人特有の溢れる強さが残っていた。

ツバカンチでの勝利は、フランス・ポーランドが神から期待したこと他ならなかったが、この入植者たちがそれを祝福した方法が彼を陰鬱で満たすことになった。

これは、今や、われわれにとっての晴々とした天国 Providence であり、わが国民は、こうなれば、あらゆることがそれらと共に幸運にも首尾よく運ぶはずの、希望と自信を伴って、広く祝福が与えられたはずのものであった。しかし、どういうものか！神の王国からのこうした微笑みを下さる神のもとにあっても、われわれは虚心かつ感謝に満ちて歩を進めることはなかった。われわれが、われわれの救済について神を礼賛するのではなく、われわれのほとんどの者の間には、度を越した飲酒、神を冒瀆するようなく profane > 誓約、大ボラ < ranting >、長口説 < ranting >、自慢話 boasting、売り込み口上 singing 以外には、ほとんど何も見られなかった。それに踵を接して、われわれの笑顔が、険しい顔付き < frown > に代わってすぐにも、われわれの晴れやかな日の光が、暗く、差し迫った暗雲に覆われることになった。われわれは、以前のように、虚心や、誇りを持って、祈りを捧げるよりも、落胆の余り、塞ぎ込んでしまうことになった。

天下晴れた日の光の中の最初の雲は、2月23日に見張り台 Point Look-out で観測された。聳え立つような船舶、大型軍艦が、黄金島の沖合に蠢き、小型のスクナー船⁶⁹と、報知艦<公文書速達船 dispatch-boat >の通った跡に in her wake 現れた。日没までには、西からの風に向かって<to >停泊し⁷⁰この湾の入り口を偵察するよう見えた。この戦艦は、船の船尾楼にあった裸の彫像 image <船尾楼 sterncastle >を備えた、サン・ジュアン・ボティスタ *Bautista* 号で<p.262 >、ドン・ディエゴ・ペレド Peredo が、着岸のために接近し、この湾内にどのような船舶がいるのかを考慮に入れたいという、せっかちな rash ピミエンタ Pimienta の熱狂にいたく悩まされていたのだった。前日の荒れた海と風が、この旗艦の前檣 foremast を折り、その結果ペレド Peredo は何も分からず、この船をこの半島の崖まで引き寄せるとはと恐怖に陥った。夕暮れまでにピミエンタが好奇心を抑えて、——今となっては月明かりの中にも何も見えない状態だったので——ペレドがこの船を沖合に出すのを容認した。船は翌日に戻り、次の日、別の船団 others、随行するスループ船や輸送船 transports と共にサン・フランシスコ号とエル・フロリザント号に合流した。彼らは沖合に巡航したから、子供のようにこの湾の入り口を注視し、舵をあげて、いくばくかの想定された警戒の態勢で走行するために数隻の小船が入って来ただけだった。

非常に多くの船舶の姿 sight、彼らが不動の体制を取ることを継続することからくる逆説的な恐怖、などが入植者たちを狼狽させた。「われわれは毎日のように、われわれの砦や船舶への攻撃が始まるのが当然のように考えた」とポーランドは言った。「わが人民たちは心の内にある恐怖や怯え threat でいっぱいだった」。評議員たちのギブスン、リンジ、

69 schooner、フォアマストとメインマストの2本、時にはそれ以上のマストを持ち、下部マスト全部に縦帆を装備した帆船。

70 停泊する lie to、

そしてヴェッチ以上に、恐れおののき、悲観的な考えをした者はなかっ
 だろう。彼らは、停戦 terms を訴えるスループ船を送り出して即座に
 も降伏 capitulating を望んだ。フォウナブが激しい痛みの中、彼らの会
 合にやって来たが、怒りのあまりそれを忘れた。彼には降伏の意思はな
 かったと述べたが、彼がそこにいる間は彼らもそうであった。彼らは、
 彼の主張と言うよりも、彼の侮蔑 contempt によって黙り込んだ
 silenced が、当座の間、差し当りは for the moment 彼らの言うこと
 は降伏しなかった。彼らは頑固に権威あるフリを保ったが、この植民
 地の防衛は、今やフォウナブに鼓舞された士官たちの手にあった。熱が
 あるにもかかわらず、彼の自信は揺るがず、それが人に伝わった
 infectious。ある交戦でのマスケット銃兵たちの射撃が少ないと聞かさ
 れて彼は、役に立たないイングランド人の報奨金 pewter 全部からもっ
 と投入することを助言した。彼は、加工が十分でないビスケットや傷ん
 だ干魚の惨めなほどの割り当てを増やすのに何もできなかったが、彼は
 部下たちに、彼らの同僚たちがツバカンチの防御柵を占領した時に彼ら
 の腹の中にあったのはこれ以上ではなかったことを思い起こさせた。彼
 は、ドラモンドがその砦が直近の泉から半マイルしかないのに、怒り狂っ
 た抗議にしか時間を使わなかったのを知って、ドラモンドに失望した。
 彼は水を満たす樽を命じ、その防御柵内に収容した。ニュー・エディン
 バラの多くの小屋には 300 名の病人がいたので、彼はそのうち労働や戦
 闘用に治療が可能な者たちを回復させるため、船にいた船医たちを上陸
 させた。< p.263 >はニューカレドニアの地図のみ< p.264 >彼が随行
 させていた若い海軍士官のジョン・スチュアートなる者が、焼打ち船を
 製造できると< fire-ship 焼打ち船 >申し出たが、彼は非常に熱心にそ
 うするのを願い出たと告げられた。彼は、旗艦の甲板長 boatswain であっ
 たジェイムズ・スペンスを伴って、ハウプ・オブ・ボウネス号の平定快速
 船< fly-boat >を与えられ、彼はさらに捻れた twisted オーカム

oakum、帆布 canvas、タールを塗った tarred 削くず shaving、松脂や油脂の桶などをそれに積み込み始めた。スペインは、可能かつ必要な場合な時、スペイン艦隊に向かってボートを出す場合に 500 ポンドが提供された。彼は勇敢にも同意したが、彼が生還する希望は望めなかったので、その金額がスコットランドの配偶者に支払われるのを望んだ。自らの責任において、フォウナブはその保証を与えた。

毎夜、見張り台の夜警が、スペイン船の灯、海と空の暗闇に鮮明な閃光を見ることができた。毎日のように信号弾の音、トランペットを吹く音も聞こえた。夕暮れにはいつも、明け方にいたよりもこの湾内にこの船団が少しだけ接近した。海岸では、不安な恐怖の中で、人々は気もそぞろになった。小屋の一つでは、こぼれた火薬が偶然に発火したこともあったし、火が消される前にそれが以上の多くを台無しにしたこともあった。「これによって、われわれの多くが所持品や衣服を失った」とポーランドは述べた。「さらに、病人たちのいく人かは猛火から彼らを救い出すべく慌てて引き出されて、屋根のないところに曝されたが、そのことで彼らの病状を増長して、その死を早めてしまった」。これは明らかに警告だった。「こうして、主の怒りがわれわれの周りに伝わり burnt、われわれのほとんどがほんやりとしか心に止めなかった」。

2月27日に、フォウナブのこの湾に従ったジャマイカ・スループ船の船長ナサニエル・オウルドは、書簡類と急送便とを携えて出発するのに同意した。彼は出発を切望した。旦那方 dons とスコットランド人たちのこの気狂いじみた争いは、彼にとって問題ではなかった。この評議員会から理事たちへの書簡類は簡潔で、軍人らしいもので、フォウナブによって書かれたかのように読める。それは降伏については何も語らず、ツバカンチでの勝利の知らせは与えても、彼らが海からのいかなる攻撃にも抵抗するとの入植者たちの自信に満ちた確信 belief であった。「われわれはここに、彼らの〈スペインの〉船団を受け入れるのにわれわれ

に可能な限り最良の状態をしいた。そこでわれわれが望むらくは、貴公たちが彼らの陸上部隊<陸軍>について周知しているのと同程度に、朗報をわれわれが提供できることである」。この急送便は、家族や友人たちへと、聖職者たちから議長 Moderator へとの書簡と並んで、陸上の指導者<大佐 captains>の一人、トマス・ハミルトンに委託されたものだった。彼は夜明けにこのスループ船に乗船し、< p.265 >カレドニアに食糧を送致する前に、スコットランドに向けてジャマイカを離れることはないとフォウナブに約束をした、トマス・ドラモンドに後に合流した人物だった。彼も同じく出発を望んだ。果たして、ジェイムズ・バイレスが出發する時彼がこの植民地を離れることにはならなかったのだったが。

ナサニエル・オウルドは、西向きの風に乗って夜明けよりも数時間前に彼の船で出發したが、スペイン人たちには見つからなかった。ハミルトンの運んだ書簡の中には、ターンブルから彼の従兄弟宛のものがあつた。マスケットの弾丸がなおも彼の肩にあつたので、彼はペンをとることが叶わず、この若者はある友人に口述した。「今や、われわれの湾には、12隻のスペイン船がおり、そのうちのいくつかはかなりの戦力を持っている。彼らの意図たるや、われわれには分からない……………」。
 <p.266>

第5章 一国民の感傷 Humour

「この国民の名誉と利害が注意を引いた」

スコットランド、1699年10月から1700年5月

10月早々に、恐ろしいイングランド商人のサミュエル・タッキーが、

大急ぎでエディンバラを離れたが、国境を越えてニューカッスルに着くまで安心しなかった。そこで彼は郵便局横のホワイト・ハートに宿をとり、ロンドン市長 Lord Mayor 宛のヒステリックな手紙を書いた。1週間後にこれは、ジェイムズ・ヴァーノンのぎゅうぎゅう詰めの机の上であり、この大臣 Secretary にはタッキー氏の心がひよっとして混乱したのかと疑われたが、北方からやって来たいかなる情報であれ無視することは、彼のやり方ではなかった。彼はすぐさまニューカッスル市長に手紙を書いて、この気を揉んでいる anxious 商人の尋問を依頼した。「彼は、エディンバラからひどく驚いてやって来たばかりのようで、彼らが現下のところ陥っている混乱を口にして、ダリエンからの見通しが立ち消えたと考え始めているとのことだ。彼は奇妙きてれつな要求をして、しかるべき馬と共に3、4名の男を、ロンドンにやってくる自分を確保するために、彼のために派遣してほしいとのことだ。彼の想像では、スコットランド人たちが彼を待ち構えているとのことだ」。

ヴァーノンは、スコットランド人たち people of Scotland が、「とても騒々しくなって、わが国の入り口で失望状態にあった」と解釈したが、彼は、彼ら<スコットランド人たち>がおのれ自身の愚かさを責めていて、彼らの失敗<不運>のことで彼の国<イングランド>を咎めてはいないと考えていた。タッキーのような怖気づいたイングランド人たちが群がったところで、こうした不満をうんざりさせるほど利用できるジャコバイトについての情報 knowledge ほど、彼を煩わせるものはなかった。彼はすでに、アイアランドから、ジェイムズ・スチュアート⁷¹の支持者たちが、そこで、「ダリエン事件 affairs によって引き起こされた不満 annoyance に少なからず希望を託し」ていることを耳にしていた。ロンドンにいた、こうした国王に属するスコットランド人従者たちもま

71 大僭称者オールド・プロテクター

た、特にシーフィールドなどは、不安にさせられていた。彼はそこに1月ほど滞在しく p.267 >、オランダからの国王の帰国を待ち構えており、彼の恐れたのは、彼の同国人たちの行動が、あの再合同 reunion という望みの持てる明るみ warmth を脅かすのではということであった。スコットランドからの知らせはすべて、不穏なものであった。「想像できない」と、オーミストンのコックバーンはカーステアーズに書き送った。「この国中にあのような雰囲気蔓延しているというのに。この国<国民>は一体、どうした大事件の渦中にいるのか……………」エディンバラの群衆が無邪気なイングランド人たちを路地に追い詰めるだけでなく、この会社が、国王に対してさらなる議会による抗議の上奏文を要求しているが、シーフィールドは、それがウィリアムにとってはいかに不愉快なことを熟知していたのだった。

ジョージ・モファット⁷²のニューヨークからの手紙は、疑いもなく確信されたが、痺れさせるような numbing 衝撃が怒りや痛みが変わると pass into、この会社の評議員総会 Councillors-General が、ミルン・スクエアに急いで召集された。僅かな注意で short notice 手続き orders はあったが、彼らの中から43名が出席し、その多くはスコットランドの大貴族であった。彼らは激情と気高い自己規制に満ちた者たちで、この会社の信用が回復されるまで誰一人財力を惜しまないとの意思を誓った。彼らは全会一致で、国王に呼びかけるべきことに合意し、「当初この会社を立ち上げ、その擁護を約束した人々から、最も自然かつ誠意を持って、全幅の自信と期待のうちに」、11月に国会を召集することを要求した。誰一人としてそうした意見の一致を長らくは維持できなかった。その次に彼らはこの奏上文 Address の文言をめぐり言い争うことになった。穏健派たち moderates は、この上奏文 Proclamations に対

72 モーファット、不詳。

して真っ向から反する抗議に直面して、再考の時間があるべきだと述べた。ベルヘイヴン卿の感情的な言い回し syntax に啓発された、短気な者たちが、喧しく投票を言い立て clamour て、「声明の延期か前進か」となり。後者が通過した。その次にも長丁場、声明の起草のための委員会に出席するのは誰が適当か？最終的な選出はいつか？それには、ベルヘイヴンとその支持者たちにより支配された。だが、それから今ひとつの議論、断食と祈祷の国民的日時を要求するのに、誰が議長のところ派遣されるのか？彼らは、晚餐と燈明の candle-time の間中、座ったままで、セイント・ジャイルズの鐘が10時を打つ時間になる程遅くなってから帰宅した。

起草の委員会は、ミルン・スクエアで翌朝会合がもたれ、議会の再会とその布告に対する抗議の双方を含む上奏文草案が正午までに準備された。評議員たちのいく人かが聖餐をとっていたロスのコーヒー・ハウスに、ベルヘイヴンがそれを持参した。彼らはいくつかの些細な修正を示唆し、午後には評議員総会の大会全員の是認をみた。< p.268 >ベルヘイヴンには、それが国王に提示されるものだとの要求と共に、ロンドンのシーフィールドに送致するよう伝えられた。

ミルン・スクエアの別の部屋で、9名の理事たちが、総会でもあるかのように、ニューヨークでこそこそしているように思われた以下のような任務放棄者たち deserters— パタースン、ヴェッチとドラモンド兄弟、加えて地上役員たち Land Officers に向けた、怒りをあらわにした書簡を準備していた。それには「貴兄たちの親愛なる友であり、つつまじやかなしもべ」との署名がなされていたが、恥ずべき、不名誉な、ならず者にして、臆病者といった、耐え難く、厳しい言葉で満たされていた。「あなた方が口を揃えて説明したような、この上もなく価値があり、難攻不落の入植地」を、頼みの綱である面々が、どのようにすれば置き去りにできるのか、不思議であった。隣の部屋で準備された上奏文にもか

かわらず、それはあの布告 Proclamations を、あの植民地の放棄に対する容認<弁明 excuse>なるものとして受け入れを拒絶した。あれほど喜んでいて誰もが悪党であり、臆病者だという内容だったが。彼らのすべて——紳士たちも平民たちも——直ちにカレドニアに戻るよう命令されていたのであり、「失策に対する唯一の救済策は、貴殿たちにかなう最善の方法に、それを修正することだ」との警告がなされていたのだった。

この書簡は、ダニエル・マッカイの手によって、ニューヨークに送られ、カレドニア号が11月19日にアイラ島 Islay⁷³の入り江 Sound⁷⁴に錨を降ろした、3週間前にすでにフリゲート艦⁷⁵ スピーディ・リターン号の船上にあったのだった。そこでこの船は、あたかも、怒った両親の顔を見て、不承不承になっている常軌を逸した子供のように1日間留まった。ロバート・ドラモンドが理事たち宛の報告を書いて、その一人は自らの従兄弟のロウレンス・ドラモンドだったが、2名の若い士官たちと共にフライボートでそれをグラスゴウに送らせた。それはこの植民地の悲劇的な歴史に関する短い説明を与え、尚且つ、イングランドによる布告 Proclamations のため陸上要員たち Landsmen は、母国からの救助が受けられず、この会社それ自体が抹殺されたとみなしたことを明言していた。それは虚言であった。その言うには、もしも乗組員たちや船舶の中にニューヨークからの搬送を望む者があれば、入植者たちは、悦んでカレドニアに戻ると述べたのだ。それは、評議員たちの、突然で怯えた撤退を非難していた。「彼らは、その錨を引き揚げる前の48時間<

73 アイラか、アイレイか？ インナー・ヘブリディーズの南端、インナーとアウターの違いは、本土に近いグループをインナー・ヘブリディーズと称する。スカイ島などと異なり、アイラ島は平坦で、元はマルドナルド一族の支配下にあったが、15世紀にはキャンブル族の拠点となり、その後グラスゴウとの関係が深まる。

74 sound には、海峡、瀬戸、入江などと訳せる場合があり、この場合ジュラ海峡が存在する。アイレイ海峡とも解釈できる。

75 Frigate 18 - 19 世期の、大砲を備えた木造快速艦。

まで>出発 come away の意図を決して知らせないだけでなく、当時その打診を彼らに行なった植民地のいく人かからの彼らの意図をも隠蔽していた」。

帰還を遂げ、尚且つその故に全員から汚名を被ったのは、ウィリアム・パターソンであった。カレドニア号が、11月21日火曜日にグリノックに到着した時、彼は衰えて病気となったまま海岸に運ばれた。< p.269 >彼がエディンバラまでの60マイルを移動するには14日も必要であった、彼はその多くの日々を、宿屋やある友人の家屋の病床に過ごした。ついに思いやりのない理事たちの前に現れるに際しては、数々の質問が彼に浴びせられる前に、十分な報告を整えるために辞去を願い出た。彼はそれを2週間で仕上げたが、それは、あの悲惨な植民地に関する、悲劇を極めたとは言え、この上もなく誠意ある報告の一つであり続けている。

カレドニア号と共に戻った者たちには一切歓迎はなかった。あったのはただ、ののしりと反感だけであった。結局のところ、彼ら一人残らずは耐えて、彼らの仲間たち numbers の3倍が死亡した時に生還した奇跡として、友人たちからの不平 contempy や家族の不名誉に対する恥辱によって困惑させられたのだった。ジェイムズ・オズワルド卿は自分の息子に会うのを拒否した。グラーズゴウのウィドウ・フィンレイ一家からは、彼の家からの早朝便で a morning's ride、その少年がトマス・エイクマン < Aikman、BBC >宛に手紙を書いて、彼の父親が「裏切りとか臆病者」とか呼ばれる中で針のむしろだったと、抗議し、彼がカレドニアで死亡した方が、よほど良かったかもしれないことに不詳無精で bitterly 受け入れた。

私が私の父を怒らせるようになった should have angered my father ことは誠に申し訳ないが、やむを得ないことである necessity has no laws。私が

ここにいなくなれば私の過ちもなくなることを願う。私には何故なのか分からないが、もっと不幸不運のせいではと確かに思う。と言うのも、率直に言つて、私の人生は、その出口を死の入り口まで決して見出せないような私自身の迷路から成り立っているのだと、理解している。私にはカレドニアに戻る意図はないが、私の運命が私を導くどこか別のところにと言うこともある。もっとも、立ち戻つて、私の国のことを思いながら安楽に横たわることも、私の解決の一つとなるかも知れないが。私が今に至るまでそれを私が持ち続けることは神を悦ばせたが、その場所でそれを失うことは、(私の表現では) 幸運ではなかったので、その結果、私がこの街にやってきて以来、私の知ることになった、私や私自身に関係した別の人々に降りかかった数多くの不幸 miseries の光景を望むことで大変幸福であった。私の父親をこれ以上困らせるのを、私は決して望まなかったし、今でも望まない……私が望むのはただ一つ、あなたが彼に私が彼の長寿と、豊かで、幸福であること、さらに彼が私と共にあった時以上に残りの子供達と共に一層幸福にあることを、望んでいると伝えてくれることです。

この国民の気質 humour は、復讐を求める絶望的な飢餓状態にある。暴徒たちがイングランド人たちを怒らせるのを目撃することができなかったとすれば、この惨めなカレドニア人たち<スコットランド人たち>を痛めつけることになり、彼らの黄熱病の皮膚や彼らのすり切れた真紅<軍服>を知らしめることになるだろう。< p.270 >イングランドからの知らせは、暴動や大かがり火を引き起こしました。遅かれ早かれ、熟練した 残留した評議員たちは何もすることがなかった。国王は、——シーフィールドによるとあの「賢明な君主であり、自国民を悦ばせるのに吝かでない」——総会からこの上奏文を受け取ったはよいが、何一つ好意を持たなかった。彼は自らの北の王国がそうした哀しい破滅 loss に耐えたのを遺憾に思うと平然と答え、当然のこととして彼は常に

その交易を守り奨励するとしたが、国会の緊急な招集についてはそれ以上の言及はなかった。「われわれは、この国民の理想 good がそれを必要とする時には、国会の招集を命ずるのである」。国民の善 good とは、ウィリアムの意見によれば、3月5日以前には必要でなかった。彼らは、この侮辱的な上奏文の拒否によって、怒り、恥をかかされたが、評議員たちはこれを見事に利用した。彼らはこれを印刷して、この国王の返答をひろめ、この怒りによって別の上奏文に対する支持を引き起こした。つまり、彼らが望んだのは、この国の最も影響力がある人たちからの30から49名の署名であった。それはこの会社の権利と特権について、国王に思いおこさせ、国会の緊急招集がそれほど必要では決してなかったことを忠言したのだった。

ウィリアムのスコットランド問題に関する根気 patience は、常に浅く、不機嫌な終わり方をすることになった。12月12日、彼はそのエディンバラの枢密院に書簡を草した。彼がその臣民たちに彼らの正当な権利を否定することは未だかつて決してなかったし、折り目正しい方法で彼に誓願する彼らの権利を蔑ろにしたこともなかったが、彼が全てを包み隠さずとした時に用意されていた第2の上奏文のことを耳にするや、第1のものに対して答えようとしたものに、彼が堪えようとしていたこと以上のことがあった。彼が特段に不満であったのは、二つの上奏文共に、彼なり彼の政府なりに愛着を示したことが決してなかった党派的なものに啓発されたそれだと言う事実にてであった。彼が枢密院に命じたのは、彼の不満を周知し、この上奏文を停止するために法の範囲内で効果的な措置を講ずることであった。この会社の友人たち friends は、喜んでこの不満を知らしめたし、当然のように彼らは、それが表された無作法な調子を強調したのであった。その効果は劇的で、国王やその僕たちの思惑とは逆のことになった。18世紀のスコットランドを高揚させた、国民的統合からなる、あの熱狂的な兆候の存在であった。個人であれ、

団体であれ、あらゆる種類の人たちが、この上奏文への署名の権利を要求した。複写したものが、州や自治都市に送られ、それは、スコットランドの会社とスコットランド議会に対する、国民の抗議、その忠誠の宣言となった。大法官 Lord Chancellor のマーチモント伯は、< p.271 >、国王に請願する臣民の権利に挑戦する、つまり、国王が、スコットランドの王冠を受け入れた時に、彼が行なった約束を破ることなしに、ウィリアムはそのような干渉 interference を主張できないと言うことなくして、この契約者たちに逆らった手続きはできないと理解した。「われわれは極めて微妙な重要案件を手にかけている」とマーチモントはシーフィールドに語った。「そして、法によっては支えられない手続きに踏み込むことがあれば、包みは開けても、品物が売れないことになる」。彼は何もしないことに決めたのだった。

こうした燃えるような思い上がりと憤りの中で、いくらか遅れてはあったがこの国はドルフィン号の乗組員を失ったことを思い出した。それは、おそらくあの最初の入植者たちのいく人かが同情や尊敬に値するものたちだったことが思い起こされたので浮かび上がったのだろう。9月以来、当時ダニエル・マックイがその船の捕虜の知らせをもたらした時、ピンカートン夫人とそれ以外の涙脆い親族が、この会社に消息、助力、あるいは国王に対しての訴えを願い出していた。不幸な乗組員たちはまだカルタヘナの土牢にいたが、そのうちの4名、すなわち、ピンカートン、ジョン・マロック、ジェームズ・グレーム、そしてデイヴィッド・ウィルスン少年が今ではスペインにいると考えられた。彼らは9月にハバナに連行され、そこからベンジャミン・スペンスと共に、カディスへと。ピンカートンはカルタヘナでの彼の部下たちのスペイン人たちによる取り扱いにひどく怒っていた。「彼らは毎日のように彼らの奴隷たちと共に引き回し」、と後に彼は書いている。「彼らの城壁で労働させ、通りの清掃をさせた。それに止まらず、」通り過ぎるものたち全てに哀願して、

物乞いを強制し、どうか for God sake、彼らの命を救うべくいくばくかの施しを求めさせた」。彼があの最初の植民地がカレドニアから消え去ったのを耳にした時、彼はピミアンタに彼と乗組員たちとの解放を求めた。「彼が私に告げたことによれば、古くからの〈年老いた old〉総督 Governor は私の意見とは異なったらしく、私を解放はしなかったが cloud not let me go、必然的に私は馴染みの old スペインに送られざるを得なかった」。彼がそこを立ち去る時には、すでに7名の部下たちが命を落とし、残りはバリアヴェント艦隊の奴隷として送られた後であった。

彼女の苦勞した粘り強さにもかかわらず、国王に対して囚人たちの代わりに嘆願を願い出ることが決まった12月まで、総会はピンカートン夫人の訴えを考慮しなかった。王室の袖を掴む気を捉えることがなく、バーンティスランドで使用されないままになっている3隻のフリゲート艦を早目に願いでることも彼は思い出したのだった。この元気に溢れた楽観的な願いをロンドンにもたらした者は、ベイジル・ハミルトン卿であったが、この堂々たる、あの公爵の喧嘩好きの兄弟であった。彼は不詳不承足を運びく p.272 >スコットランドにおける自らの個人的な諸問題に列席するのを明言したが、彼よりも有能な人間は他にいたのだった。確かに、その頃この国王の意にかなう者はほとんどあり得なかったし、ウィリアムは子供じみたように彼とも面会を拒絶した。シーフィールドを通して彼は、この会社が、国王の宮廷に参内するような礼儀もさらさらなく、玉座や政府に対する敬愛の持ち主でもない人間を送り込むことは遺憾であると説明していた。この拒絶によって恥をかかされ、使い走りであるかのような扱いをされたことに怒りはしたが、ハミルトンは根気強くロンドンにとどまった。彼の自尊心に食い込み、シーフィールドに弁明を送り、彼の行動にあった過去の違反 offense をいかようにもと許しを乞うたが、ウィリアムはハミルトンの一族を嫌い、その強情な一

員に許しを与えることも、受け入れることもしようとはしなかった。彼の言い分は、それはシーフィールドが彼に持ち込むならこの誓願に目を通すと言うことで、彼がそれに対して、1月10日に返事をする、国王はハミルトンを見捨て、スコットランド枢密院に直接書き送った。彼は確かに、スペイン国王に、*ドルフィン号*の乗組員たちの解放を願っていたが、3隻のフリゲート艦については、……彼らがそこにあるのはスコットランド沿岸を防御するためであるから、議会の忠告なしに彼らを処置することはできない、と。

温情あるカディスのイングランド人、マーチン・ウェストコウム領事 Consul が、たまたまこの囚人たちがそこにおり、彼らの様子を見ることを聞いた。彼は彼らの惨状に怖気づいて、総督に彼らを拘束から解放するように説得した。彼はマドリッドの宮廷で訴え、この男たちの惨状と無邪気さは、確かに彼らの情け深い解放を正当化すると説得した。次に彼が彼らのことを尋ねると、彼らはすでにセヴィリアに送られ、そこで海賊としての裁判を受け、疑いもなく執行されたと告げられた。

スコットランドでは、2月の初め、この会社が1隻のスループ船、リースのマーガレット号を借り上げ、その船に入植地向け食糧を積み込んだ。〈その結果〉この理事たちは、第2次遠征隊は、カレドニアの放棄を認めて、牛肉、干魚、さらに小麦粉などよりも、一層に強い激励が必要と見なしたように思われた。このスループ船の若き積荷監督、パトリック・マクドウェル⁷⁶には、あらゆる陸上ならびに海上役人たち Land and Sea officers 宛の書簡が託された。「われわれは貴殿に対して説明の必要はない」、それによれば、「この国の名誉と利害がどれ程までに投入されたか、振り返ることはない」。最初の入植者たちは宗教も道徳もないところで行動した。彼らの多くが、慎しみのないゴロツキやふた心のある

76 不詳??

ならず者であり< p.273 >ニューヨークへの退避中に会場で命を亡くした者たちでさえも、カレドニアでの崩壊による栄光を無慈悲にも否定していた。第2次遠征隊に加わった若い士官たちのいく人かは、この王国で重要な家系の関係者たちであったので、もしも彼らが彼らの義務を果たさなければ、彼らの不名誉は、一層耳目を集めることになるかと熟知していただろう。このことによって彼らは互いに徳を高めるように啓発したに相違ない。ある人の生まれが著名であれば、尚更彼が、彼の一族を凡庸な人たちから区別するかの家柄 qualities を放棄する様なことがあれば、彼の墮落 degeneration は一層貧しいものとなる。「第一次遠征隊に加わった士官たち officers の記憶にとって、拭い去ることができない lasting 不名誉 disgrace である。最も貧しい入植者たちでさえも彼らの人生の汚点 viciousness として憤慨の対象とされ、彼らの中で真面目で勤勉なものたちが彼らの義務を遂行するのに慎重であった vigilant のに対して、彼らの多くが公の負担で何ヶ月にもわたってそれは節度に欠け、墮落した生活を送ったと言う」。

マクドゥエルも同様に、その友人のパターソンが、アリゲザンダ・シーフィールドやトマス・ドラモンド宛に書いた書簡類を携えていた。パターソンはまだ、その健康を取り戻してはおらず、彼の言うには、彼の心を曇らせものを書くのを難しくしている、風邪や熱っぽい体質に苦しんでいた。彼はいかなる場合でも神の御手を見ることができた。つまりハイストリート、コウゲイトや議事堂小路のほとんどもを破壊した最近の火災においても、この会社の船団の喪失においても、第一次植民地の放棄においても。しかしながら、少なくとも全能の神 the Almighty は彼に恩恵を与え、彼の報告は理事たちの承認を得た。「私のすべてのトラブルの中で、」と彼はドラモンドに言った、「この会社とこの世界に対して、私が些かでも邪なあるいは、手前勝手な意図を持ったことはなかったと言うことを疑問の余地のない証明を示すためにこれまで生きてきたこと

に些かでも満足したことはない」。彼は、ドラモンドの勤勉さと誠実さを讃え、あの grendier 近衛第一連隊大佐 captain は、——もしも彼がこの手紙を受け取るようなことがあっても——その顔そのような温情と寛大さに驚かされるかもしれない、と言うのも、彼は、パタースンが愚直で、お節介だったという彼の信念を未だかつて顔に出さないことはなかったのだったから。パタースンもまたシーフィールドに対して、彼らが、無骨で、成り上りの政治家とか、陰謀を企む派閥とか水兵帽を被った評議員でないとするなら、寛容を持ち、他人の病に耐えることを推奨した。マクドゥエルに別れを告げる手紙の中で、彼はこの若者に、行動を慎んで、その父親を尊敬し、さらに「こうしたバカ騒ぎをするような水兵たちが今後われわれを見下すことが決してないように配慮すること」を説得したと。

この書簡類のすべての中には、パタースンから理事たちに対する、熱病のような熱っぽい注記<ノート>が存在した。

それは、国王がスコットランドに対して、彼らの議会の招集を約束した日であった、マーガレット号が出発する前の3月5日のことであった。<p.274><だが>その招集はなかったし、ロンドンからの説明もなかった。この月が終わろうとする時、その国民の上表文 Address は、——それは今となっては怒れる人々に対する約束の箱 Ark of the Covenant⁷⁷であったが——トウィードデイル侯爵 Marqui に導かれた4名の総会 Council-General 構成員たちによって、イングランドに運ばれた。彼らは、かつてハミルトンが辱めを受けたようには無視され得なかったが、シーフィールドが3月25日の日曜日の午後キングストン宮殿にそれらを持参した時には、彼らには、それがいかに歓迎されていないか、国王がそのために割く時間がどれほど少ないかが分かった。一

77 国民契約、1638年の署名、あるいは神がユダヤ人たちに与えた契約。

団の護衛兵と移動馬車 *travelling-coach* が、国王をハンプトン・コートに運ぶために階段のところ待機していた。彼はそれを寝所で受け取り、彼に衣装をつけていた従者以外は誰もいなかった。彼は、4名が国王の白い手に接吻しようとひざまづいた時、冷淡で短い挨拶をしたが、彼がそれを受け取ったものの開封はしなかった。彼はあたかもそれがすべてであるかのように、それを黙して眺めた。シーフィールドは、首を垂れていたのだから聞こえはしなかったが、トゥウィードデイルが何かモゴモゴと言ったが、それは明らかにこの上表文 *Address* が大きな声で読み上げられることを要求したのだったが、なぜかと言えば、国王はそれを彼に戻したのだから。トゥウィードデイルは、それを、挑戦的な声で明瞭に読み上げたブラックアダーのジョン・ホウムに手渡した。もう一度沈黙があって、その次にトゥウィードデイルは、彼らがどのような返事をスコットランドに持ち帰ればよいのか、謙虚に尋ねた。

「おやおや *My Lord*」とウィリアムは冷たく声を発した、「お前たちは、国会の開会を5月15日に行うように命じたと思う。だから、もっと早く開会するのは不可能だ。だから朕は、お前たちがこの厄介ごとをなしで済ますべきではないか」。

謁見は終わり、彼は入り口に移動した。ブラックアダーは、彼の順路に立ち、意固地になって道を譲る *step aside* のを拒んだ。怒りを制しつつ彼は、国王が、この上奏文 *Address* が議会に対する請願であるにとどまらず、彼らの会社の安全と、カレドニアにおける彼らの親族たちの安全に対する彼の同国人たちの深い関心の証左でもあることを理解するようにせがんだ。ことの真偽は、国王は巧みに言葉を返し、国会が開催されれば確かに分かる。

彼らは寝所から出る彼を追いかけ、大階段を下り、春の夕べの煌く霧へと向かった。彼らは、彼の馬車がハンプトンコートのほうに走り去るのを、馬丁や従者たちの中に立ち竦んでいた。

スコットランド国会は、5月15日まで招集がなかった。< p.275 > 8週間以上の警告があつて、国王の委員 Commissioner であつたクィーンズベリ公は、国王の調度 equipage——あの豪華な馬車 carriages の列、彼をホリールードの館から国会の大広間まで導いたに相違ない先導者 outriders や警護人たち——は、5月24日以前には整えられなかった。会期が始まった時には、それは騒々しく影響力のない状態だったので、国王の僕たちは、すべてに先だつて、国会は、それを、スコットランドの道徳や宗教の悲しむべき状態を議論すべきだと言う、ずる賢い提案で開始した。神学をその特有のプライオリティにおいて否定できず、この会社の一行 party は、「例の、ダリエンにおけるわれわれのカレドニア植民地は、その法令 Act に照らして in terms of the Act 合法的かつ正当な植民地であり、議会はこれを維持しなおかつ支援を与えるとの動議に入る前に、3日間待機したのであつた。5月30日に、クィーンズベリが喉の痛みを漏らし、その結果は、疑いもなく、パーラメント・クロウス国会少路の焦げた木材の鼻をつくような匂いのせいであつた。彼はほとんど口をきかず、この大広間 Hall にあまり長時間座ることで健康を危険にさらすつもりはなかつた。それ以上に、動議 motion は国王が意見を求められる問題を提起した。彼の命により、国会が6月20日まで休会とされた。

それは10月末まで再び招集されず、その時よりもはるか前に< 以前に > 全ては失われることとなつた。

「スコットランドであれ、イングランドであれ、
すべての良識ある人々の満足が行くように」

1700年、1月と2月、ロンドン

カレドニアをめぐる小冊子戦に費やされたすべての紙類とインクの中で、ウォルター・ヘリスの本こそが、——信頼できるからではなく、人と言うもの man はヒト human であって、その行動のほとんどが、彼らが従うとのたまう理想 ideal の気高さ nobility ではなく、利害によって動かされる存在であることを認める限りにおいて、想像力を掻き立てるただ一冊の書籍である。彼は自らの品のない、真実と虚構の人を楽しませる混合物を、ダリエンを放棄しようとするスコットランドの擁護 *A Defence of the Scots Abdicating Darien* と呼び、〈スコットランド〉最高刑事裁判所次官 Lord Justice Clerk が、治安妨害の嫌疑によって絞首刑執行人によるその焼却が命じられても、彼が仰天することの可能性もなかった。新年になるとこの会社になり代わり、それに対する答えが、無署名のスコットランド植民地の失敗の諸原因に関する一研究 *Inquiry into the Causes of the Miscarriage of the Scots Colony* によって、返答が行われた。これは当然ながらイングランド人と、それに関する論争に遅まきながら参加した上院 the House of Lords を侮辱したものだ。〈p.276〉彼らは、ピータバラ卿がいくつかの怪しからぬ一節を大声で読み上げた時には耳を傾けたが、それが国王と国会の名誉を傷つける段になると、宮廷の庭で焼却が命じられた。彼らは一致して、国王に申し上げ address、1695年に両院による奏上文 Address を思い起こし、ダリエンにおける有害な mischievous 植民地がアメリカにおけるイングランドの植民地の交易に害をなすことを明言した。

ヘリスはすでに、彼がカレドニアから戻って以来、イングランドに居住しており、彼がフリート・ストリートの居酒屋で殴り書きをした時には、お腹の大きくなった彼の配偶者はロチェスタでこじんまりした家を与えられていた。すでにジェイムズ・ヴァーノンに雇われた paid 文筆の下働き hack ではなかったとしても、彼は、海軍大佐 captain⁷⁸ グレイ

78 ベン・ショットの書物『英国博覧記』日経BP、2004年、124ページによる。

ドンの胴体に衝撃的な剣のひと突き sword-thrust を見舞ったことに対して、事実上彼が赦免を勝ち獲れるだけの彼の忠実な功労を期待する、すでに確実にこの国務大臣 Secretary's の立派なスパイであった。彼の書物には同時に、サルトーンの前レッチャーによる高尚だが、厳密ではない論法を持つ論考において返答がなされてはいたが、この外科医 surgeon が論争を望み preferred、ほとんどの人たちが自分の意見を作り上げた書物の見開きの余白 gutter においては、これはまったく重大な挑戦を行わなかった。しかしながら、ヘリスは『研究 Inquiry』で激怒した incensed、なぜなら、それには、彼が羨んでも仕方がないほどの不快な venomous 文体で書かれた、彼に対する鋭い lively 攻撃が含まれていたからであった。多少の真理とともに with some truth、彼が考えたのは、この会社が、国民奉答文<勅語奉答文> National Address を求める援助を促進するためにその公表を正当と認めて、1月7日に彼はケントからヴァーノンに手紙を書いた。「私は、<最新の>下品で scurrilous、反抗的な小冊子に回答する意図があり、かつ、スコットランド人であれイングランド人であれ、すべての賢明な sensible <分別ある>方々に満足を望む者であります。そこには、すでに私が提供しておりますことのすべてを、要領を得て、単刀直入に ad rem 立証すること以外に何も含まれてはおりません。つまり、それによって彼が下品な中傷を私に行なっており<誇る asperse >ます悪意に満ちた虚言 malicious lies に並べて、wherewith、私が明らかにできると存じております。

妻の分娩に付き添うためにロチェスターに出発する前に、ヘリスは、1月初めにロンドンに到着した4名のスコットランド人士官たちを、——彼が手配したので——護衛することに関わっていた。彼らはあの植民地をセイント・アンドルー号で出発して、ジャマイカからブリストルへの便を手に入れていた。一人はマッカラン・マックリーン Machaln

Maclean、マデイラへの航海上でドラモンド兄弟を告訴したハイランダーで、残りはフォウナブ大佐、スチュアートとストレットンであった。帰国したカレドニア人たちがいかなる受けとられ方をしたかを耳にしていたので、彼らの誰一人として母国への帰還に熱心ではなかった。国王のスコットランド担当大臣 King's Scottish Secretaries であった、シーフィールドやカーマイケル卿 Lord Carmichael は、彼らに質問をしたが、ベイジル・ハミルトン卿も同様だったが、彼らは見当たらなかった。20世紀の新聞関係者なら、うらやんだであろう慎みのない impudent 手法で、< p.277 >ヘリスは彼らを居酒屋に隠した。彼は、念入りに closely 彼らを尋問した、と彼はヴァーノンに報告し、「彼らが口にしたことの中の肝心な部分は、広く印刷物 prints で掲載されることには慎重を期した」が、その重要部分は、この会社に打撃を与え、イングランド人に有利なものだったから。彼がスチュアートとストレットンがこの会社に忠実だと知ってから、彼はそれらをハミルトンに渡し、ヴァーノンには、彼らは二人とも害をなすことはほとんどない、というのも一方は狂人で、他方は愚か者だからと報告した。しかしマックリーンとフォーブズとを、彼は平然とシーフィールドとカーマイケルのところに連れて行き、彼がヴァーノンのために開始したこの仕事が今や国務大臣たち Secretaries によって継続されていることを確信させた。彼はこれら<の仕事>を完全に放棄しておらず、彼の密偵のひとり、すなわちクラウチ Crouch <ペコペコする、うずくまる>という取り立ててびったりと当てはまる名前を持つ人物の監督と監視に委ねた*。ローチェスターからヴァーノンに書き送るに際して、彼は、この元気旺盛な enegetic 部下 subordinate から受け取ったばかりの報告のきれいな複写を同封した。

* おそらくは、出版業兼下働きの文筆業者。<プレブルによる原注>

フォウブズ大佐は、2晩、私とともにおられました。彼の言われるには、彼らのご期待に沿って国務大臣たちに口上を送りましたが、心底はあなたご自身と同様です。シーフィールドは、この布告 Proclamation によってあの植民地に障害があったかどうかと尋ねています。彼らの答えは否でした。果たして彼らに食料を積んだ船があったのかどうか？ 答えは肯定的でしたが、それにもかかわらず、購う財貨も債権もありませんでした。大臣 Secretary はお喜びでした、あの方はずっと故国のために by his country 心を砕かれてきましたので。あの方が人々にお教えになったことは、ヘリスが中には口汚く言う者もある書物を一冊作成して、彼が人々にそれを判読してその意見を言うようにされています。マックリーン大佐がお答えになって、彼が居酒屋でそれに遭遇し、それを紐解いたが、彼は誓って、その中には虚言はないとのことでした。おやおや、と大臣は言われ、あなたはそう言うべきでない。と言うのも、あなたは私同様に病気であるかのように考えられるのだから。それじゃ——！マックリーンは言う、どなたでもお喜びになるように真実は否定しましょう。

彼自身の人気のないことにはとりわけ軽くしか触れずに、シーフィールドはこの会社に背いて使用する爆薬 explosive ammunition を所持することを明らかに喜んでいたが、カーマイクルは不安であったし、彼は兩名<シーフィールドとカーマイクル>がヴァーノンの資金によって買収されていたのを疑っていた節がある。次の数日間、クラウチはこの士官たちと夕食を共にし、彼らを徹底して尋問した。彼らが彼に告げたのは、この会社の代理人 agent のジェイムズ・キャンブルが、パターソンのユグノーの<ユグノーの Huguenot >友人であり、ポール・ドミニクの滞在所であった、ベッドフォード・コート of the 三匹のライオン Three Lions Tavern なる居酒屋に連れて行ったことであった。< p.278 >そこで彼らは、彼らの国の名誉を思い出させたベイジル・ハミルトン卿に

会見もしたが、それに対して不信感を与えるようなことは何もしめせず、言うこともなかったと話して、マックリーンのハイランド気質 temper が、ロウランド人 Lowlander は彼に名誉のなんたるかについて教示できるとの示唆によってかき立てられた。「キリスト教国の支配者 Lord の誰一人であれ」、彼は断言した、「私に真実を隠すことはない!」。彼はハミルトンに再び会見するのを拒否したが、フォーブズは、ジェイムズ・ヴァーノンがおそらく、兩名のところの人に人を遣わし、例の植民地について尋問するだろうと言われた三匹のライオン Three Lions Tavern にもう一度赴いたのだった。彼らは行くべきではなかった。フォーブズは、策略か愚鈍かで、礼儀 good manner の一点で意見をしたが、彼らがそうした招待を受け入れてはならないとも。ハミルトンは、取り乱して at lost 彼らを見限り、スチュアートとストレットンと共にスコットランドに戻った。

あの「スコットランド植民地失敗に関する一研究 *Inquiry into the Miscarriage of the Scots Colony*」の著者が誰かは、明確には確かめられなかった。それは時にサルトーンだとされることもあったが、彼に独自の構築する文体を持ち合わせてなかったし、彼の正体を隠すような試みであっても、その種の無作法<誤り>を冒すはずもなかった。反対に、その『一研究 *Inquiry*』の著者が同時に、フレッチャーにも責任があったダリエン植民地の擁護をも書いたと言う意見 suggeston も奇妙であった bizarre <怪奇な、奇妙な>。1700年のイングランド政府にとって、著者の問題は政治的なもので、学術的なものではなかったし、1月に国王は「『一研究等々 *An Inquiry etc.*』との題を持つ、人心を惑わし false、恥ずべき scandalous 背信的な traitorous 文書 libel」の著者と印刷業者との捕縛に対して500ポンドと200ポンドの賞金を与えるとの布告に署名したが、その意図はイングランドとスコットランドの臣民たちの間に誤解を創り出し、暴動を教唆することにあつた。その月が終わる前にアン

ドルー・ベルがイングランドでそれを印刷し、アイアランドでそれを印刷したパトリック・キャンブルが逮捕された。ロンドンでそれを流通させたかどでさらに3名が逮捕された< take up >。おそらく彼らは尋問に際してはピタリと口を閉ざしたが、おそらくそれ以上ではなかった。2月3日に出版者の伝達人 Messenger サイモン・チャップマンが、ジェイムズ・ホッジスの逮捕に対する権限許可< 令状 >を与えられた。その午後、大変な驚きと途方もない無実を断言して、ホッジスがドルリー・レインのフェザント・アンド・クラウンにあったその住処からゲイト・ハウス監獄に放り込まれた。

彼は愛想はいいが、得体の知れない容貌だったが、この事件の記録によると、この限界で彼を説明するものはほとんどなかった。彼はおそらくスコットランド人で、ギニー金貨の入った財布からの音楽に合わせて、辞書を駆使する器用な筆致を操る有能なパンフレット作家であった。< p.279 >彼は政府による逮捕を受けたけれども、彼がゲイト・ハウスに到着した時の最初の行動が示したのは、彼が最近まで雇われ三文文士だったと言うことだった。彼は大蔵大臣 Secretary to the Treasury の、ウィリアム・ラウンズ⁷⁹に書簡を送り、彼の逮捕は不当であったと明言した。月並みな言い方 cliché は一切使わずに彼が申し立てたことは、生まれた当日同様に彼が無実であると言うことだった。「私、国王のこの上なき敬慕者にしてこの政府の友であります、は両者の利益に反する意見を持つなどのかどで有罪となるはずがありません」。彼はラウンズに対して彼の擁護を懇願し、過ぎ去った好意 kindness に謝意を表して、次の機会に見えるようなことがあれば、「私めが現在不当にもそ

79 いわゆる大改鑄に際して、削り取り clipping 行爲によって生じた銀貨の含有銀の不足の事態に対し 1695 年大蔵次官 (Secretary of the Treasury) ラウンズは既存鑄貨より減価分勘案した新銀貨を流通させるべき事を主張、対して大蔵大臣チャールズ・モンタギューやジョン・ロックが、兌換貨幣の擁護者として論理を展開、最終的にはロックたちに軍杯があがった

の著者だと疑われている challenged 書物とは異なる色彩を持つものを、御供覧に示すべく備えてきました」何某かを大臣閣下 secretary にご覧に入れると約束した。

目撃者たちが次々と現れても、法務長官 the Attory-General からジェイムズ・ヴァーノンに派遣されると、彼がこのように無罪を主張しても支えにはほとんどならなかった。フェザント・アンド・クラウンの女給 serving-girl だったアン・ダンバーが、ホッジス氏の仕事に he was writing、その部屋に頻繁に出入りしたことを証言した。かの女は尋ねたのは、いったい何なのかとすると、「彼は、それはダリエン会社で、それによってスコットランドはよろしくお願ひとなるが、イングランドは悲しむことになる。なぜなら、議会在がそれによってうまくやれなかったが、もしも彼らがこの会社を支援して居れば、スコットランドは過去のイングランド以上に豊かになっただろう」、と。彼は率直に彼女に捲し立てたが、彼は彼女をその原稿に触れさせはしなかった。彼女がそれが彼の部屋から無くなったのを知った時、彼が彼女に言ったことは、ハミルトン公がそれをスコットランドに持ち去ったのだと。

エリザベス・クラークは、彼女がスコットランドにおいて多年にわたってホッジスを知っていたし、彼女がロンドンを訪れた際に彼の推薦によってフェザント・クラウンに宿をとったと述べていた。「今年の夏、彼女は彼が1書を書いているのを観察し、彼は彼女に、それはスコットランド・アフリカ会社についてであって、ハミルトン公がスコットランドに赴く前の晩にスコットランドに送らざるを得なかったと述べたが、そのことを彼女はその年の終わりに向かうくつまりあくまで前の年>頃だったと考えている。」ホッジスの要請で彼女はそれをセイント・ジェイムズ・ストリートにあった公爵の滞在所に持参したのであって、ロンドンにあった何人かのスコットランド人たちが彼女にそれが絞首刑執行人によって焼却される運命にあったことを告げるまで<告げる以前に>

それについては何も語らなかったのであった。「そして、同じものに対する恐れから、彼女はその女主人に、ホッジスはその居場所を離れる remove ように望むのを乞うた」。彼は二人にたいして、その消却についてのすべてをよく知っているが、何も恐れることはないと話した。

フリート・ストリートのシップという店名の居酒屋の時計職人、< p.280 >ジェイムズ・カフ氏< 不詳 >によって提供された奇妙な証拠もあった。彼とホッジス氏は、1685 年の失敗に終わったモンマス公の反乱で共に闘ったが、最近まで両者が会い見えることはなかった。「われわれは、コヴェント・ガーデン近くのチャールズ・ストリートにあったチョコレート店< ハウス > 近くのある家屋に共に通ったが、そこで私はいくつかの書類が書かれるのを目撃して、その何箇所かには目を通した、と言うのも、彼にはそれについての秘密を隠そうとする様には見えなかったが、それが近々印刷に付されると述べたから」。カフは印刷業者を見つけようと申し出たが、ホッジスはすでに見つけてあると述べた。「私の記憶の限りでは、私が目にしたもののすべてが、あの同じ書物に瓜二つであった、すなわち、国務大臣閣下が私に見せた本であった。私がはっきりと思い出すことができるところのものは、スコットランドが放棄したダリエンの擁護と題された文書への反論 *An Answer to a libel entitled A Defence of the Scots Abdicating Darien.* であった」。彼が国王によるこの著者と印刷業者への布告 Proclamation を目にするまで、そのことを大して考えてなかったが、その後 4 通の無署名で驚くべき書簡を受け取って衝撃を受けた。その複写は彼の法廷供述書法廷供述書にピンで止められていた。

その最初< 第 1 >は、次のように始まった。もしも、あなたをご覧になったその業務 *business* がスコットランド諸文書 *Scots papers* に関係するのがわかれば、それはあなたにとって法外にも 500 ポンドの価値があることになるでしょう……そのことでカフは、もしも彼がその著者を立腹させるようなこ

とあれば、彼はそれを後悔し、彼の父親は嘆き悲しむことになることと戒められた。第2はこうであった。1日かそこらの後、あなたは、チャーロット・ストリートで遭遇 saw する羽目になったそうした文書について、気軽に話をしてきたと理解するが、それにもかかわらず私は、あなたが何であれ公にすることのないように心の底から切望します。カフは、オルボーン橋の側にあった3トン Three Tuns なる店でその晩にその著者と会うように招待されていた。彼がそこに赴かなかったので、彼が受け取った第3の書簡では、カフにその著者に知らせる責があったとしていた。つまり、私はあなたが今朝そこにいたのに、遅くなってしまったことを後悔しているでしょう。それからこの著者を捕らえるために罠が一つかけられていた。すなわち、翌朝カフは第4で、最後の書簡を受け取った。昨夜のあなたの罠はうまく準備されていなかったもので………私は今後こうした方向であなたをこれ以上煩わせないことにします。しかし、私は、あなたが自滅の方向に向かうままとします

詳細ではあるが、こうした証拠によって、ホッジスがその時確信させられたとするには十分であった。他にも少なからずさらし台や絞首台に送られた者も少なくなかった。しかし、法務長官トマス・トレヴァー卿がこの文書類をジェイムズ・ヴァーノンに送った時、彼は、罪科を根拠付けるようなものはその中には何も見出せなかったと述べた。ヴァーノンは同意し、ホッジスは監獄 Gate House からか放免となった由。数ヶ月後、彼はシーフィールドとウィリアム・カーステアーズに申し立て、国王からの1年に300ポンドの年金を確保するのに助力を求めた。「私は、それに値することができ、< p.281 >なおかつ国王への奉仕に捧げるように最善を尽くします。わが父親が権威よって国王に奉仕したように、私は彼の執務室を私の研鑽と著述によって満たすのに努めます」。

ウォルター・ヘリスもまた、変幻自在な reversible 上着 coat を持つ三文士は、お偉方の有り難さを決して諦める必要はないのを発見してい

た。7月8日にジェイムズ・ヴァーノンは、海軍本部に短いノートを送った。「陛下の命令は、ウォルター・ヘリスの処刑（彼と彼の指揮官との間に先日生じた論争に基づいた）は停止されるべきことだ」。

「わがままな、ウィリー〈ウィリアムの別称〉、

そなたはいまだにわがままでしょうか……？」

エディンバラ、1700年6月

ロバート・ピンカートンと彼の4人の仲間は、セヴィリア Seville のアルカサルの大きな壁の下にあった監房 cells から連行された。彼らは数週間日の光を見てはいなかった。今やそれは彼らの上に降り注ぎ、彼らが引き合わされた裁判官たちのいる部屋の見事な唐草模様や円柱の上で光を放っていた。彼らは高潮し、痩せ細り、彼らの手首や足首に嵌められた拘束物によって傷ついており、母国からは見放されたと考えていた。ピンカートンは、彼に対する罪状の何一つも認めてはいなかったが、もしも彼の命が残ることがあれば、彼は少なくとも尊厳を持って死に臨むことができると考えていた。彼の言うには、彼は海賊ではなく、交易に携わる by trade、船長であった。彼はスコットランド会社の株式は一切持たず、一月にやっとのことで10ポンドの賃銀に過ぎなかった。彼には、インディアンたちを抑圧したり、スペイン臣民たちを痛めつける意思も皆無だった。彼には、ダリエンという地域がスコットランド人たちが来る前にどこかヨーロッパの君主に属していたとは考えていなかった。彼ら自身の領域の中でスペイン人の交易者たちと競う意思も皆無であった。「われわれが持っていた積荷は、ほとんどわれわれ自身の人たちの使用のためにあって、イングランドの島嶼に適したものであった。というのも、その構成部分は、白や青のリネンの布地、カツラ perwigs、男女が使うスコットランド風の靴、あの国のスペイン人たち

の間では身につけられることが非常に稀な、スリッパなどであった」。

彼は有罪とみなされ、ジョン・マロック、ジェイムズ・グレアムやベンジャミン・スペンスも同様であった。すべて死刑を宣告された。少年デイヴィド・ウィルンは、決してダリエンには戻らぬとの約束のもとで放免となった。判事たちは、評議員会総会 Council-General とスコットランド会社の理事たちも < p.282 > 同様に、海賊行為との理由で有罪と明言した。この植民地に対するその全ての行動にスペイン王 Crown が注ぎ込んだ費用の勘定が、イングランドとスコットランド国王に提示され、支払いが要求された。カルタヘナの総督 Governor は叱責を受け、彼がすべきことは、形式張らず、手本とすべき方式でドルフィン号の乗組員たちを罰し、彼らの指導者たちをスペインに派遣することで国王を煩わせないことだったと伝えられた。

4名の男たちは城壁の下の暗闇に連れ戻されそこで、彼らの処刑の方法と日取りが決定されるまで待つことになった。

2日後のスコットランド、5月30日には、クイーンズベリ公の嘆かわしい声が、国会の短い会期を終わらせた。奇妙な巡り合わせで、同日に公刊された1冊の小冊子が、国王の僕に対する国民の怒りと、彼らの苦しみ grievances を国会に取り除 remedied かせるようにという凄まじい希望を、激しい表現で表明した。それは、「スコットランドの唸り声 groans と悲しむべき不満が国会の上級裁判所 < High Court of Parliament 最高裁判所 > にぶち撒けられた」と呼ばれていた。100年にわたって、それは述べた、スコットランドの政治的指導者たちはイングランドの従者であり続け、再三にわたってスコットランド人たちを仇敵として扱ってきたが、今後そうはゆかない。神聖不可侵であったすべてのことによって、国会の高貴な代表者たちは、彼らの古代の勇敢な国を守ろうと嘆願を求めてきた。「いかにわれわれの主権、統治権 sovereignty や自由が侵害され violated、法律が蹂躪され、我が国の交易が妨害されたか、考慮し

て欲しい。わが同胞がいかにほどまで飢餓に苦しみ奴隷状態となり、われわれの植民地が放棄され、わが国の船舶が放火され、海外で焼失したか。それにもかかわらず、われわれの請願は拒否され続き、われわれの会社は挫折させられたのだ」。

この冗長な恨み言 wordy jeremiad に対するもっとも間近な immediate 反応は、それを遠回しに＜間接的に、遠回しに obliquely＞攻撃した国王の僕（しもべ）からやってきた。ヒュー・パターソン＜不詳＞、外科用の薬剤師 surgeon-apothecary、と印刷業者であったジェイムズ・ウォトソン⁸⁰が捕らえられ、誹謗する libellous 小冊子の作成と印刷を理由に逮捕され、トルブースに送られた。しかし、これは一枚をはいだけ、アザミの繁栄に変わりはなかった。国会の怒った構成員たちが、クィーンズベリの高圧的な行為に憤慨して、国王宛の別の上奏文 Address を書き上げた。貴族たち、騎士たち、さらに市民たちの署名がなされて、それには「言葉で言い表せない彼らの苦悩と失望とが」表され、ウィリアムに対して、この国の苦悩を取り除くのに必要な限りの会議にとどまる自由を国会を招集するのを懇願した。＜p.283＞これがキングストン宮殿に6月半ばに到着した時、シーフィールドでさえも、激怒したトランペットの警告の響きを耳にしたし、4世紀にわたるイングランド人たちとの争いを知らせたのだった。クィーンズベリからのどきまぎした急送便 dispatch を支持しながら、彼＜シーフィールド＞とアーガイル伯とは、国王に対して、スコットランドのカレドニアに対する権

80 不詳、Dorward1979では、スコットランド commonest names では、スマスを筆頭とする25位となっている。Watの息子、ノルマンがもたらしたゲルマンの名前。スコットランド的には、Watt、決してこの国=スコットランドでは採用されないが、イングランド的にはWatts, Wattkins, Watkinsonとなるようである。クリスチャン・ネイムを姓として使う場合も、飾り気がないのがスコットランド方式らしい。アダムという姓はスコティッシュだが、イングランド的にはAdams, Jackならスコティッシュで、イングリッシュならJackson, Edwardならスコティッシュで、イングリッシュならEdwardsのように。Watson, Rpberton, Wilsonは以上の原則に反しはするが、原則は原則だそう。

利を明言する法令 Act に対する彼の承認 assent を与えるように助言 advise した。ウィリアムは拒否した。「そもそもわれわれにそれができたならば」彼はクィーンズベリに告げた、「最初にそれをしただろう。しかし、われわれがそれを考慮するのに時間を使えば使うほど、われわれにはそれができないことが確かなものとなるのだ。」個人的には彼はスコットランド人たちにはダリエンの彼らの植民地について愚かな存在だと考えてはいたので、彼はオランダの一友人に対してそのように書き送っていた。彼らが they <スコットランド人>彼に困りごとを引き起こして、彼のオランダへの出発を遅らせたのだった、「朕は、これまでに以上にそれ<オランダへの出発>を望んでいたのだが」。

かつてスコットランドには、この国王が自らの故国 homeland に引退することによって二つの王国を結びつけることができたと言うことを今でも考えるような愚かなものたちが数多くいたのだった。亡命したスチュアート家の子息の誕生日であった6月10日には、篝火 bonfire と夜明けの銃声 pistle によってジャコバイトたちが大ぴらに祝杯をあげた。彼ら<ジャコバイト>は、国王を望んだカエルにジュピターが与えた<許した、授けた>コウノトリとしてウィリアムが現れると言う幼稚な風刺を公にした。城に駐屯 garrison した連隊のファーガスン大佐 colonel が、カーステアーズに対して、「大逆罪 treason はとても公然としたことになったので、それに注目するものは誰一人いない。人々は、国王が彼らにカレドニアの合法的な植民を認めないとしても、彼らは、4万の手勢で再び彼にそのことを奏上するのだと公然と話した。各所のコーヒー・ハウスなどでは、この都市の中心で人目につかないように灯され、恐ろしい風の勃発を心待ちにする、炎のことについてコッソリと、笑みを浮かべる会話が交わされた。

その風、あるいは少なくともその小さな突風 gust が、6月20日に起こった。トマス・ハミルトン大佐 captain が海上で死亡したが、彼の携行した

急送便 dispatches は、ついにツバカンチ Toubacanti における榮譽ある勝利の知らせと共に、無事その日に到着した。理事たちは時をうつさずそれを公表するのを命じたが、エディンバラは夕暮れまで群衆の活動の場 playground であった。町の警備隊 Town Guard の雇われ人たち pensiners は、これを防ぐべきだったろうが、ツーロン教会 Tron Church 際の衛舎 guard-house に無理からぬことながら understandably、引き込んでいた。

暴動は控えめに始まった。午前中には、国民の英雄にしてジャコバイトのお気に入りのハミルトン公 Duke of Hamilton が、ツバカンチの祝杯を飲み干し、いま一度国民的演説を求めた。彼は勝ちほこって引き揚げ cheered away、その名声を保ち、その屋敷を当夜の損壊から守った。< p.284 >真昼を過ぎ past noon、十字鍵 Cross Key 酒場 inn では、「カレドニアズ<スコットランド人たち>」を自称した紳士たちの集まりが、ツバカンチに、この会社に、そしてその敵対者たちを呪って、何杯も酒杯を飲み干した。彼らは、この町のすべての窓が歓喜の蠟燭で照らされその決定を強いるため外にいる群衆に要求することを提案し、また合意した。夕暮れまで、ハイストリートやキャノンゲイトでは数多くの焚火が燃やされ、その赤い炎の輝きが、石で加工された地面 stone-faced land や、壊れた破風 broken gables の上を漂った。暗くなる前まで、群衆はまだ灯りのついてない窓に向かって大声をあげ、返答のない窓から石を投げた。叫び声や喚き声の向こうでは over、ガラスが割れたり、花火が破裂して、セイント・ジャイルズの鐘の音が、ジャコバイトの馬鹿騒ぎ rant の間、狂気のように鳴り響いた。強情なウィリー、君はまだお元気？

三度にわたり、キャノンゲイトの暴徒はカーマイケル卿の邸宅のドアを打ち壊し、その窓を粉々にして、怯えた彼の召使が灯したロウソクをひっくり返した。もう一つの群衆が、法務長官ジェイムズ・ステュアート卿<の屋敷⁸¹>になだれ込み、件の老人に、『呻き声と不満 Groan and

81 エディンバラ、ロイヤル・マイルのセント・ジャイルズの反対側、北側には旧ステュアート邸が残る。

Complaint』の著者であり、印刷業者だった人物を解放する許可書に署名することを命じた。さらに、この通り沿いにはシーフィールドの奥方が、その亭主の見事な窓の崩れたガラスの周りでは蹲み込んだ、シーフィールドの細君が、彼とその王家の主人に対する罵りを叫ぶ、数多くの言葉を操る声に耳を傾けた。しかしながら、ホリールードの館では、クィーンズベリ公爵がぐっすりと眠り、その眠りが妨げられることはなかった。どんな騒ぎの騒音があろうと、彼は翌朝のことを召使には請け合った。ほんとに暴動なんてあったのか？

群衆は、ロイアルマイルの下方の<北側の>端の部分のハイストリートでそれと合流するために移動し是認の叫びをしながら、真っ赤になった窓のところから身を乗り出した王に奉仕する紳士たちから激励を受けた。マリシャル伯爵は、篝火や割れたガラスの背後にジェームズ王の今にも起こりそうな帰還を思い描いていたであろう。

二つの群衆がネザボウ・ポートで出会い、彼らはその門の鍵をひったくると、彼らはこの騒々しい都市に閉じ込められることが不可能となった。< p.285 > Lord Advocate 法務総裁がすすんで、あるいは威嚇 under duress のもとでも署名し得ない正当な保証も待たずに、彼らはトルブースを急襲した。彼らは、ベイリ・ジョンストンなりその他の長官 magistrates たちのもとにあった、営倉 gurad-house から、英国人の衛士 pensioners<gentlemen-at-arms> たちが出帆した時、オークの木の裾野<根元>や鉄製の扉に火を放った。不幸な老兵たちは、大した障害もなく、後になってから、「拔身を携え、意気揚々と」と報告されたが、放擲された。トルブースの扉が開け放たれ、内部にあった最初の者は銃剣を佩き<携え>、2番目の者はサーベルを持っていた。番人のエイチソンは、賢明にも所持する鍵を引き渡し、パターソンとワトソンは解放され、勝ち誇って連れ去られた。他の拘束者たちもまた解き放たれたが、家畜泥棒のかどでそこにいた何人かの手に負えないスコットランド高地

人たちも含まれたが、エイチスンは、「盗人 bougary ないしは盗賊 theft」との嫌疑を受けてきた2、3名を手元に置くのを許された。騒擾と乱闘 noise and thurst、松明の炎の中で、一人の看守が銃剣のひとさしで負傷し、ドラモンドなる獄吏 gaoler は、帽子、かつら periwig、マント cloak、指輪 ring ならびに自らの従軍用品 sutler の中のすべてを窃盗にあった。

それから群衆はパーラメント・ホール（議事堂）に歩を進めた。何人かは、内部に入ったかも知れない。と言うのも、衣装管理部の業者 Undertaker of the Wardrobe が後に、玉座 Chair of the State の黄金の縁飾りが、盗まれたとの報告があったから。その晩は、城の守備兵には、暴徒たちに対して出撃を取行するいとまは皆無だった。いわゆる格子戸は閉まっており、半月要塞<砲台> Half Monn Battery は要員が配置されていたから、総督 Govenor は、まもなく包囲されることを確信していた。彼はこうした思いで深く意気消沈していた。彼の糧食は二日しか持たず、部下たちは気力を失い、その砲台は放置状態だった。彼は軍事境界線の向こうに炎が震えるのを眺め、群衆に耳をそば立て、何もしなかった。

夜明けまでに、暴徒たちは消耗し、飲んだくれたから、彼らの唯一の動きが、突然のように、目的のない悪意による混乱となり、しばしば彼ら自身の同調者たちに反する方向に向かった。ネザボウ近傍の家にフラフラ戻っていたヒュー・ブラウンは、止められ、ダリエンのために祝杯を飲み干すように言われた。彼は、しこたま飲んでしまったので、それ以上は飲めないと申し立てたが、群衆はもう一杯飲み干すように言ってはばからなかった。「来いよ、旦那がた」彼は言った、「あんたがたの誰にもできないことをやろうじゃないか、つまり、カレドニアの健康を祝して1パイントをもどそう」。彼はそうして、一名の忠節な輩として声援を受けた。こうして、あの高貴なツバカンチの暴動は終わった。正午

よりよほど早く、< p.286 >壊れたガラスの上で、確かな足踏みがあった。アーチボールド・ロウ大佐 Colonel の射撃隊が、銃剣を佩き、マスケット銃に火薬を詰めて、この町に行進してきた。

彼らは枢密院からの命令に応じて到着したが、そうするのが安全なことが分かるとすぐに、ホリールドの館に集まっていたのは怯えた数名の者たちだった。クィーンズベリはその寢床から彼らにまみえるためにやって来たが、怒った様子だったが、後悔したようでもあった。彼はその秘書官に威張り散らし、可哀想な部下にロンドンに便りを書くように命じて、彼に主人の平穏な夜に対してとにかく責めを負うように言った。今やこの射撃隊がエディンバラを指揮下に置き、院が断固とした態度に出た。装填された二門の大砲がネザボウ< 街の入り口の門 >に配置され、ロウ Row の連隊からの前哨兵たちが picquets 飛び回り flying、街の守備隊 Town Guard が無理やり夜間の門限時間 curfew を強要し、憤慨した布告によって、「いかなる理由によらず、この領域内のどの知事都市であれ、大っぴらに呪言が行われるような表現 expression に使われる、いかなる照明ないしは篝火 bonfires」が禁じられた。暴徒の中には、拘束され take up たりする者もあり、銃剣 bayonet を携えトルブースに練り込む調理人やサーベルを振り回すその人物の仲間も含まれていた。だが、ひとりも逮捕される者はなかったし、せめてマーシャル伯がお城に派遣されるべきだという、院内での提案も残念ながら拒否された。信じられていたことは、5000 ポンド・スターリングを上回る価値のあった窓ガラスを破壊した暴徒たちは、ジャコバイトたちに煽動され、かつ指図を受けていたと信じ込まれ、枢密院は、彼らの指導者たちを投獄することで、彼らに何がしか悪事を引き起こさせるような意思は皆無だった。

1 週間も経つと、歓喜も恐怖も忘れられた6月28日の金曜日の午後4時には、評議会総会と理事会総会との特別会合がミルン・スクエアで開催された。昨日の夜 yester-evening 以来、この町では、恐るべき風

評が広がっていた。今やそれは確信され、彼らはローデリック・マッケンジがニューヨークのサミュエル・ヴェッチからの一通の書簡を読んだ時、呆然として耳をそば立てた、フォウナブのキャンブルが、5月5日にそこに到着したとのことであった。スコットランド人たちく Caledonians > スペインに降伏し、あの植民地を完全に放棄した。

→第6章 「神の素晴らしいお慈悲」に続く